

異世界見聞録

Msan

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

普通の現代日本人女性がドリフターズの世界に漂流する話。

目次

漂流者、襲来

第1話

1

第2話

12

国盗り

第3話

22

第4話

30

第5話

42

第6話

49

廃棄物、襲撃

第7話

57

第8話

64

第9話

75

ドワーフ解放

第10話

85

第11話

96

第12話

102

首都強奪

第13話

110

第14話

118

第15話

128

第16話

136

第17話

146

第18話

153

第19話

160

サルサデカダンの戦い

第20話

第21話

第22話

第23話

第24話

172

180

189

197

205

漂流者、襲来

第1話

1.

オルテ帝国南西。エルフ占領地区。

深い森に覆われたこの地はその名が示す通り、かつてはエルフの治める土地であった。だが弓を得意とし、誇り高い森の民として知られるエルフ達は今やどこにもいない。いるのは人間と、亜人と呼ばれる奴隷だけである。

四十年前、東方の大国オルテとの戦に破れて以来、彼らは皆例外無く農奴の身に落とされた。森に入る事も、弓を持つことも作ることも禁じられ、過酷な労働と重税を強いられた。移動は勿論婚姻の自由すら無く、女は繁殖期になると領主の館に隔離される、といった家畜も同然の扱いであった。

誇り高い彼らがそんな扱いに甘んじるわけもなく、戦後まもなくは反乱を企てる者も少なくなかった。しかし、圧倒的な物量と軍勢の差。加えて長寿ゆえの成長と世代交代の遅さに足を引っ張られ、今やオルテの衰退を期待して、隷属に甘んじる日々であった。

しかし禁止と言われれば寧ろしたくなるのが人の心理であり、子供であれば尚更の事。それはエルフも変わらず、戦後生まれの兄弟であるマーシャとマルクはその典型とも言えた。

彼らは大人達の目を盗んではしよつちゆう森に忍び込み、秘密の遊び場としていた。

二人とも人間で言えば十歳にも満たず、気力と活力が有り余っている時期である。常に人間に怯えて縮こまっている村にうんざりして、滅多に大人の近寄らない、食べ物も豊富な森に逃避するのも自然の成りに行きであった。

事が露見する度に父親や兄から叱責を受けたが、まだ親の庇護に疑問を持たず人間への恐怖も知らない彼らは懲りるところか、却ってその執着を強めていった。

それがより顕著になったのは、森に漂流者が現れるようになってからである。

彼女を見つけたのはほんの数ヶ月前。森の奥の丘の上に建つ廃城で行き倒れていた。

漂流者について、兄弟が知っている事は殆ど無い。ただ自分達とは全く違う世界から来た人間である事。見た目も使用する言語も全く異なる事。エルフは漂流者と関わってはいけない、という決まりがある事だけだった。

彼女を助けたのを契機に、少年達は更に足繁く森へ通うようになった。

死にかけていたという事もあるが彼女は子供の彼らから見ても頼りなく、とても一人では生きていけなさそうに思えたからだ。言葉は通じないが絵や身振り手振りを駆使し、食べられる木の実や草などを教えてやると兄弟は神のごとく感謝された。

それは兄弟にとって初めての経験だった。

村では兄弟が最も若かったため、守られる経験はあれど頼られる経験は一度も無かったのだ。

兄弟はこの時、誰になんと言われようとこの人間の力になろうと決意した。

それは二人が初めて得た人間の友人であった。

時は流れて現在。

漂流者は辿々しいながらも、エルフと簡単な会話をできるまでになっっていた。

片言でほとんどが単語の羅列でしかなかったが、エルフにとってこの成長速度は驚きであり、その一助を自分が担っていると思うと誇らしかった。

「おーい、レイ……こっちに来て、早く」

倒木に腰掛け休憩していたレイは、離れた場所で遊んでいた兄弟の呼ぶ声に顔を上げた。

二人が血相を変えて急かすのを見て、ただ事ではないと察して早足で近づくと果たして男が一人、血塗れで倒れていた。

慌ててレイが駆け寄り、脈と呼吸を確認する。

「なあこれ、漂流者だよな？」

「さっきまで起きてたけど……死んでるのか？」

「うんにや生きてる。二人とも、手伝って。」

言うや否やレイは上着を脱ぎ、男の上着も剥ぎ取った。

兄弟はそれを見てそれぞれ近くの木の枝を鉋で切り落とし、男の側に並べる。

慣れた手つきで上着の腕部分に枝を通し、即席の簡易担架を完成させる。前をレイが、後ろを兄弟が担当し三人は一路廃城を目指した。

運ぶのは難儀だった。三人がかりとはいえ、成人男性。それもかなりの大男で鎧を着て刀も佩いている。

途中何度も泣き言を吐きつつ、なんとか廃城のある丘の上まで運び、あと一息だと気合を入れた時、頭上から静止の声がかかった。

レイ同様、片言のエルフ語である。しかし凜とした、男とも女ともつかない若者の声であった。

樹上で矢をつがえ、兄弟に警告を発する彼は、レイと同じく漂流者である。名を那須与一。その名の通り、かつては源氏に仕えた武者である。

しかしその容貌は書物に語られる益荒雄の印象とは真逆の、まだ前髪の上げ切らぬ美少年であった

兄弟からしてみれば、レイよりも興味深い存在であった。しかし金髪碧眼は勿論、エルフなど見るのも聞くのも初めての与一は警戒心を解かず、一定の距離を置いていた。

兄弟が事情を説明するがまだ不慣れな与一は聞き取れず、慌ててレイが日本語で補足する。すると与一はぞんざいに「そこに置いてけ。」と言って兄弟を解放した。

二人を見送った後、降りてきた与一にレイは責めるような視線を向ける。

「与一くん、なんだったんですか今の。」

「いや申し訳ない。血と火薬の匂いをさせて帰ってきたものだから、何事かと思いました。」

「はあ、早くそつち持つてください。」

レイにせつつかれ、与一も塔に運び入れるのを手伝うと間伸びした男の声が出迎えた。

声の主人は中央に置かれた炉の前を占拠し、くつろいでいる。名を織田信長。彼もまた漂流者であり二人の後、本能時の変の最中にこの地へと流れてきていた。

白髪混じりの蓬髪の中年男で、擦り切れた着物といい無精髭といい、とても一国の主とは思えぬ様相だったが生まれ持った気品がそうさせるのか、不思議と不潔な印象を与えなかった。

男を担架に乗せたまま炉のそばに降ろすと、信長は顔だけそちらに向けてぼやいた。

「なるほど、こいつあひどい。」

血まみれの男を前にしてもまるで動じず、適当な箱に頬杖をついている。

動く気配が無い事を察するとレイは炉に薪を足ししつつ空の桶を押し付け、水を汲んでくるようせき立てた。

反射的に受け取ってしまった信長は、与一と顔を見合わせ苦笑するとやがて諦めたように大人しく外の井戸へと向かっていった。

手当を終える頃には完全に日が落ちていた。幸いにも男は見た目の割に怪我自体は大した事は無く、碌な設備も無い中でも一命を取り止める事ができた。

遅くなったこともあり、木の実などで簡単に夕餉を済ませようとすると与一が男の分の食べ物をとってくると言って腰を上げた。

満月とはいえ深夜に、しかも治療の心得のある与一が出払ってしまったのをレイは心配したが、彼は「できる限りのことをしました。あとは彼次第です。」というので結局見送った。

信長は治療を見るのに飽きたのか、いつの間にか舟を漕いでいる。レイは火を見るついでに昼間採ってきた薬草や山菜を仕分けることにした。

手帳を開き、逐一確認しながら作業を進める。手帳にはレイがこの地に来てから見聞きした全てが書き記されていた。

今開いているページはエルフの兄弟や与一に教わった、薬草や食べられる山菜について解説したものである。

まだ一つ一つ確認しなければならなかったため、作業には時間がかかった。ようやく終えて、軽くその場で伸びをしていると、ふとレイは男に顔に血の気が戻りつつあることに気づいて、男の傍に座り直した。男はまだ若かった。随分軽装だが身なりや体つきから、名のある武人と見て取れた。指貫籠手の両胸と背中には丸十字の家紋が記されていたが、それがどの家のものかまではわからなかった

背が高く、手足も長く隆々としていた。精悍な顔つきや引き締まった口元は子供の頃に見た金剛力士像を思い出させたが、あどけなさの残る寝顔には不思議と恐さを感じず素直そうな印象を受けた。

今日の出来事を男の絵姿と共に記していると、いつの間にか信長が背後から覗き込んでいた。

待ちきれずに干した無花果を齧りつつ、レイが驚いて咄嗟に隠すのを見てニタニタと笑う。

「相変わらず、大したもんだ。」

「……ありがとうございます。」

別に見られて困ることは書いていない。それに以前に見せたことはあるがなんとなく気恥ずかしい。

信長はそれをわかっていて、度々こうしてレイをからかっていた。レイの親ほどの年の割に、子供のようなところがある男だった。

やり辛くなってレイは手帳を閉じる。何かないか、と視線を巡らせていると、ボロ雑巾のようになった男の着物に目が止まった。

手当の際に剥ぎ取り、ついでに洗って部屋干していたのだがすっかり忘れていたのだ。

火の側にかけていたおかげで既に乾いている。替えの服はないため、ついでに繕ってやろうと手に取った時。男が叫び声と共に飛び起きた。

不意に響いた大音量に、浮かせた腰が中途半端な位置で停止する。男は二人に気づくや、近くの壁に立てかけられた自分の刀を抜いて、間合いを取る。その様子になるほど手負いの獣とはこういうのか。

とレイは場違いな感想を抱いた。

「誰だ！ぬしらっ誰だ!!？」

「誰だ？そちこそ誰ぞ。」

信長も臆する様子もなく、寧ろ楽しそうに訊ね返した。

男は信長に刀を突きつけ、信長もまたいつの間にか抜いた銃を男に突きつける。

「答えい。そちはどこの誰ぞ。」

男は答えず、信長の背後の壁に飾られた布地の紋を見て唸った。

「木瓜紋…。織田家家中の物か？」

「家中ウ!?虚けを抜かせ。俺が織田で、織田とは俺よ。」

明らかに錯乱した様子の男とそれを嬉々として煽る信長に、レイは「私これ巻き込まれて死ぬな。」と確信する。

すると予想通り男は信長が名乗ると同時に斬り掛かり、レイ共々一太刀にせんとした。

身の丈ほどもある大太刀は二人を捉え、間違いなく半身になる筈であつた。

しかし失血で勢いの衰えた太刀筋は見切るのも容易く、信長は躲すついでに固まっていたレイを出口の方へと放り投げた。

「危ないのう。うつけが。」

「うつけは貴様だ、信長だど!?信長公はどうに死んでおるわ！なればやはりここはあの世で、貴様らは信長を騙るあの世の鬼と奪衣婆じゃー！」

「えっ。」

ぶつけた箇所を撫でていたレイは唐突な罵倒に傷ついた。

花も恥じらう乙女、などとは決して思っていないがそれでも年頃の女である。

混乱しているとはいえ、命の恩人に対してあまりにもあんまりではないか。

文句の一つでも言ってやろうかと思つたが、それで男の意識がこちらに向けられるのは御免被るし、助けてくれた信長にも悪い。

為す術もなく手を拱いていると、睨み合う男達の間一本の矢が突

き立てられた。

一瞬で喧騒が止み、一斉に放たれた方向を見る。そこには与一が月を背に弓を構えていた。

「やめなされ。」

どこまでも静かな、穏やかな声だった。が、その声は二人を鎮めるのに十分な響きを持っていた。

与一は男の前を横切つて壁に突き刺さった矢を回収し、ついでに男をちらりと見る。

「目が覚めましたか。重畳、重畳。」

音も無く現れた彼に男はすっかり呆気にとられていた。月明かりに照らされた横顔は絹のように滑らかで、少年らしいあどけなさの残る悪戯っぽい双眸には不思議な魔力があった。

この十九の匂い立つ若者に誰も彼もが毒気を抜かれていた。特につい先程まで暴れていた男は、今の今までこの少年の気配を全く感じなかった事に驚愕し、殺意を忘れていた。

(まさか、こやつ。本当にあの織田信長か?)

目の前にあつても尚、気配の読めない彼に、信長と最後を共にした小姓の存在を思い出す。どこまでも静謐な姿に信長の言葉を信じかけたその時、与一はどこからか仕留めたばかりの鳥を一羽取り出し、信長に差し出した。

「羽をばむしり候へ。」

何故、今。否、信長公に何を頼んでいるんだお前は。と、内心ぎよつとしていると信長は与一に言われるがままそれを受け取り、雀り始めた。

まるで下男のように扱う少年と、それを受け入れる信長に男はまたもや啞然とした。

この一連の奇妙なやりとりにただでさえ血の足りない男の頭はついていけなかった。呆然とする男に「お手透きか。」と与一が尋ねる。思わず頷く男に与一はまたしてもどこからか取り出した鳥を押し付け、自らも雀り始めた。

男が三人、並んで鳥を雀る。一体何がどうして、こうなったのか。

誰にもわからなかった。

鳥の下処理を終え、火にかけている間。手持ち無沙汰になった男達はそれぞれ改めて身の上を明かしあっていた。

男は島津豊久と名乗り、信長の死から十八年後。関ヶ原の合戦の最中から来た事を告げた。

話を進めていく内に彼はまたしても「お前は物狂いよ。」「これは夢だ。」と興奮しかけたが、やがて会話の中で奇妙な共通点を見出し、冷静さを取り戻した。

それはこの場にいる者が皆、この城に来る直前に奇妙な男と遭遇し、気がつくところの城にいたという事。即ち、自分達は何者かによって意図的にこの場に集められたという事であった。しかし、わかったのはそこまでである。

何しろ調べようにも調べようが無かった。この地の言葉は日の本語とはまるで違い、簡単な言葉を覚えるのでやつとだった。その上幼い兄弟を除けば付近の住民達は皆、漂流者を避けていた。何度か接触を図った事もあったが、会話は望めず、結局芳しい成果は出せないまま、三人は漫然と過ごす日々を送っていた。

互いに凡その事情を把握し、一旦会話が途切れると信長は重々しく豊久に尋ねた。

「信忠は……、息子は、どうなった。」

「……死んだ!!? 光秀に二条を攻められて、お前さんが死んだと思って城を枕に最後まで戦って死んだ!!?」

それは彼がこの地に来てから、ずっと気にかけていた事だった。

既にレイから織田家の顛末については聞かされていたが、歴史としてしか語れない彼女の言葉よりも、息子と歳も近く、時代も重なる豊久の認識がより真実に近いと考えたのだ。

淀みなく断言する豊久の言葉に信長は胸の内の燻っていた物がすうと晴れていくのを感じた。しかし、晴れた向こうにあったのは深い後悔。真つ先に息子へ疑心を抱いた己の弱さへの苛立ち。人生を賭けて積み上げてきたものが悉く滅びた事への無力感であった。

「全ては無常ですなあ。」と与一が言う。源氏も幕府も滅んだ事を聞かされた時の事を思い出しながら。

全てが無駄に終わった事を痛感し、拳を握る信長の横顔は普段のおちやらかな彼とはまるで別人で、レイは繕い物をする手を止めた。

生まれた時代も事情もまるで違うレイには、彼らの気持ちを量る事は出来ない。平穏と飽食の時代を生きた彼女は飢えも寒さも戦も知らなければ、国や一族を背負う重みなど知りようがなかった。ましてや親の気持ちなど。

自分にも何か、自分の全てを掛けるような何かがあつたら。などと悔やんでも、何もかも後の祭で。目の前にいる筈の彼らがひたすら遠く感じた。

かける言葉が見つからず、けれど手も動かず。止まったままの針へと視線を落とすレイに「で、お前は？」と豊久の鋭い視線が向けられた。

急に話題が自分に移った事もそうだが、予想外に険しい視線を向けられ困惑するレイに豊久は言葉を続けた。

「お前はなんじゃ。見たところ、あの男に似た格好をしちよるが。」

豊久はレイの格好が件の男と似ている事に気づき、レイを警戒しているのだ。

合点のいったレイは「あー。」と小さく納得し、言いづらそうに口を開く。

「……えっと豊久さん、関ヶ原っていつてましたっけ？つてことは……大体四百年ちよいか、それくらいあとの時代の人間ですよ。」

「ほう。」

那須与一、織田信長と過去の人間が続いたため、レイもそうだと思っていた豊久は意表を突かれた。

しかしやはり信じきれない様子で、見かねた信長がニタニタと厭らしい笑顔を浮かべながらレイの肩に腕を回した。

「なあなあ。お前あれ見せてやれよ。きつと一発で信じるぜ。」

「えー……あれ、あんまり使いたくないんですけど。」

「わーつてるって。でもその方が絶対手っ取り早いだろ。な？」

「わかりました。……豊久さん、驚くかもしれませんが、また斬りかかったりしないでくださいよ。」

「おう。」

いざとなれば絞め殺そう、と物騒な事を考えているとは露知らず、レイは徐にポケットからスマートフォンを取り出した。

久々に電源を入れ、まだ使えそうな事にほっとしつつカメラを起動させる。

一方豊久は見た事もない黒い板を取り出したかと思えば、突然板が明るく光り、絵が浮かび上がった様に面食らい、うっかり警戒を解いてしまった。

「はい撮りますよー。」と言って小さな音と共に閃光が瞬く。

豊久はすわ火器かと焦り、己の不肖に憤るが痛みは無い。

呆氣にとられてレイの出方を伺っているとレイが黒い面を豊久の眼前に突きつけた。

そこには驚き固まる豊久そのものが映し出されていた。

豊久は最初それが誰かわからず、じつと画面の中の自分を見つめた。それからやつと思ひ至ると、手を上げたり振ったりした後自分を指差し、尋ねた。

「これは、おいの絵か？鏡ではないのか？」

「なんじゃ、鈍いやつちやのー。」

「いやはや、無理もないでしょう。私も初めて見たときは、信じられませなんだ」

きよとんと目を丸くする豊久に信長は唇を尖らすが無理もない。

彼らの時代の鏡といえば金属を磨いたものが主で、自分の姿をここまで精密に映し出したものを見る機会はまずなかったのだ。が、何度かレイの端末を借りて自撮りすらしていた信長はすっかり失念していた。

意地になって信長はもつと見せてやれと言い、レイは渋々画面を切り替える。

なるほど自分はこんな顔だったのか、とそこに亡き父の面影を見出して感心していた豊久は消えてしまった事を少し惜しく思ったが、そ

の思いは続けて見せられた機能にすぐに霧散してしまった。

その後、レイはその他の機能を一通り見せてどうか豊久の信を得た。漸く期待通りの反応を得られた信長は得意げに豊久の様子を伺っていたが、そのうち自身も好奇心を抑えられなくなり、レイに端末を貸してくれと迫った。

「なあレイ、またそれ貸してくれよ、一刻だけ！一刻だけでいいからさあ！」

「ダーメーでーすー！信さんいつもそう言っ返してくれないじゃないですか！それにもう充電あんまりないんです！」

「頼むよレイちゃん、なあ。ほらこの茶碗やるからあ！」

市で母親に駄々を捏ねる子供のようにレイに縋る信長に、豊久の信長への疑心が更に深まったがこれも無理もないことであった。

第2話

2.

レイの特技の一つにどこでもすぐに寝られる、というのがある。その上一度寝たら滅多なことでは起きず、この体質は異世界にあっても変わらず、特に有用であった。

屋外だろうが石の床だろうが、隣で男が寝ていようが高軒で合唱されようが、朝まで熟睡できる。温室育ちの彼女がこの地で、特に不自由せず今日まで生き延びてこられたのは、この特技の存在が大きい。しかし何事にも例外はある。

今宵は豊久の事もあつてか眠りが浅く、一度男達の話し声に目が覚めてしまった。その内容や不穏な気配までは気付かず、すぐに寝直したがそれから間も無く。再び物音がして、自分を揺り起こす声にレイは苛立ちながら瞼を開けた。

まさかまた豊久が暴れてるのか、と音の方を睨み付けると、血まみれのエルフの兄弟が飛び込んできて、さしものレイもすっきり目が覚めた。

幸い怪我は大したことはなく、血も殆どが本人のものではない様子だった。そこでレイは初めて他の三人がいないことに気づいた。

まさかと思ひ外へ出ると、村の方角から火の手が上がっているのが見えた。木々の向こうで空が赤々と照らされ、幾筋も黒煙が昇っている。

兄弟は村がオルテの兵士に襲われて逃げてきた事や、途中で追ってきた兵士に殺されそうになった所を三人に助けてもらった事等を話したが、ほとんどレイの耳に入らなかった。動揺して早口な上、支離滅裂で全く聞き取れず、「村」「攻撃」「漂流者」という単語だけかろうじて理解できた。

「これ、使つて。ここで、待つて。」

不安げに顔を覗き込む兄弟に薬草の入った箱を投げ渡す。言葉を区切つて強調するとレイは制止する声も構わず廃城を飛び出した。

後ろから兄弟の制止する声が聞こえるが振り切り、一気に坂を駆け

下りる。

今宵は満月であった。森は明るく、あまり夜目の効かないレイにもかろうじて目印が見える。それを頼りに森を駆け抜ける。

途中何度も枝にぶつかり、草で手足が切れた。汗が目に沁みて、心臓が悲鳴を上げたが足を止める事なく走り続け、やつと森を抜けると、エルフの村を見下ろす位置に出た。

やはり火の手は村からのものだった。広大な麦畑の中、身を寄せ合うように軒を連ねる家々が炎に包まれて、そこだけ昼間のように明るい。おかげで遠目にも村の様子が見て取れて、広場に集められたエルフと兵士らしき武装した集団がいるのがわかった。

息を整えつつ、状況を確認しているとすぐ脇から声がかかった。信長と与一だった。村に気を取られて気づかなかったが、実はレイのすぐ近くにいたのだ。

驚いて身を竦めるレイに二人は悪戯っぽい調子で話しかける。

「おや、お目覚めですか。」

「遅いぞレイ、先にやつとるぞ。」

「どういう、ことですか。一体何が。」

「見ての通り、エルフの連中が襲われとる。おそらくこの領主のしわざだな。」

「豊久、さんは。」

「あいつならあそこだ。ほれ。」

喘ぎ喘ぎ尋ねるレイに信長は麦畑の一角を示す。そこには逃げ隠れる村人を追って畑を踏み荒らす兵士の姿と、それを斬り伏せる豊久の姿があった。

身の丈ほどもある大太刀を肩に担ぎ、重力など無いとでも言うように軽やかに振りかざす。目の前の獲物に夢中の兵士は彼に気づく事すらなく、一太刀でその首を刈り取られた。その勢いは留まらず、村人を一瞥するや疾風の如く走り去っていく。濡れた刀身を振り払って血を落とすと、切っ先から柄にかけて妖しい光が走った。

身の竦むような恐ろしい筈のその光景に、レイの胸は高鳴った。不安も後悔も赤く塗りつぶされて、代わりに焦燥が込み上げてくる。足

が震えて胸が詰まり、言葉すら忘れてその姿に見入っていた。

息を呑む音に二人はレイが臆したかと思っただ、その目に輝きが宿ったのを見て考えを改めた。

ああやはり。生まれた時代は違えど、やはりこの者もまた我々と同じなのだ。

日の本の人間なのだ、と。

少しして「よかった。」とレイが小さく漏らしたのを与一は聞き逃さなかった。

「ははあ、レイさん。さては僕達が村を襲ったと思ってたんでしよう。」

「なんだと！レイ、お前、俺達をそんな奴だとを思ってたのか！」

「えっ違っそうじゃなくて、あの人が…」

実際はどさくさに紛れて村を奪い取るつもりで、現在まさに進行中だったが彼女が知らないのいいことに二人は事実を隠蔽した。

レイは慌てて弁解しようとするが、村を見下ろす二人を見つけ一瞬疑いを抱いた事は事実だ。レイが言葉に詰まっているのいいことに信長は更に詰め寄った。

「短い付き合いいはいえ、寝食を共にした俺達を疑うなんて薄情な奴だにやー。」

「まったくです。生まれた時代は違えど、通じ合えていると思っただのに。」

「それはその、だって、うう……あ！マーシャとマルクだ！なんで戻って……！私、止めてきます！」

レイを忘れて飛び出した事は棚に上げて白々しく、攻め立てる。普段の彼女であれば冷静に反論したが、全力疾走したばかりで脳に酸素の足りていないレイには何も言い返せなかった。

言えば言うほど小さくなっていく姿が面白くて、二人は更にネチネチと攻めようとしたが、レイは村に戻ろうとする兄弟の姿を見つけて、此れ幸いと駆け出した。

やれやれと追いかけてやるとする、信長は「見ていかなのか？」

と引き留める。

二人は豊久が村に向かう間に、麦畑に火を放つ準備をしていた。既に仕掛けは整い、あとは機を見て放つのみである。久々の火攻めに信長は既に高揚し、誰かと分かち合いたい気分だった。

「死んでもらうっては困りますからね。」

「うむ。」

兄弟には事が済み次第、村のエルフに自分達の事を伝えさせるつもりで、それまで廃城に隠れているよう伝えていたのだが、言葉が通じなかったのか戻ってきてしまっていた。

小さくなっていく与一の背中を見送って信長は一人ごちた。

「そろそろか。」

「マーシャ！マルク！」

木陰で様子を伺っていた兄弟は見つかったかと怯えたが、レイの姿を見て表情を明るくした。

「レイ！良かった、無事だったんだ。」

「二人とも、どうして……」

「やっぱり心配で……、それに」

「そこを動くな！」

すぐに廃城へ戻るようレイが口を開きかけたその時、逃げ隠れた村人を探して巡回していた兵士が現れた。

怯えて竦む二人にレイが咄嗟に庇うように前へ出ると、兵士達は驚いて動きを止める。

「エルフのガキと、人間……？もしかして、噂の漂流者か！」

「どうする、エルフはともかく漂流者に手を出すわけには……。」

「おいお前、そのエルフをこっちに……っち、通じないか。」

男達の得物が血に濡れてぬるりと光るのを見て、兄弟はひつと悲鳴を上げてレイに縋り付く。

二人を落ち着かせるため、レイは後ろ手にその背中を撫でると目の前の二人を見定めた。

兵士は二人。頭から爪先まで揃いの板金鎧を着込んでいる。武器

はどちらも槍である。見た目の割に動きに重さが感じられず、下手に逃げれば、容易く追いつかれ貫かれる光景がありありと想像できた。怖気づきそうになるレイを不安げに見上げる目が留まらせる。隙を伺うレイの目つきに二人を渡す気が無いと察して兵士は槍を構え直した。

鈍く光る切っ先が喉元に迫り、込み上げかけた悲鳴を飲み込む。代わりに息を吐くとまた深く吸い込んだ。

と、その時爆竹に似た、甲高い爆発音と共に麦畑に火の手が上がった。火柱は続々と上がっては周囲の麦に燃え広がり、麦畑を舐め尽くしていく。炎は津波の如く、徐々に大きさを増してこちらへと迫ってくる。誰もが意識を奪われる中、先に我に返ったのはレイだった。

「走ってー！」

その声に兄弟が弾かれたように飛び出す。脇をすり抜ける子供の後ろ姿に、兵士達が遅れて反応する。しかし兵士が捕まえるよりも先にレイが兵士の懐に飛び込み、思い切り頭突きをかました。

虚を突かれた兵士は完全に直撃を喰らい、受け身を取る事もできず後ろに倒れる。がしやんと倒れる音にもう一人が我に返り、レイに槍を突き立てようとするがすかさずレイは振り返りざまに砂を浴びせた。

反射的に兵士は目を庇おうとするが間に合わず、その場で蹲り悶絶する。その隙にレイは立ち去った。兵士が待てと怒号を挙げるが当然止まらなかった。

兵士は薄目を開けてレイを追おうとするが、背後から放たれた矢によつて地面へ縫い付けられた。頭突きを喰らって倒れていた兵士は何事かと思やる。彼は倒れた際に脳震盪を起こし、体の自由が利かなくなっていた。

「ダメですよ。後始末はきちんとしないと。」

辛うじて残る意識の中、場違いな程澄んだ声が聞こえて男は目だけで声の主を探し、そしてそれは現れると同時に男の命を奪った。

男が最後に見たもの、それはこの世のものとは思えぬほど美しい少年の微笑だった。

麦畑の炎に包まれ、部下達に動揺が走る中でも隊長のアラムは冷静だった。すかさず数名を残して、消火に向かわせる。

「全く亞人どもめ、手間をかかせやがって。」

簡単な任務の筈だった。森に入り、漂流者と接触したエルフの子供。引いてはその家族をはじめとして、適当な数を間引きする。それだけの筈であった。

誤魔化せていると思っていたのはエルフだけだった。兄弟の事はとつくに領主達の耳に入っていたが、刈り入れに手が足りなくなるのを懸念して時期を待ったにすぎなかった。

ところが麦はまだ実り切っておらず、肝心の子供達には逃げられ、挙句畑の小火騒ぎである。内心怒り狂っていたが、亞人如きに心を乱されるわけにはいかぬとアラムは傲慢な表情を貼り付けた。

火の手の勢いは止むどころか広がり続け、流石に勢いが良すぎると不審に思い、注視すると揺らめく炎と煙に紛れて一体の影が目の前に躍り出た。

「漂流者……っ！」

この世ならざる者。冥府の彼方より現れし、異形の存在を前にその双眸が見開かれる。

エルフを取り囲んでいた兵士達は、煙を味方につけた豊久に次々と斬り捨てられていった。武器を構える暇も無く、その姿を認めると同時に続々と兵士の断末魔と命乞いの声上がる。

豊久が四人目を斬り捨てたところで残りの兵士は戦意を失い、森へと逃げていった。

残ったのはただ一人。遠目に見ても一番身なりのいい男。特注の鎧と足首まである母衣に身を包んだ隊長のアラムだった。

「首置いてけ、なあ、大将首だ!! 大将首だろう?! なあ、大将首だろ、おまえ。」

眼光鋭く唸りを上げる豊久の形相は、伝え聞く地獄の餓鬼の如く。しかしその言葉によってアラムの動揺も恐怖も一瞬で掻き消された。意味のわからない言葉を捲きたてる豊久を、言葉も通じない亞人以下

の蛮族と判断したのだ。

豊久は周囲を睥睨し、アラムへと視線を戻す。その時には先程の熱気は無く、冷ややかな決意だけがあった。

互いに無言のまま、二人はしばし睨み合う。その様子をエルフ達は皆、言葉も忘れて見入ってた。

「あれが、漂流者……！」

と、慄いたのは兄弟の兄であるシヤラである。長らく農奴として耐え忍ぶ日々を送ってきた彼にとって、それはあまりにも鮮烈な姿であつた。

闇を裂いて紅蓮に染上げていく豊久の姿は神話や詩歌に語られる英雄を思い出させ、その目の眩むような光景は彼に一瞬で何もかも忘れさせた。

舞い上がる熱気も止まらない冷や汗も今は感じず、立ち眩みにも似た感覚に足元が覚束なくなる。

傍に倒れる父親の姿も今は視界に無い。例えそれが恐怖が見せた幻影であつても、目を凝らさずにはいられなかった。

結末を期待し、無意識に体が傾く。しかし背後からかかった声が、踏み出しかけた足を引き留めた。

「兄ちゃんー！」

「マーシヤ、マルク！生きていたのか。」

振り返り、駆け寄ってくる二人に安堵するも束の間。その後ろにレイの姿を認めて身構えた。

どよめく村人達に二人は庇うように前に出てレイと豊久を指差す。

「この人達が助けてくれたんだよ！漂流者が！」

「どーも、お兄さん。漂流者です。はじめまして。」

誤解を与えないよう、レイは出来る限りにこやかに挨拶する。しかし頭突きの影響で額が破れているのに気付かず、血まみれでたどたどしく笑う彼女にシヤラは息を呑んで後退った。レイと豊久を交互に見るとシヤラは絞り出すような声で言った。

「なんなんだ、なんなんだ漂流者……！」

長い睨み合いの果てに勝敗はあっさりと決まった。

アラムが勿体ぶって剣を抜いたのを合図に、豊久は大太刀を持ち替え投げつけた。刀は容易く剣で弾き飛ばされたが、気を取られた隙に豊久は一気に間合いを詰め、その首に組み付いた。

飛びついた勢いと体重を利用して押し倒す。碌な抵抗も出来ぬままアラムは地面に叩きつけられると同時に動きを封じられ、その手応えの無さに今度は豊久は呆れる番であった。

「へん、他愛なかー」

言いながら鞘を両手で掲げ、アラムの顔に振り下ろした。頭蓋が砕け、肉の潰れる音と共に男の呻き声上がる。勝敗はここで決したが、攻撃は終わらなかった。アラムが戦意を喪失しているのも構わず、豊久の腕は止まらず。執拗に打ち下ろしてはその顔を砕いていった。

一撃一撃はどれも強烈だったが、豊久は決して死には至らしめなかった。蹴られる度に不快な打撃音と男の悲鳴が上がり、男の顔が均されるにしたがってエルフ達の熱を冷ましていく。痛みが想像でできる分、凄惨さが増して、アラムへの憎しみが霞む程に豊久への畏怖が膨れ上がっていた。

やがて豊久は蹴るのをやめて、首を鳴らしながら立ち上がった。再度エルフ達をぐるりと見渡し、一人の老人を目に留めると大太刀を拾って迷わず彼の前へ進み出る。周囲のエルフ達は次は自分かと慄いて道を開けるが、老人に動く気配は無い。彼の足元には既に事切れた幼子が、地面にその体を投げ出していた。最早我が子を抱く気力すら無く、膝について安心していた彼は豊久が目の前に来て、やっとその存在に気づいた。

「殺れ。」と言葉少なに豊久は自らの刀を差し出す。

言葉を解さず、慄いて後退る老人に豊久は刀を地面に突き立て、アラムを指差す。

「殺れ。殺るんだ。」

ようやく意味を理解した老人は首を横に振るが、豊久は語気を強め、「殺らねばならぬ。」と詰め寄った。

「ここがどこで、お前らが誰であろうと仇はお前らが討たねばならぬ

「！こん子が応報せよと言っている！」

言葉は通じずとも身振りと言語。そしてその瞳がありありと彼の意志を物語っていた。

豊久の怒りに感化され、老人が刀を手に取ると他の村人達も倣ってそれぞれ武器を手にし、アラムを取り囲んだ。彼はそこでやっと立場が逆転している事に気づく。しかし骨の髄まで沁みついた意識はそれを受け入る事が出来ず、それがエルフにとって最後の一押しとなった。

悲鳴も命乞いもすぐに途絶えた。

やっと役目を果たした老人はふらふらと死体から離れ、崩れ落ちる。刀を杖に辛うじて体を支える老人の前に豊久が再び進み出た。エルフの視線が豊久に集まる。老人が顔を上げると豊久の顔がふつと緩み、初めて穏やかな顔を見せた。「よか、よか。」と簡潔ながらも力強い賞賛を繰り返す。その表情は先程鬼神の如き働きを見せた男とは思えない程穏やかで、そして与一のそれとはまた違う、見たものを惹きつける不思議な力があつた。もつと純粹で真っ直ぐな何か。「いよー、おつー。」

「あんたら何やってた、こちとら病み上がりだぞ。」

事が済むと狙い澄ましたかの如く信長と与一が現れ、豊久は怪訝な視線を向けた。陰ながら与一は逃亡した兵士の処理を。信長は麦畑に火を放っていたのだが、二人に伝える気はなく曖昧に笑うだけである。苦言の一つでも思ったが、そもそも自分が制止を聞かず飛び出した事を思い出し、それ以上追求しなかった。

「そういうえば怪我してたんでしたね。もう大丈夫なんで……つてうわっ。」

言ったそばから傷口が開き、ところどころから血が滲んでいるのを見てレイは悲鳴を上げた。

「ありや。」

「うわー大変だあ。すぐに傷を見ないと。」

「おおこりや大変だ！ほうらここに丁度いい箱があるぞ。俺が座ろうと思ったのだがお前に座らせてやろうぞ。」

と、都合良く近くにあった木箱を信長が差し出す。その口調と言
い、先程の態度と言い。明らかに何か企んでいる様子の二人に豊久は
益々眉間の皺を寄せる。しかし見当もつかず、さりとして断る理由も思
いつかず、促されるまま渋々応じるのだった。

国盗り 第3話

3.

エルフの村からほど近い森の一角で、一部始終を伺っていたオルミーヌは顛末に震えていた。

彼女が担当を任されていた漂流者達がエルフの村の問題に介入し、こともあろうに領主の兵士を惨殺。すっかり村人を一つ従えさせてしまった。その上会話から察するに彼らはこの機会に乗じてオルテ帝国を乗っ取ろうと企んでいる。

エルフ達を村に残し廃城に戻る彼らの後を追って、オルミーヌは城近くの茂みに身を潜める。その後も監視を続けていたが、動きは無く。時間経過と共に積もっていく緊張と焦りに耐えられなくなった彼女は、思わず泣き言を漏らした。

「大師匠様。どうして私一人にあの四人を任せたのですか……。」

エルフの村より遙か北、オルテの北に位置する王国カルネアデスに居る師に思いを馳せる。返事を期待して水晶に耳を傾けるが、反応はない。漂流者達がしでかしたのとほぼ同時刻から応答が無くなり、ただの置物と成り果てていた。

オルミーヌの目的は彼ら漂流者の搜索と保護である。来るべき廃棄物との戦いに備え、一刻も早く彼らを招集せねばならなかった。しかしまだ未熟な彼女は接触する許可をもらえず、監視という体でただ手を拱いていることしかできず、結局兵士が皆殺しにされるのを見ることしか出来なかった。

彼らが殺したのは夜盗や野伏りの類ではない。正式な領主の兵士。それも代官付きの武官である。

オルテは決して黙ってはいない。確実に報復に来る。漂流者が関わっていると知れば、最悪十月機関の責任を追及されるまでであるかもしれない。

ただでさえ十月機関と各国との関係は良好とはいえないのに、とオ

ルミーヌは頭を抱える。

十月機関は魔道士の集団である。打倒廃棄物を掲げ、漂流者を保護し、各国の軍勢に協力を呼びかける事が主な活動である。しかし、今度のおかげで最早協力どころではない。

十月機関は軍隊を持たない。所属者は総じて魔術に通じており、多腕は立つが決して兵士ではない。その上魔術の腕は個人差が激しく、そもそも数が圧倒的に少ないため、軍勢に攻められれば一溜りもない。

これを機にオルテが十月機関と完全に敵対したら。と考えてオルミーヌは身震いした。

「もーどうしよう。」

と、俯きかけたその時。偽装用の被布が勢いよく剥がされた。驚いて顔を上げれば、いつの間にか漂流者に両脇を挟まれていた。

その鬼気迫る形相に後ろに飛び上がり、後ろ手をついた彼女はそのまま後ずさって逃げようとする。が、背後には豊久が待ち構えており、彼の足にぶつかるとぎくりと体を強ばらせて止まった。

ぎこちない動きでゆっくりと振り返り、その姿を認める。と、遂に現実を受け入れて悲鳴を上げた。

「なんか見られとうと思ったら、何だお前!!?」

「ギャーツ殺されるーツツ！妖怪首おいてけだー！」

「誰が妖怪か!!」

妖怪呼ばわりされて憤慨した豊久はオルミーヌが泣き叫ぶのも構わず拘束する。彼らからしてみれば当然の事なのだが、その絵面はどう見ても男三人がよってたかって女性に乱暴する光景にしか見えず、離れた場所の様子を伺っていたレイは内心「エロ同人かよ。」と複雑な思いを抱いた。

ただでさえ奇抜な格好の集団な中、特にオルミーヌの姿は抜きん出ているため余計にそういう類の人物に見える。具体的には銀髪碧眼ツインテアホ毛巨乳眼鏡ショートパンツ縞ニーソというやたら情報量の多い、一部の界限に人気の出そうな姿である。

そこでレイはオルミーヌが流暢な日本語を話していることに気づき、割って入った。

「あなたもしかして、日本人？」

違和感の無さすぎる発音からそう思ったのだが、豊久と与一は「お前は何を言っているんだ。」と言わんばかりの目でレイを見た。

「お前何をいつとる？こんな頭と目の者、日ノ本におらぬわ。」

「そうですよ。ここの密偵では。」

「いや、というかアレだ。お前ら、そいつ日本語喋ってる。」

「あ!?？」

「ほんとだ!」

信長に指摘されて二人もようやく納得する。

言葉が通じるとわかった途端、豊久はオルミーヌに激しく詰問した。が、オルミーヌは恐怖のあまりしばらく悲鳴と命乞いの言葉しか出せず、やっと話した内容も錯乱したとしか思えない荒唐無稽の内容だったため余計に疑いが深まり、結局廃城に拉致される運びとなった。

拘束され、廃城に連れて行かれたオルミーヌは改めて尋問を受けていた。

真偽はさておき、彼女の口振りは自分達の事情を把握している様子だった。この世界に来て初めて情報らしい情報が手に入る機会を逃す筈がない。力づくで吐かせると脅す三人に当初はすっかり怯えて話すどころか失禁しかねない状態だったが、同性であり比較的親しみやすい雰囲気の子に宥められて漸く落ち着きを取り戻すと、打って変わって真剣な面持ちで滔々と語り始めた。

ここはレイ達がいた世界とは別の世界で、自分達のように飛ばされてきた者は漂流者と或いは廃棄物と呼ばれ、後者はこの世界に災いを齎す存在である事。

オルミーヌの所属する十月機関は廃棄物に対抗するため漂流者を集結させることを目的とした組織である事。

使い古されたゲームや小説の設定のような話に、レイは思わず正気を疑ったが彼女の眼差しは真剣そのもので、茶化すのは躊躇われた。

廃棄物は既に軍勢を率いて迫っており、一刻の猶予も無くすぐに手を貸してほしい。と結ぶ彼女に真っ先に口を開いたのは信長だった。

「お前らが持っている兵は？」

「え。」

「化け物だの何だのは知らんが、敵はどうも軍勢なんだろう？お前ら十月機関はどんだけ兵隊も持つとんじやい。」

馴染みの無い単語や突拍子も無い内容に多少時間を要したが、それでも信長の呑み込みは早かった。

どれだけ智略に長けていようが武勇に優れていようが、数が無ければ話にならない。

信長達からしてみれば当然の疑問だったが、予想外だったのかオルミー又は途端に歯切れが悪くなる。

「そ、それはその私達は導師の結社です。漂流者を集める事が目的で……。」

「無いのか。」

「え、マジで？それでどうやって戦うつもりだったんです？」

想定外の答えにレイは呆れて言葉を漏らす。

その声色にオルミー又は自分の返答次第では組織の信用を損ないかねないと気づいて、毅然とした態度を取り繕うが続く言葉は更なる失望を買う物だった。

「えー……各国の王や領主に呼びかけて軍を出してもらって、それを漂流者が指揮指導すると言う……。」

「ばーかばーかばーか！

世界は違えど国なんつーのはどこも一緒だな。領主がいて兵隊を持ち、それ故領主たり得ている。支配者が他所からやって来た訳判らんやつにホイホイ指揮権渡すか、バーカ！

その廃棄物だか何だか知らんやつらがどんなに強大だろうが、領主は軍権を絶対に手放さねえよ。

その世界滅ぼし屋に最後の砦を攻められて、最後の尻に火がついて腹切る直前までそのまんまだバーカ！

それが君主というもんよ。春秋戦国の墨家道がなぜ滅んだか。机

上でいくら頭を捻った所でこれは変わらん。」

そう語る信長の表情は、正に彼の言う君主そのものであった。

その言葉には権謀調略を張り巡らせ、群雄割拠の時代を生き抜いた者にしか出せない響きがあった。

レイはこの時初めて、この目の前の男が本当に織田信長なのだ実感した。

そのため、続く言葉もすんなりと受け入れられた。

「じゃ、じゃあどうすれば！漂流者でなければ彼らには勝てません!!? どうすればいいと言うんですか!?!」

「んなもんは簡単なことよ。俺達が国を奪れば良いのだ。」

自分達のやり方を頭から否定されるも言い返せず、それでも諦めきれずオルミーヌが食ってかかると得意気に言い放った。

衝撃のあまり絶句する彼女に信長は更に畳み掛ける。

「俺達はこれよりこの豊久を頭目に国盗りを始める。それに貴様らが手を貸せい。お前達の世界の平和と幸せのためこの国を滅ぼす企てに加担しろ。」

するとそれまで黙っていた豊久が声をあげた。

「ちくと待てい！俺が頭か。聞いておらん！」

「え、だってこの間、真ん中座ったじゃない。」

「あー、あれそういう意味だったんですか。」

与一の指摘に、レイはエルフの村でのやりとりを思い出す。あの後結局豊久は箱に座らされ、エルフ達も倣うように四人の前に腰を下ろした。豊久を中心にしたその構図はさながら主従のそれに見えなくもない。

同様に思い返していた豊久もそこで合点がいき、「そんな意味は、知らん。」と苦しげに訴えた。

「あーやっぱり。」

「お前は本当に残念な子じやのう。」

すると信長と与一に哀れみの視線を向けられ、豊久が憤慨する。間もなく言い争いに発展した三人に諍いの雰囲気を感じてレイは距離を取ろうとして、ふとオルミーヌの気配が変わった事に気づいた。

呆けた表情で三人を見つめる彼女の顔はまだ困惑の色が強い。しかし俄に明るさを取り戻した瞳に彼らへの強い関心が伺えて、つられてレイも笑みを浮かべた。

「それにしても。」とレイは信長へと視線を移し、しみじみと呟く。

「信さんって、本当に織田信長だったんですね。」

本人は独り言のつもりだったが、思いの外大きく響き、信長他二人の耳にもしっかりと届いていた。

三人は一斉に言い争うのを止め、振り返る。と同時に信長はレイに食い下がった。

「はあ!? え、何、お前今まで信じてなかったわけ?」

「や、なんつーか実感が持てなくて……自分を織田信長だと思い込んでる一般男性の可能性だって、あるわけじゃないですか。まあ五十過ぎて自分は織田信長だー、とか。ある意味、らしいっちゃらしいですけど。」

レイ同様つい今し方信長をそうと認めた豊久は「たしかに。」と頷いた。

「そりゃないぜ。証拠だって見せたじゃねえか。」

たしかに二人が出会った当初、信長は証拠としてこちらの世界に持ち込んだ茶器を見せた。

その中にはレイもゲームや書籍等で見聞きした物はあったが、専門家でもないレイには本物かどうかの判断はつきかね、信じるに至らなかった。

「ううん、信さん、良くも悪くも有名すぎますから……有名人やその生まれ変わりを騙る人は珍しくないんですよ。しかも信さんの場合、日本どころか海外の認知度も高いですし。」

「そ、そうなのかあ!? そうか、そうか。そりゃー仕方ないなあ、よほほほ!」

後の世にもその名を知らしめていたのは知っていたが、想像以上に。その上国外にすら影響力があるとわかると、むくれていた信長はあっさり機嫌を直した。すると、今度は与一が面白くなさそうに尋ねる。

「もしや僕の事も信じてもらえておらんんだり？」

「与一くんは……国内の知名度で言ったら信さんと同じくらいなんですけどその割に資料が少なく……平家物語なんてかなり誇張されてますし、やー、判断のしようが無いですよ。」

「だってよーふひひひひひ。」

信長ほどではないと言われて与一は黙り込む。勝ち誇ったように指を指して笑う信長に与一はますますむっつりとし、「では。」と豊久を巻き込んだ。

「では、豊久殿は？まあ恐らく大して知られてないでしょうが。」

「なんだとお。」と豊久は与一を睨みつける。が、彼自身、それほど期待はしていなかった。豊久とて戦働きに関してはその自負がある。これまで父祖に恥じぬ戦いをしてきたと、胸を張って言える。が、それだけで歴史に名を連ねる程、世間は甘くない事も理解していた。

(親父や、叔父上殿ならいざ知らず。)

豊久をはじめとして、彼の一族はいずれも猛将揃いであった。亡き父家久は無論の事。特に養父でもある島津義弘は祖父の島津忠良に「雄武英略をもって他に傑出する。」と言わしめる程の人物である。合戦のみならず、外交にも多大に貢献し、学問や茶の湯に於いても才を持つ傑物である。それを間近で見て育った彼が、いつしか「俺は所詮、功名餓鬼よ。」と達観した態度になるのも仕方無い事であった。

しかし自分で言うならまだしも、他人から言われるのは腹が立つというのが人という物。そしてそれはそれとして名が残っているのであれば悪い気はしないし、何よりも二人を見返せる。

故に豊久は若干の期待を込めてレイの返答を待ったが、果たしてそれは与一達を満足させるものであった。

「ごめんなさい、そもそも豊久さんについては全然知らないです。」

「そりゃー仕方無いな、なんたって辺境もまた辺境、はじっここのど田舎だし。」

「仕方ありません、ど田舎の方ですし。」

笑いをこらえ震える二人に、豊久は怒りに震え刀の柄に手を伸ば

す。

今にも斬りかからんばかりの怒気に慌ててレイが「ああ、でも。」と付け加えるが却って油を注ぐ結果となった。

「物凄く美少年だった。つてのは聞いた事ありますよ。あと頭も良かったって……。」

「美少年？」

「頭がいい？」

顔を見合わせ、今度こそ耐えきれず吹き出した二人に豊久の怒りが爆発した。

「殺す！全員殺す！」

「あの一、すみませーん。そろそろほどいてくれませんか？」

放置されていたオルミーヌは恐る恐る何度目かわからない懇願をした。が、四人はすっかり彼女の存在を忘れており、もはや認識すらしていない。

大の大人が取っ組み合うその光景に、本当に彼らに任せて大丈夫なのだろうか。という思いがよぎり、一瞬でも心を動かされた己の未熟さを呪う。

すっかり自信を喪失した彼女は一人、天を仰いで「大師匠様ー！早く来てー！」と心中で訴えることしか出来なかった。

第4話

4.

今でこそ大国として知られるオルテだが、ほんの六十年前までは東方の小国家の一つに過ぎなかった。しかし、突如として現れた一人の男が人々を煽動。後に国父と讃えられる彼は、それまで小国家の集まりでしかなかった人間達をまとめ上げ、万年帝国を国是とする帝国を作り上げた。建国後。男は栄華の絶頂の最中に死去したがその意志は受け継がれ、現在もオルテは成長を続けている。

しかし急激な変化には多大な代償が必要になるのが世の常。そしてその犠牲になったのは嘗てオルテに征圧された国々。エルフ、ドワーフ、ホビットといった現在は亜人と呼ばれる人々であった。

徹底的な弾圧と搾取を繰り返し、猛烈な勢いで版図を広げてきたオルテであったが遂に限界の時を迎えていた。広がり続けた戦火は、知らず知らずの内にその身を焦がし続けていたのだ。

各方面へ伸ばした戦線は伸びに伸び、今やどこも硬直。戦局は芳しくなく、現地も本国も疲弊しきっている。国庫は火の車で徴兵も間に合わず、兵役を引き上げ退役兵まで駆り出している始末である。

当然に国内はどこも人手不足で財政状況は悪化の一途を辿り、最早いつ崩れておかしくない。

「それでもまあ、四十年も戦い続けてるんですから大したもんですよね。」

「それはまあ、そうなんですけど……。」

裏を返せば、オルテにはそれだけの体力があると言う事でもある。

少なからずその悪行を目の当たりにしてきたオルミーヌはレイの言葉を素直に肯定出来ず、言葉に詰まる。

それを隣で聞いていた信長はそれをみすみす見過ごすなんてとんでもない。有り難く頂いてしまおう、と邪悪な笑みを浮かべ、与一と豊久はその醜悪さに呆れるのだった。

漂流者達はオルミーヌを道連れに再びエルフの村へと向かっていた。その道中、やっと解放された彼女は今度はレイから尋問を受ける

羽目になった。

「で、組織の規模は？ 発足はいつ？ 運営資金は？ 大師匠つてのは何者？」

「過去にも漂流者や廃棄物は来てたんですよ？ 彼らについては何か資料は？ そもそも漂流者や廃棄物つていつから現れるようになったんです？ それ以前はどうしてたんですか？」

漂流者つて多分こっちの言葉じゃ無いですよ、誰が呼び始めたんですか？ あ、そもそもなんで言葉通じるんです？」

「オルテつてどう言う国ですか？ 政治体制は？ 国王は？ 総人口は？ 主要産業は？ 主食は？ 宗教は？ 気候は？」

「エルフ以外の人種は？ ドワーフにホビット…ねえ、過去にトールキソで人来てません？ それぞれの繁殖の仕方は？ 他種族同士で子供は為せるの？」

「エルフつていうとこっちじゃ長命で弓と魔法が使えて妖精を連れてるイメージなんですけど…ええ、弓だけ？」

「魔道士つて具体的に何ができるんですか？ 炎を出したり、空を飛んだりとか？ この世界の人間はみんな使えるんですか？ 私にも使えます？」

「廃棄物が従えてる化け物というのは具体的にはどんな…：オーク、ゴブリン、コボルト、…：ええ、ドラゴン？ ドラゴンいんのマジで！」
「双眼鏡もそうだけど、この眼鏡も服も明らかにオーバーテクノロジーですよ。十月機関でしか手に入らないんですか？ それとも普通に売ってたり？」

「村見る限りみんな結構小綺麗ですよ。元々衛生観念が高いのか公衆衛生がしっかりしてるのか…：そうだ、過去の疫病とかの資料つてあります？」

村に着くまでの間、レイは万事この調子だった。オルミーヌこそ、彼女がこの世界に来てからずっと求めていた存在であった。

レイは四人の中で最も長くこの世界に滞在し、簡単なエルフ語を習得するまでになっていた。だがそもそも話す相手が子供しかいないため得られる情報はさほど無く、ずっと歯噛みしていたのだ。

レイはこの世界に来てから抱いた疑問を洗いざらい全てオルミーヌに浴びせ、オルミーヌを途方に暮れさせた。

オルテの篡奪にしか関心の無い男達と違い、レイは唯一この世界そのものに対して強い関心を抱いていた。それはオルミーヌにとって一筋の希望の光であった。

彼女だったら、十月機関に賛同してくれるかもしれない。あわよくば他の漂流者達も感化されて、考えを改めてくれるかもしれない。

恐喝も威圧もせず、比較的友好的な態度を示した彼女に好感を抱いたこともあり、その申し出にオルミーヌは「私に答えられることでしたら、何でも。」と胸を張った。しかしそんな浅はかな打算はすぐに消え去ることとなる。

手帳を手におさおすと申し出たレイは一転、怒涛の勢いで質問攻めにした。その勢いは漂流者がガトリングガンと呼んでいた火器のごとく。

十月機関は漂流者を保護するのが主な役目だ。その役目の中には彼らが見知らぬ土地で問題無く生活できるよう、できる限り支援することも含まれている。そのため魔道士は各国の歴史や文化にもある程度通じているものがほとんどだった。

レイの質問もほとんどが一般常識や歴史程度だったが、それも数が多ければ流石にうんざりしてくる。その上、その関心は度々軌道を変えて「それ今聞く必要ありますか?」と思うものから、時折オルミーヌが疑問にすら思わなかったような事まで聞いてくるため、気が抜けない。

オルミーヌは折を見ては遠回しにこのやり取りを終わらせようとしたが、ずっとこの機会を待ちわびていたレイの食いつきは凄まじく、全く気付かず別の質問を浴びせてくる。自分達に興味を持ってくれている分、無理に断わるのも気が引けて、オルミーヌは泣きたくなかった。

「あいつ、あーいう奴だったのか……」

「そういえば豊久殿は見るの初めてでしたね。」

「そろそろ着くぞ。レイ、その辺にしておけ。」

「はい。それじゃオルミーナさん、続きはまた後で。」

兄弟の幼い頃を思い出して、微笑ましく見ていた豊久も流石にオルミーナを気の毒に思っていた。

信長に止められてレイが手帳を仕舞い、オルミーナは胸を撫で下ろしたがすぐに「後で」という言葉に顔を引きつらせた。

無邪気に札を言うレイにオルミーナは名前を訂正する気力すら失せ、よろよろとついていくのだった。

全て順調に、信長の目論見通り進んでいた。

村へと戻った信長は見事エルフを焚きつける事に成功したのだ。

信長達と別れたエルフは浮き足立っていた。消火や怪我人の手当て、死者の移動をするうちに改めて事の重大さに気づき、混乱していたのだ。正規の兵士。それも高官まで殺したエルフ達をオルテは決して許さない。今度こそ根絶やしに来ると頭を抱える。そうでなくとも自分達は仲間の多くを奪われ、麦畑も殆ど焼失したため冬を越す事すら危うい。

最早蜂起するしか生き延びる術は無い。と、シヤラを中心とした若者から決断を促す声上がるが、長らく彼らを縛りつけた恐怖は半ば体の一部と化しており、なかなかその腰を上げさせない。

加えて彼らの大半は戦いの経験が無かった。経験した世代は殆どが戦争で死に、生き残った者の多くは当時子供だった者達である。立ち上がった所で武器も戦う術も持たない自分達では、返り討ちにされるのが目に見えている。と怖気づく者が大半であった。

話し合いは紛糾し、最早団結どころではない。却って亀裂を生じさせ、鎮まりかけた彼らに息を吹き込んだのはまたしても豊久であった。

「お前達。恥ずかしくないのか、祖先に。恥ずかしくないのか、子孫に。お前達、国はほしくないか。這うて悔いて死ぬか、走って夢見て死ぬか。どちらにする!?!? 決めろ!!?」

言わせたのは信長である。

エルフの特徴や彼等の状況を把握した信長は、オルミーナの師匠が

作ったという翻訳の札を借りて豊久に代弁させた。アラムの一件で既に彼らの歡心を集めていた豊久からこう問われては、エルフ達も燻ってはいられない。決意を固めたエルフは形振り構わず漂流者達に助力を求め、この時初めて豊久を大将とした反乱軍が成ったのである。

夜が明けて、廃城はエルフ達で賑わっていた。

犠牲者の弔いの際には皆悲痛に満ち、嗚咽を堪えきれなかったが、覚悟を決めた彼らの切り替えは早かった。皆、信長達の指示に真面目に従い、支度に勤しんだ。

城下には彼らの為の幕が張られ、さながら陣中の様相を成している。明日には死ぬやもしれぬ身の彼らだが、その表情は明るかった。やつと帰ってこれた。

口には出さなかったが、皆同じ思いだった。植生も様変わりし、嘗て隣にいた家族はもういない。思い描いていたものとは大分違ったが、それでも数十年ぶりの帰郷は彼らに忘れて久しい心からの安らぎを蘇らせた。

弓を作りたい。と誰かが言った。反対する物は一人もいなかった。エルフであれば、皆子供の頃から弓に親しんでいる。作るのも弾くのも長らく禁じられていたが、誰も不安は感じなかった。

彼らが着々と戦いの準備を進めていく中、レイは子供達を率いて村で死体の回収に勤めていた。信長が命じたそれは剥ぎ取りと病気の蔓延防止の他、死体を硝石の肥やしにするという目的もあった。前者はともかく後者に関しては、エルフは無論レイにも伝えていなかった。知りたがりの人間というものは、えてして教えたがりでもあるからだ。

「え、じゃあ私、幽霊だと思われてたんですか。」

「だって、ボロボロだったし。」

「何言ってるか全然わかんないし、勘違いされても仕方ないよ。あ、頭あった。」

後の処理も考えて、一先ず村に散在する死体を一箇所に集めてい

く。その腐臭や惨たらしい切り口に初めは皆近づくことすら躊躇っていたが、マーシャとマルクが率先して動き出したのを契機に何を言わずとも作業を開始した。

そうして一つ二つと拾っていく内に次第に慣れ、気がつくとも千切れた手足を片手に談笑する程度には余裕が生まれていた。幼いが故の順応性の高さか、彼らなりの矜持か。レイは自分が彼らの年の頃はとうだったかと思いついて、やめた。

会話の中心は主にレイだった。彼女が積極的に話題を振ったというのもあるが、生まれた村とその周辺しか知らない彼らは漂流者に興味津々で、少しでも糸口を掴もうとその輪に加わった。

そこで漸くレイは彼らの境遇の全容を掴んだ。遠巻きに見たり、オルミーヌから概要を聞かされて凡そ察してはいたが、彼らの口から直接語られた内容はそれ以上に酷いものであった。

戦後、オルテはエルフの持つ書物を全て没収。廃棄し、以降はエルフ語の使用を全面的に禁じオルテの言葉を強いた。祭祀や教育や医術などに携わる者は優先的に処刑され、それらを行う事は勿論目指す事も禁じられた。

幸いまだ戦前に教育を受けた者が残っており、人間の目を盗んで口伝し、いくらか残っていたがそれにもやはり限度がある。戦争による世代の断絶や定期的な隔離。生活様式の変化などが重なり、彼らの信仰、習俗、歴史等多くが灰燼に着了した。最早全てが忘却の彼方に追いやられるのも時間の問題である。

世界は変わっても、人間のやる事は変わらないんだなあ。とレイは感慨深く頷く。

オルミーヌから借りた札を思い出し、彼女の伝で紙や筆を手に入れられないかと思案しているとその間に話の主導権を取られ、話題はレイ達漂流者に移った。そこでレイは初めて自分達が当初、幽霊だと誤解されていたことを知らされた。

「それでよく探検に来ようと思いましたがね。」

「馬鹿だなあ、あーいうのは大人が子供に言うこと聞かせるための作り話だよ。」

「そうだよ。おばけなんているわけないじゃん。そんな非現実的な。」と、兄弟はこれみよがしに肩をすくめて見せるが、それが友人達の手前故の背伸びであることは明白であった。微笑ましげな視線に送るレイに二人は慌てて話題を変える。

「ってゆーか、レイ、大丈夫なの？別に無理して僕達に付き合わなくてもいいよ。」

「んー、正直気持ち悪いですけど、もう死んでますしね。」

言いながら、死体から兜を外すレイに兄弟は面白くなさそうに口を引き結んだ。

ちよつと前まで鼠を締めるのすら怖がってたくせに。

不満をありありと示す兄弟にレイは「それに」と内心付け足した。

昨夜の犠牲者の一人は兄弟の父親である。躊躇う事など許されな

い。

「それに死体は起きぬけに斬りかかってきたりしませんし。」
何の話かわからず兄弟は互いに顔を見合わせ、首を傾げる。丁度その頃、豊久が盛大なクシヤミをし、「きちやねつ。」と信長に詰らされていた。

喜ばしい事の筈だが、なんだか別人になってしまったようで喜べない。それとも言葉の拙さ故に誤解していただけで、これが本来の彼女なのかと。二人は互いに目配せすると血の滴る手をレイの頭上に伸ばした。

「すごいぞレイー！」

「えらいえらい。」

二人とも以前から度々年上ぶる所があつたが、レイの実年齢を知つて益々拍車がかかっていた。

しかし既にあちこち汚れているとはいえ、流石に今は御免被る。

レイは慌てて躲そうとして、ぬかるみに足を取られて体の均衡を崩した。ゆっくりと後ろに傾いていくレイの体に二人は再びその手を伸ばす。それぞれが左右の腕を掴み、大きく傾いた状態でレイの体は一旦停止する。がその血と泥に濡れた手ではその体重を留めきれず、滑って抜け落ちると同時にレイは背中から汚泥に倒れ込んだ。

粘度の高い、泥飛沫の舞う音に周囲は振り返り、啞然とする。元凶である二人は無論、他の子供達も言葉忘れて成り行きを見守っていた。声も上げず身じろぎもせず、無表情で空を見上げるレイを横目に二人はこの後をどう切り抜けようか視線で会話していると、唐突にレイが視線だけ二人に寄越した。びくりと肩をすくめて互いに身を寄せ合う二人に、レイは徐ろに起き上がり、距離を詰める

「マーシャ、マルク。」

汚泥を滴らせるその腕が二人を抱き寄せると、間も無く声にならない悲鳴がエルフの村に木霊した。

オルミーヌは一人、廃城を離れ人気の無い川の側にいた。

本部へ報告をするため、というのもあったが加えて今は彼らと距離を置きたい気持ちもあった。

つい先程、信長と豊久に同行し廃城から離れた森の奥に向かった彼女は、そこで彼らとの決定的な乖離を目の当たりにしたのだ。

そこは死体の処理場だった。人の背丈程度の深く広い大穴に、オルテの兵士達が放り込まれていた。それだけならまだしも共に人糞や尿などが被せられ、硝石丘を兼ねていた。いくら何でも酷すぎる、と抗議する彼女に二人は心底不思議そうに言葉を投げかけた。

「土に埋めても同じ事だ。腐って虫に食われ、土になる。早めているだけで同じ事ぞ。もったいない。」

「首は洗い、整えて埋めてやった。人として供養してやった。こちらに手を合わせればよか。糞小便が汚かと思うなら、俺もお前も腹ば切れば中は糞の詰まった肉袋ぞ。」

手を合わせ、吊った首ではなく、糞ば詰まった肉に魂は宿るのか。理ば合わなかではなかか。」

彼らと自分達の間、あまりにも大きな隔たりがある事を理解してオルミーヌはぞつとした。

胃液で酸っぱくなった口内を何度も濯いでから水晶を取り出し、通信を始める。合わせて信長に頼まれた硫黄の調達も依頼すると水晶の向こうで、同僚が困惑する気配を感じた。業務的に通信を切り、追及を避ける。

何故、師匠が漂流者との接触に対して慎重だったか。オルミーヌはこの時、嫌というほど理解した。

彼らの行動原理がわからない。

廃棄物であれば、人類廃滅という統一した意志があるが、彼らにはそんなものは無い。故に、彼らの行動は全く予測がつかないのだ。

十月機関の目的はこの世から廃棄物の脅威を取り除く事。人々を脅かし、世界廃滅目論む彼らを阻止する事だ。

しかし信長の考えは新たな戦乱を生み出し、世界をより狂気と混乱に陥れる事である。

やむを得ない事だ。手段を選んでなどいられない。そう自分に言い聞かそうとすればする程、浮き彫りになる矛盾にオルミーヌは嘆息する。オルミーヌとて組織の人間だ。それなりに修羅場も経験し、時には非情な決断を迫られる事もあった。しかし積極的に手を汚した事など、ましてや自らその決断を下した事など一度も無かった。

彼らの思考はオルミーヌには到底受け入れられない。悍ましいと思う。それでも尚、彼らに惹かれてしまう。自分達には無い発想をする彼らに期待を寄せてしまう自分も確かにいて、それが一番恐ろしかった。

本当に彼らに協力していいのだろうか。とオルミーヌの胸に不安がよぎる。

このまま彼らと共にいたら、自分は呑み込まれてしまうのではないか。彼らの非道に何の躊躇も抵抗も無くなってしまおうのではないか。そんな不安に呼び寄せられた最悪の想像を頭から追い出すべく左右に振る。

オルミーヌもまさか自分の未熟さに救われる日が来るとは思わなかった。幸か不幸か彼女の使える術は一種類のみ。壁を出現させるだけのもの、人を傷つける力は無い。人々を守るために学んだ魔術で誰かを傷つけるなんて、考えたくもなかった。

そんな風に安堵する自分に嫌気がさして、縋るように師匠の名を呼ぶ。

「大師匠様、私、どうしたらいいんでしょう……。」

師匠とは依然として連絡がつかなかったが、それでも期待を捨てき
れず、水晶に問いかける。しかし水晶は無言のまま、その表面に暗く
沈んだ女の顔を返す。自信の無さが顔に現れたそれは理想とする師
匠とはあまりにもかけ離れていて、オルミーヌはますます落ち込ん
だ。

懐に水晶を戻して踵を返したその時。レイの悲鳴と水を叩く音に
はたと我に返った。落としかけた水晶を慌てて抱きしめて、振り返
る。

まさか討伐隊がもう来たのか。それとも廃棄物か、と手持ちの符呪
札を確認する。しかし手元にあるのは六枚のみ。軍を相手どるには
とても足りない。

心許なさに体が竦み、勢いが衰えるが心に描いた師匠の姿が己に鞭
を入れた。

(しっかりしろ、オルミーヌ！私は大師匠様の弟子、十月機関の魔導師
！)

使命感に己を律すると二つの胸の膨らみが跳ね馬の如く存在感を
示した。

川の折れ曲がった箇所を林を突っ切って省略する。間も無く血塗
れで川に浮かぶレイの姿を見つけて、オルミーヌは叫んだ。

「魔導結社十月機関、漂流者を守るのが、我らがしめ、いいいいいつ
!??!」

少しでも敵の意識を逸らすため声を張り上げて、飛び出す。しかし
着地した瞬間、待ち受けていた罠に足を取られ、オルミーヌの体は宙
に浮かび上がった。混乱しつつも勢いが衰えるに従い逆さまに揺れ
る視界と、足を締め付ける縄の感触に自分が宙吊りになった事を自覚
する。

と、視線を感じて改めて周囲を確認するとレイの他にエルフの子供
達もいる事に気づいた。皆血と泥に塗れており、それぞれ体を洗った
り洗濯をしたり、火にあたる子供もいた。

肝心のレイは水底に足をつけ、腰まで水に漬かった状態で困惑の表
情を浮かべている

体を隠すことも忘れて立ち尽くすレイよりもオルミーヌよりも先にエルフが口を開いた。

「あ、オツパイメガネだ。」

「オルミーヌだ。」

「オルミーヌね。ええつと、オルミーヌさん、大丈夫ですか？」

「……オルミーヌです！大丈夫じゃないです、早く、早く降ろしてください。」

己の早とちりを悟り、オルミーヌの頬に熱が集まる。気恥ずかしさから語気を荒げて急かすとレイはたと我に返り、その縄を断ち切った。やっと地上に戻ったオルミーヌは、突き刺さる視線を振り払う勢いで立ち上がる。その様子に痛めていない事がわかったレイはほつとほつと、改めて罨を見る。

「あーこれ、私が作ったやつか。良かったですねえ。」

「どこですか！」

「いやいや、この二人のなんて凄いですよ、落とし穴に杭とか、圧死させるやつとか矢が飛び出るやつとか……流石に危ないんでもうやってないですけど。」

「僕達が教えたんだよ。」

「だよー。」

誇らしげに胸を張る兄弟に、オルミーヌはエルフが元は狩猟を生業としていた事を思い出し戦慄した。

腕白盛りなこの兄弟は、飼猫が教えられずとも遊びの中で自然と狩りの腕を磨くように、本能的に罨の技術を身に付けていた。

余談だが与一と信長がこの二人との交流を極力避けていたのは、過去にこの二人の罨に嵌り、死にかけてたからでもある。

血相を変えて飛び出してきたオルミーヌの様子に、自分の姿を思い出しておおよそ察したレイは気まずそうに言葉を足した。

「信さんもこれから作るって言ってましたから、後で場所を聞いた方がいいですよ。それよりあの、本当に大丈夫ですか？よかつたら送ってきましょうか。」

言われてレイが指す先。つい先程まで死体を運んでいた血と脂に

濡れて変色した荷車を認めて、間も無くオルミーヌの絶叫が森に木霊した。

第5話

5.

エルフの村の襲撃から二日目の昼に討伐隊が村に到着した。

数は二百名余り。代官所のほとんどの兵力が注力されており、勘のいい兵士はエルフの村を一つ滅ぼすには大袈裟すぎる事に、中には漂流者の噂を聞きつけて、エルフの背後を勘繰る者もいた。しかし先の戦から四十年。人間にとつて、亞人が脅威足り得る存在である事を忘れるには十分な歲月である。加えて戦争の不況による不安と疲弊とが彼らを樂觀主義に走らせた。

村にはエルフや漂流者はおろか先の兵士の姿すら無く、井戸には糞便が投げ込まれていた。更に土間と便所の土が無くなっているなど、明らかに不審な痕跡があるにも関わらず、彼らはまたしても深く考えず結局最後の時まで自分達が狩られる側である事に気づかなかつた。

決行は夜だった。村には討伐隊が野営していた。拙速を尊ぶあまり、討伐隊は最低限の糧しか持たされていなかったのだ。消えたエルフを探して動く事も、さりとて兵士を休ませぬまま引き換えすわけにもいかず、エルフの村で夜が明けるのを待つ彼らに遂に豊久が一計を仕掛けた。

肝心の作戦は実に単純なものだ。

豊久を筆頭に数人が囷となつて隘路へ誘い込み、その背後を信長率いる弓兵が襲う。それだけだ。実に彼らしい単純な戦術だが、それ故に効果は絶大であつた。

元よりこの場にいる兵士は前線に立てない、練度も士気も低い連中である。渴きと飢え、不眠と疲労にただでさえ低い士気は勿論思考力も低下し、呆気なく釣り上げられた。すかさず左右の家々に火を放つて退路と視界を妨げ、続けて糞便を塗布した矢を射かける。それだけで討伐隊は混乱し隊列を崩した。狭い路地では彼等は反転すらままならない。身動きの取れない状態で降り注ぐそれは恐怖でしかない。加えてエルフは皆弓の申し子である。長らく触れていないとはいえ、直線上に並び立ち往生する兵士など動かない的も同然であつた。

敵将はその時漸く、村そのものが罨であつたことに気づくが既に遅く。兵士は恐慌状態に陥り、彼の声は届かない。

と、悲鳴と怒号が飛び交う中を豊久の咆哮が切り裂く。人の物とは到底思えない、信長曰く猿叫と称されるそれはその場にいた全ての者の意表を突いた。

兵士達は自分が黄泉の通い路に立たされている事を理解し、呼吸すら忘れ、数秒の余韻と共に夜の静けさが戻る。その隙を豊久は見逃さなかつた。煙に視界を奪われ、恐怖と混乱の最中にある兵士の中へ豊久は迷わず飛び込んだ。

狙うは大將首唯一つである。大刀を掲げ、獲物を前にした猛獣のような前傾姿勢で一直線に駆け抜けていく。その歩みを止められるものなどいない。戦意を喪失した兵士らは呆然と道を開け、自ら敵を懐に入れるとあつさりと首級を奪われた。途端、二百人余りいた兵士は瓦解した。

長年恐れていた人間、それも大軍を呆気無く返り討ちにした事実、エルフは拍子抜けし、暫し呆けていた。しかし徐々に兵士の姿が無くなり、やがて死屍累々の光景に勝利を実感するとエルフ達は戸惑いながらも勝鬨を上げた。それは長らく忘れていた心からの歓声であった。

村を見下ろす木の上で、一部始終を眺めていたレイは吊られるように歓声を上げた。

「すっごいすっごい、すっごいなあ！見ましたか与一くん！ダツてしてどどどってしてズアーってしてぞばって！」

「はいはい落ち着いて。落ちますよ。」

双眼鏡を握りしめ、逸る馬の如く足を動かすレイを同じ枝にいた与一がどうしようと宥めた。

興奮のあまり前のめりになっていたレイは言われて「おっと」と慌てて体を後ろに逸らし、再び双眼鏡を構える。

その横顔には、彼らの手口に対する恐れや嫌悪の色は一片も無い。あるのは純粹な憧憬と勝利の喜悅のみである。

その目には覚えがあつた。初陣前の野望に燃える若武者。寝物語

の英雄に興奮する幼子。

そして。

(まるであの人だ。)

信長も豊久もレイも。手法を選ばない。勝利の貴賤に頓着しないその姿勢に与一の脳裏にかつての主君の記憶が蘇った。

武士の道を外れ、笑って外道を走る男が。自分を甘つちよろいと切り捨て、この世の全てを見下し嘲笑うその顔が。

三人とは似ても似つかない筈のその姿が忌々しい程鮮明に浮かび、与一の顔に険しいものが走る。しかし逃亡兵を追う支度が出来たとエルフから声をかけられ、それに応じる頃には普段の表情へと戻っていた。

二人とも木から降り、それぞれエルフ、オルミーヌと合流を果たす。

「それでは我々はこれで。お二人とも、お気をつけて。」

「はい。与一くん達も、気をつけて。」

「あつちよつと！そ、それじゃ失礼します！」

与一率いる追い討ち組と別れて、レイは村へと走った。興奮冷めやらぬ様子で挨拶を交わすと同時に駆け出すレイに、オルミーヌが慌てて後を追う。

その後ろ姿が夜の闇に消えるのを確認すると、与一らも出立した。

(なんなのこの人。見た感じブシジヤないみたいだけど……)

自分の斜め前を走るレイを見つめながら、オルミーヌは思案に耽る。彼女にはまだレイという人物が掴めなかった。

それに関して豊久達も同様だが、彼らに対してレイはあまりにも普通の人間に見えた。職務上、他国の権威者とも接する機会の多い彼女がレイは自分の知るどれとも違うと感じていた。

寧ろ人畜無害な女そのものである。腕に自信があるようにも、智慧に溢れた人物にも見えない。むしろ真逆だ。戦いとは無縁か。巻き込まれる側の人間にしか見えない。

(それとも、漂流者ってああいうのしかないの?)

師匠達と行動している漂流者の事を思い出し、納得しかける。彼等について、オルミーヌは殆ど知らないが明らかに堅気の人間では無

かった。

他と比べてまともに見える分彼女の落胆は大きく、溜息をつきかけて、不意にオルミー又はオルテの指導者について思い出した。六十年前に突如として現れ、オルテをまとめ上げて大国にした男である。

漂流者だった、と言われているが実際の所はわからない。彼やオルテの行った所業はとても同じ人間とは思えないものばかりだった。

資料を見る限り彼もまたレイ同様、一目立たない男であった。血塗られた経歴に反して、その姿は市井の男達とそう変わらなく見えた。

まさか、と頭では否定するが昼間の一件もあつて疑念は晴れず、抱いたままオルミー又は村に着いた。

夥しい死臭と汚物の臭いにオルミー又は思わず口を覆い、顔を背ける。

幾度となく修羅場を見てきた彼女であつたが、未だにその光景と臭いには慣れなかつた。恐る恐るレイの様子を伺うと彼女もまた顔を顰めて口を覆つており、その様子にオルミー又は僅かな安堵を覚えた。

明日。討伐隊が漂流者を一人連行し代官所へと向かつていた。

無論討伐隊は全員信長、豊久以下エルフ達が偽装した姿であり、連行されているのはレイである。彼らは討伐隊を倒すとその勢いで代官所へと乗り込み、本拠地を落とすにかかつた。

言い出したのは豊久である。エルフ達が廃城で過ごすようになつて初めて女の姿が無い事に気づいた彼は、その時やつと女達が代官に捕らえられている事を知つたのである。ところがこれに関してはまだ無策で、静かに憤りを露わにする彼に信長は止めるのは叶わぬと悟り、即興で作戦を練り上げた。

直前になつて初めて詳しい内容を聞かされたエルフ達からはやはり躊躇する声が上がつた。女を奪われたエルフ達は、人間とはいえ女を差し出すのはいい気がしなかつたのだ。

「人目を誤魔化す時には、別に注意を引くものがあつた方がいいと思

うんです。

彼らが村を襲ったのは漂流者と関わったから、なんですよ。だってら手ぶらで行くより手土産があった方がらしいかな、と。あ、ちなみにこれ提案したの私です。信さんの作戦はあくまで兵士に偽装するだけです。」

反感を避ける為、レイがあくまで自分の意思である事とフリである事を強調すると、納得には至らないものの不承不承受け入れた。

髪を乱しあちこちを土で汚し、木苳を潰して血糊に、草を絞ったものを塗り付け青痣に見せかける。

仕上げに後ろ手を縛って信長の横に立てば、悪漢に囚われた哀れな捕虜にしか見えない。

「悪くないぞ。」と褒める信長にレイは気を良くし、服も破ろうとしたが流石に止められた。

明日には一行は代官所に到着していた。

待ち望んでいた兵士の帰還。その上わかりやすい戦果を伴われて、代官所の門は拍子抜けする程簡単に口を開いた。あとは破竹の勢いである。

攻略は半日とかからなかった。

城は討伐隊にほとんどの兵を注力していたため最低限の兵しかなく、武器を交える事もなく投降した。女達の救出は豊久らに任せ、信長とレイは執政室へ向かう。

食料や水、衣類や燃料、武器はもちろん、書類は地図から台所の走り書きまで何から何まで全て根こそぎ頂く予定だが、まずは本丸を落とすのが先決である。

数人のエルフも引き連れ、各部屋を無力化しつつ上へ上へと向かう中、レイがある一室の前で足を止めた。

それは書庫だった。高官を応対するための一室に隣接する権威付けと道楽のための一室である。

先にエルフ達が入って安全を確認し、それを信長に告げるとレイは制止する声も聞かず我を忘れて飛び込んだ。

壁一面の本棚に加えて未使用の紙と筆も大量に置かれている。

懐かしい匂いに手を震わせながら試しに手にとって中身を確認すると、レイはそのまま本に顔を埋めた。

羊皮紙や和紙を懸念していたが洋紙のようだった。レイが持ち込んだものに比べると質は劣るが予想していたよりも遥かに高かった。寸法も規格化されており、文字は手書きではなく活字で奥付まである。流石にISBNは無かった。

要人用の部屋故に、堅い内容のものが多いがこれだけ印刷技術や文化が確立していると言うことは期待が持てそうである。

撫でたり深呼吸をしたりを繰り返して、不気味な声を漏らすレイにエルフ達は引き、信長は「こいつさてはこれが目当てだったな。」と呆れつつ、も良い傾向だとほくそ笑む。

信長がレイに同行を許した理由がもう一つあった。

それは戦場に慣れさせる事である。

信長はこちらでも火縄銃の量産を計画していた。

エルフの反応や兵士の装備から既に、彼はこの世界に銃は存在しないと見当をつけていた。

生き物は未知の存在に恐れを抱く。それは人間もエルフも変わらない。たとえそれがどんなに優れた道具や知識であっても、大抵の者は否定し拒絶するものだ。いきなり受け入れる者はほぼいないと言っている。故に完成したらまずレイに使わせようと考えていた。

レイは都合の良い女だった。

貧弱で頭も弱く、凶体ばかりが大きくなった子供のような女だ。エルフの多くも既にそれを見抜いており、彼女に対しては信長達に向けるような畏怖のそれは無い。今も彼女の奇行に呆れ、なんなら苛立っている。

だからこそ銃の有用性を知らしめるのに最も適していた。

信長には野望があった。それは豊久を大将にするに留まらず、一国の長とする事である。その為には銃と、それを受け入れる土壌を作る必要がある。

信長は突如不穏な笑みを浮かべ、徐にレイに近づいた。

気配に敏感なエルフは本能的に道を空け、声も上げず見守ることし

かできない。

本に夢中なレイは背後から近づいてくる足音にも不吉な気配にも
気付かず、

「遊んどる場合か馬鹿たれ！」

怒号と共に振り下ろされた拳をモロに食らうのだった。

第6話

6.

漂流者が代官の城を落としてから、廃城の周りには続々とエルフ達が集っていた。

彼らは周囲の村の者であり、先日代官所から救出された女達の故郷の者である。彼らは帰って来た女達の言葉と信長が持たせた手土産に呼応し、自ずと漂流者に加勢したのだ。信長が用意したそれはオルテの零落ぶりを示す書類と、彼らを奮い立たせ決起を促す檄文である。感化されたエルフ達は続々と蜂起し漂流者の元へ集い、やがてエルフの占領地がオルテの支配から完全に脱するのにそう時間はかからなかった。

着々と兵が増え、出だしは好調であると言える。一応反乱軍の本拠地ではあるが行き交うエルフ達の表情は活気に満ちており、物々しさとは対照的である。エルフ達は今は失った物を数えるよりも、取り戻していく喜びを純粹に噛み締めていた。

しかし問題が無いわけではない。晴れ晴れとした空気に紛れて見えにくくなっているだけで、それは変わらずその場に存在し続けている。た。

集まったエルフには漂流者といえど人間への不信が拭えない者も多く、恭順の意を示してはいたがその実腹背の者が大半であった。彼らに助けられ、最初に蜂起した村が率先して従っていたため彼らもそれに倣っていたが、火種は未だ燻っていた。

そのため、信長が豊久をエルフの王にすると言いだした時、レイは思わず「何言っただこいつ。」と齧っていた干し杏を落ししかけた。たしかに歴史的に見て、余所者が支配者になるのは珍しい事ではない。継承者無くして王位が空になったため、よそから引つ張ってくるというのは古今東西を問わずよく見られる。

だが彼らは往々にして不幸な末路を辿った。それはやはり、彼等はどこまでいっても余所者でしかなかったからだ。

どの派閥や身分にも属さない、自分達の枠組みの外の存在であるが

故に既存のそれに囚われず、多少の無茶や無理も押し通せる。しかしそれは裏を返せば、いつ切り捨ててもいい人間。あくまで客分に過ぎないから、大目に見られているという事でしかない。今、エルフ達が漂流者達に付き従っているのもつまるところはそれなのだ。

しかし王になるといふのであれば話は別だ。それは社会の一員になるという事であり、上下関係が生まれる。そうならば今度はその特殊な立場が枷となる。元より誰が選ばれても不満が噴出する物だが、それがなし崩しになった余所者であれ余計に反感を買う。それが人間ともなれば尚更だ。

所詮エルフ達は成り行きで行動を共にしているに過ぎない。既にエルフ達の間では漂流者への感情に温度差が見られ、分断が生じるのも時間の問題である。結婚なり養子縁組なりで上手く立ち回る事が出来れば多少事情は変わるが、残念ながらこの世界では異種族間には成せないのも望めない。

直接漂流者に助けられたシャラとその村の者は今でこそ漂流者を擁しているが、果たしてどうなるかは誰にもわからない。確かはの内輪揉めともなれば、後ろ盾の無い漂流者が圧倒的に不利だということだ。

結局豊久が王位を固辞し、エルフの各村長の合議制になったと聞いた時、レイは心底ほつとした。碌な死に方をしない事は覚悟していたが、それでもマーシヤやマルクと敵対するような事態は出来れば避けられたかった。

ともあれ、漂流者達は順調に勢力を増やしていた。

信長は各村から便所と土間の土を集めるよう通達し、既存の分で試験的に硝石の精製を始めた。併せて各村の鍛冶屋に声をかけ、種子島の製造を依頼していたがこちらはあまり期待できなかった。与一、豊久はそれぞれの得意な分野でエルフを鍛えていた。レイは増加する人員や物資のため城下の整備を手伝う傍ら、エルフに混じって一部の訓練に参加していた。

命じたのは信長である。初めて聞かされた際レイは思わず耳を疑った。自分が戦力外なことは重々承知しており、戦力として数えら

れていないと思っていたからだ。

もしや自分でも気づかなかっただけで何か才能が、と期待したが詳しく聞かされる内に自分の能力に期待していたわけではないと知って落胆した。しかし自分にも出来る事があるという事が嬉しくて、一も二もなく頷いた。隣で聞いていた与一と豊久はその手口に呆れ返り、オルミーヌも「なんていやらしい男なんでしょう。」と本部への報告で語った。

新たな役割のため、レイに課された訓練は主に三つ。走り込みによる体力の増強、号令に合わせて動く集団行動、そして肝心の射撃訓練である。

まずは走り込み。

森での生活で多少鍛えられたとはいえ、レイの体力も筋力もエルフ達には遠く及ばず、まともについていくことすら出来なかった。ところが並走する豊久は鎧を着たまま汗ひとつかかずこなしており、レイはつくづく己の体力の無さを、そして豊久の化け物ぶりを痛感した。エルフからも豊久からも憐れみの目を向けられ、早速落ち込みかけたレイはせめて気分だけでも盛り上げようとアメリカ海兵隊訓練歌を歌って臨んだ。

どうせ意味はわからないだろうとたかを括っていたが、翻訳の札は母国語以外にも適用され、完全翻訳された物が森中に響き渡った。男衆は皆その内容に絶句していたが、本人は走るのに必死で全く気付かず、その上無駄によく通る彼女の声が余計に歌詞の酷さを増幅して、結局走り終えるまで誰にも止められなかった。

走り終えたレイがやっと気づいた時には既に遅く。集落にいた者の殆どが耳に入っており、その後数日レイは誰とも目を合わせられなかった。

そんな彼女に追い討ちをかけるが如く、信長は一同に同じ物を訓練の際に唱和するよう命じた。後日一部歌詞を変更した物が配布され、訓練歌として定着した。

続いて集団行動。

これは学生時代の杵柄で最も慣れるのが早かった。

最後に射撃訓練だがまだ銃が製造できないため、代官所で篡奪した弩が代用された。多少勝手は違うが、訓練の目的はあくまで号令に合わせて体が動くようにする事。攻撃の躊躇いを無くす事である。加えて製造を始めても完成や本格的な運用には暫く時間がかかる為、それまでの間の護身用と後の転向も考慮して弩が採用された。

銃と同様に習得が容易な事で知られる弩だが、完全に初心者レイの手つきは危うく、当初は装填にも難儀する有様であった。しかしエルフ達にわざわざ弩を使う理由がわからない。と揶揄われたのを機に的をエルフだと思うようにした途端、目に見えて上達しだした。結果がすぐ出る事もあり、自信をつけたレイは訓練に熱が入り、翌日には的に当てられるまでに成長していた。

撃つ度に一喜一憂し、当たる度に振り返ってこちらの反応を見るレイの姿に豊久は既視感を抱いて、尋ねた。

「お前、戦は初めてか？」

「え、ええ。実際に見るのもするのも初めてです。あれ、言ってますませんでしたっけ？」

なるほど、と豊久は頷いた。経験が無いのは聞き及んでいたが、まさか本当に全く無いとは思っていなかった。常に戦乱と共にあった彼にとつて、戦が無い世と言うのは想像もできなかったのだ。

認識のズレに気づいた彼は、ならばこの浮かれようも無理は無い。と納得し、同時に懸念した。

弩や銃が他と比べて習得が容易なのは周知の事実だが、同時にそれ故の欠点もある。即ち過信。武器の性能を自身の実力と混同して見誤り、蛮勇に走らせる。経験の少ない若者がよく陥る事態である。種子島の場合、元々の威力が高く、斉射を主とする為特になりやすい。それは戦場においては命取りにしかならない。

手柄を急いで初陣首になる姿が容易に想像できて、豊久は内心舌打ちする。

戒めるのは簡単だが、口にするのは憚られた。それは豊久自身も通った道だったからだ。

「ちくと貸してみい。」

「どうぞ。そういえばお豊さん、クロスボウ使った事あるんですか？」
「ない。」

レイから弩を借り、豊久が見様見真似で撃ってみせると矢は的の真
ん中近くを貫いた。

途端にレイはすごいすごいと豊久を囁し立てる。

「すごいじゃないですか、初めてなのに一発で当てるとか……本当に、
初めてなんですよね？」

「おう。じゃが種子島ならよう使つとつた。」

「そつかあ……そつかあ。」

実際に種子島を撃つ所を想像して俄然意欲を増すレイに豊久は短
銃を無くした事を少し惜しく思った。烏取坂で追い縋る直政を迎え
撃った銃である。一体いつ落としたのか、廃城で目覚めた時には無く
なっていた。見せてやれば、さぞかし興奮しただろう。

過信は身を滅ぼすが、不信よりは前進できる。少なくとも上を見て
卑屈になるより、奮起する方が飲み込みも早く教える側として楽し
い。

彼女が先走りそうになったら、自分が更に先を走ればいい。かつて
父親や叔父がしてくれたように。首を獲るしか能の無い自分には過
ぎた事かもしれない。しかし、あの日見た父の面影が豊久にそう思わ
せた。

「やつほーミルズくん、今いいですか？」
夜。

廃城の一室に設けられた、ミルズの部屋に顔を出したレイは返事を
聞くよりも先に部屋に入った。

慌ててミルズが机の上の書類や本を退かして場所を作るとレイは
そこに飲み物と菓子を置き、自分も近くの椅子に腰掛ける。

菓子とは言っても、森の果実や木の実を乾燥させただけのものだ。
各村から人が集まり、物資も多少余裕ができたとはいえ、甘味はまだ
稀少であった。

恐縮するミルズにレイが率先して手をつけると彼も手を伸ばし始

める。

ミルズは代官所で働いていた文官である。

本来であれば彼も他の兵士ら同様、豊久やエルフ達によって処刑される筈であった。

しかし彼が必死に無罪を訴えたため、エルフは「殺したら自分も連中と同じになる。」と踏み留まり、刑を免れたのだ。

無論そのまま放免とはならず、彼は信長達の元で働かされ増えた人員や物資の管理を任される事となった。以来、レイは彼の元をちよくちよく訪れていた。

同情も多少あったが、レイが興味があつたのは彼のその知識である。

代官所から奪った書物は翻訳の札のお陰で概ね判読できたが、オルテ独特の言い回しや固有名詞などは直訳に近い形に訳されており、完全に理解するには程遠かった。そこでレイはミルズに教えを乞うた。オルミーヌに頼む手もあつたが、オルテの役人である彼の方が精通しているだろうと判断したのだ。

加えて彼はいつエルフ達に殺されてもおかしくない。ならば今のうちに聞き出そう、ついでに自分が積極的に関わる事でエルフ達の牽制になればという打算もあつたが、無論これは後付けであつた。

夜になるとレイは彼の元を尋ね、読んだ本の中から単語の意味や用法、その成り立ちなどを詳しく聞いていた。

ミルズも最初のうちは監視か懐柔かと怯えていたが、すぐに彼女が自分の知識にしか興味が無いとわかり、また彼自身、人との関わりに飢えていた事もあつて協力を拒みきれなかった。刑を免れたとは言え、ミルズはエルフ達からは白眼視されていた。廃城の一部を整備し、専用の職場と個室を与えられるという破格の待遇だったが、職場は単に書類仕事のためその方が都合が良いというだけで、個室もエルフと同室では危ういからである。

職場には数人のエルフが共に働いていたが殆ど口も聞かず目も合わせず、仕事が終われば逃げるように部屋に戻るしか無い。文字通り彼は孤立無援であつた。

そこへ人間のレイが友好的に現れば、たとえ利用されているとかつていても、それでも一人怯えて過ごすよりマシだと受け入れてしまうのも無理は無い。不本意な形で始まった交流だが、次第にミルズも悪い気はしなくなっていた。元より彼は勤勉な人間である。知識を得るのは勿論、教えるのも抵抗は無い。それに誰かと本の内容をあれこれ話し合うのは、学生時代に戻ったようで嬉しかった。

一通り授業を終えると、軽く雑談をするのが日課であった。

ミルズは『帰ってきた我が総統』を本棚に戻しつつ、レイに尋ねる。

「そういえば、あの赤い人と訓練をされてるみたいですね。」

「あーはい。信さんが一緒にやれって。」

「大丈夫なんですか？かなりキツイみたいですが……。」

ミルズは信長を思い浮かべ、何を考えているのかさっぱりわからなさと唸る。オルテに女性の兵士はいない。過去を紐解けば勇猛な女戦士はいたが、あくまで個人に過ぎず、兵隊と配備された例はなかった。そのためレイが兵に数えられてると確信すると、不可解だと顔を顰めた。

ミルズから見てもレイは戦闘に向いているとは思えなかった。与一のように見かけによらないのかとも思ったが、訓練中の彼女を見る限りそうではない。漂流者と言われても正直信じられず、こうして話していても市井の女と大差ないように見えた。

「そらー大変ですよ。今日も何回も死ぬかと思いましたが。けどまあ信さんの事ですから、何か考えあつてのことですよ。あの人、自分の得にならない事はしませんから。」

羨ましい、とミルズは思った。

ミルズに友人はいない。学生時代の友人とは卒業以来疎遠になり、今後も恐らく会うことは叶わない。同僚は親しくなる前に全員死んでしまった。そのため彼等を気の毒だとは思ってはしても、悲しいという気持ちは殆ど無い。

だからそんな風に笑える相手がいるレイが、ほんの少しだけ妬ましかった。

ミルズの部屋から自室に戻る途中でレイはシャラの背中を見つけ

た。蜂起の音頭を取って以来、彼はエルフの実質的な顔役となっていた。自然と話す機会も多く、遠目にも彼だとすぐにわかった。

互いに気づいた途端、慌てる彼を不信に思い近づこうとして、その影からエルフの女が二人現れたのを見て、足を止めた。女達はレイを一瞥すると逃げるように去っていき、やがて姿が見えなくなるとシヤラが苦しそうに口を開いた。

「……すみません。彼女達、まだ慣れてなくて……。」

「うんにゃ、仕方ないですよ。私だってエルフの見分け難しいですもん。」

息を呑む音はエルフでなくとも、耳に届いていた。

代官所の救出以後、エルフの女達は漂流者と関わろうとしなかった。彼女達の傷は深く、恩人とは言え人間の男である豊久達は無論、レイの前にも姿を現す事は無かった。

エルフ達は人間の見分けがつかなくなった。元々他種族との交流が盛んというわけでもない。長らく奴隷として虐げられ、同族同志の交流すら儘ならぬ状況だったのだ。他種族の見分けなど、ましてや雌雄の区別がつく筈もない。それが異世界の人種であれば、尚の事である。

漂流者達も強いて関わろうとしなかった為、いつからか両者の間には不文律が存在していた。以前は持ち回りで行っていた炊事や洗濯などは彼女達が回復してからは一任し、なるべく彼女達のいる場には出ないようにしている。しかし共同生活故、不意の遭遇は避けられない。今度のように逃げたり、遠巻きに見たりするだけならまだ良い方だった。

接触すら叶わない以上、時間が解決してくれる事を祈る他無い。打ち解けるのは無理でも、せめてこれ以上彼女達の感情が悪化しないよう祈りつつ、レイはその場を後にした。

廃棄物、襲撃

第7話

7.

その夜もレイはミルズといた。

「何か妙な音しません?」

「はい?」

唐突なミルズの言葉にレイは『オルテの貴族名鑑』から顔を上げた。言われて耳を澄ますが無も聞こえない。気のせいではと言いかけて、空になった皿が小さく震えていることに気づいた。同時に低い地鳴りに似た音が聞こえ始める。

徐々に迫ってくる音に不穏な気配を察し、ミルズが外を見ようと腰を上げかけたその時。轟という音と共に窓の外を炎の波が通り過ぎた。驚愕したミルズが椅子から転げ落ちる。

「ひええっ!」

「今のは一体……。」

椅子を蹴って立ち上がり、外へと飛び出したレイの目の前を火の粉が掠める。辺りはまさに火の海であった。城下の集落は紅蓮に包まれ、火の手に追われたエルフが方々へと逃げていた。その勢いは凄まじく、すぐにレイは火の不始末では無いと勘づいた。

廃城の周囲にはオルテの報復に備えて常に見張りが配置されている。森の民である彼等は目も耳も人間よりずっと優れている。その彼等がこれ程被害が大きくなるまで、誰も気づけないというのは信じ難い。レイは真つ先に硝石の精製施設を疑ったが無傷の作業場と貯蔵所を確認して撤回した。

即ち奇襲。オルテの斥候かあるいは。レイの思案を狂喜に満ちた若い女の笑い声が裏付けた。

「さあ出てこい漂流者!!?きれいに焼いて舞わせてやる!」

「すぐに外へ!エルフ達について行ってください!」

「えつちよつとレイさん……!」

訓練を開始した日からレイは弩を常時携帯していた。矢を装填しながらいまだへたり込んでいるミルズにそれだけ言い、レイは振り返らず信長達の元へと走った。

「信さん！敵襲ですか！」

「おう、騎馬が数人と大将が二人。多分廃棄物だ。」

双眼鏡を渡され、信長が指す方向を確認するとたしかに一組の男女が炎を背に立っていた。一人は全身に刺青を入れた十字槍を掲げた大男、一人は鎧姿の華奢な少年のような女である。

炎が左右に分かれ、二人の行き先に道を作る様子にオルミーヌの言葉が断片的に蘇る。

「廃棄物としてこちらに来る人間はもはや人とは言えない。」

「きつと何もかもが憎いのでしよう。全てを滅ぼさなければ気が済まない程に。」

(あれが、廃棄物……！)

彼女の言う通り、二人は姿だけ見れば人と変わりなかった。が、第六感。あるいは本能とも言うべき何かがあれば人ではない、と警告を発していた。

現に男が槍を振るうと、身の丈程もあるそれは地面はおろか石垣すらもを容易く抉り取り、女が剣を振るえば刀身から迸る炎が斬撃となつて放たれ、一帯を包み込んだ。

「なんじゃありや、妖の術かなにかか？」

「まるで弁慶のようですね。」

驚いてはいるが怖気付いた様子はなく、いつもの調子の豊久と与一がレイは落ち着きを取り戻す。

「俺は騎馬を、与一とお豊がアイツらをやる。シヤラ、男どもを集める。弓を忘れるな。レイ、お前はエルフ共と女子供を森に避難させろ。」

「っはい！三人共、絶対に勝ってくださいよ！」

言外に戦力外だと通達され、齒噛みしつつ悔し紛れにレイが言うところ三人は無言のまま得意げに笑うだけであった。

三人と別れたレイは早速炎に追いやられるように斜面を駆け上がってきた数人を捕まえ、延焼の緩い場所や燃え尽きた場所を探すよう指示を出した。次いで地元のエルフ達を先導役に命じ、森の中に逃げる事、火に対して垂直に逃げる事。決して山上には逃げないよう固く命ずる。半ば浮き足だった彼らは異論を挟む余裕すら無く、指示を聞くや各々声を張り上げて誘導を開始した。

三人が廃棄物達を引きつけてくれているお陰で妨害に見舞われる事も無く、間も無くエルフの殆どが廃城を脱した。レイも彼らに混じって誘導員として道の途中に配置していたが、やがて波が引いて人の姿が無くなると、城の方に配置していた内の一人がやってきて避難完了の報告をした。彼らは戻って信長達と合流すると言い、レイにくれぐれもよろしくと言って引き返していく。彼らを見送った後、レイも避難所に向かおうと道を辿っていると時を置かずして来た道に戻ろうとする女エルフとぶつかった。よろけかけた体は同時に掴まれた腕に引き戻され、必死の形相が眼前に迫る。

「娘を、うちの娘を見なかった!? 娘が、あの子がどこにもいないの! きつとまだあそこにいるのよ!」

「お、落ちて着いてください。娘さんの名前は? 年……じゃなくて特徴は?」

「お願い離して! 離しなさいよお!」

知らぬとわかるや弾けるように離れ、廃城へと戻ろうとする。その後ろ姿に今度はレイが慌ててその腕を掴んだ。暴れる女をなだめ、引き止めている内に今度は彼女を追って来た者達が現れ、取り押さえられた。皆、女であった。

崩れ落ちる女の姿にレイの腕は今更痛みを訴え出した。戻るべきか、否か。逡巡するレイの脳裏に唐突に先日 of 豊久の姿が蘇り、迷いを振り切った。頭を振った後に女達から娘の特徴を聞くと何度も名前を口に出し、頷いた。

「私が先に行って探します。あなた達は男の人を呼んでください。」

夜目が利き、耳も良い彼女達の方が信長達を見つけてるのは早い。判断するや否やレイは元来た道に戻り、廃城へと走った。

状況は悪化していた。

煙と炎が見慣れた景色を遮り、位置を曖昧にさせていた。今や城下の殆どが火に巻かれ、辛うじて残った残骸がレイに道筋を教えてくれた。

一応レイは少女の居場所に検討をつけていた。が、この状況では少女が辿り着いているか、そもそも彼女も同じ事を思いついているかもわからない。しかし今のレイには他に心当たりは無く、そう願ってそこへ向かうしかなかった。

人の気配も無く、あちこちに転がる体は一目見て絶命しているとわかるものばかりだった。家畜もエルフも雌雄の区別すらつかなくなるまで焼かれ、あるいは血を流している。

踏み固めただけの道はぬかるんで足を取り、進むに連れてレイの足を重くしていった。

漸く目的地が見えた所で不意に息苦しさが増した。反射的にその場で身を低くし、ひとしきり咽せた後、顔を上げたレイは絶命した見張りと目が合った。胸を貫かれ、血を流す彼の手には呼子が握られたままで、レイは知らず知らずの内に弩を握る力を強めた。

と、近くから女の怒声が響いた。

「どこだ！どこに逃げやがった漂流物ども!!？」

咄嗟に石垣の影に身を潜め、様子を伺う。女は苛立たしげに地面を踏みならし、こちらに向かっている。

近くに豊久の姿は無い。レイの胸に一抹の不安がよぎるが、握りしめた弩の硬さに奮い立たされ、装填を確認した。

「見つけたあー！」

女の声にレイは身を竦ませ、振り返りざまに弩を構える。が、引き金を引くことは無かった。女の前に一人の少女が立ち尽くしていたからだ。

鎧の女ことジャンヌは苛立っていた。折角漂流者を見つけたと言うのに見逃してしまい、その隙にエルフ達も逃げ出してしまったからだ。

これではもう漂流者を誘き出す手は使えない。腹いせに適当な建物を燃やすが鼠の一匹も現れず、益々不満が募った。

彼女はエルフを憎悪していた。

漂流者に与しているというだけでも万死に値したが、弓に長けた彼らは憎つくきアングル兵を連想させ、それが彼女の神経を逆撫でた。呼べども探せども漂流者は現れず、募る苛立ちと焦りがジャンヌに本来の目的を忘れさせた。そして逃げ遅れて物陰に隠れていた少女を見つけた時、それは完全に霧散した。

引きずり出された少女は汚れた人形を胸に抱いたまま、呆然とジャンヌを見上げる。その姿は長く尖った耳も相まって、まるで哀れで無力な子羊といった具合で、それが余計にジャンヌの気に障った。憎悪と喜悦に歪むジャンヌの顔に炎が迸る。獲物を前に舌なめずりする獣の如く揺らめくそれに、少女は体が冷たい物に貫かれる錯覚を覚えた。

「どうしたんだいお嬢ちゃん？ ママンやパパとはぐれたのかな？ 安心しな、すぐに会わせてあげるからさあ！」

憎悪で歪んだ顔を更に歪ませ、ジャンヌは短剣を少女に振りかざした。と、同時に甲高い警笛の音が辺りに響いた。音は建物や森に反響し、長い余韻を残す。

音の方を見遣るとレイが、笛を咥えたまま弩を構えていた。少女は音に身を竦ませるが未だ凍りついたままだ。笛に歯を立てつつレイは今度こそ引き金を引いた。

「このっクソがッ!?」

すかさずジャンヌがレイに向き直って短剣を放とうとするが、レイの方が早かった。既に装填も照準も済ませてある。後は放つのみである。

放たれた矢は振り上げた腕の方、ジャンヌの鎖骨と胸の間を鎧ごと貫き、その衝撃にジャンヌは後ろへと倒れた。大地を伝う音と振動に少女は漸く体の動かし方を思い出し、一步、二歩と後ずさると弾けるようにレイに駆け寄った。彼女の特徴は、探していた少女のそれと一致している。

まだ言葉は思い出せないが、それでも何か言おうと口を動かす少女にレイは笛を握らせ、森を指差す。「行つて。」と短く言う。少女は何度も頷き、今度こそ森へと駆け出した。

少女を見送り、レイは落ちた短剣を拾いつつジャンヌへと近づく。ジャンヌは身じろぎひとつしないが、確認するまで安心はできなかった。顔を覗き込むとまだ息も意識もあった。が、その目はレイを写していなかった。

ジャンヌはかつての記憶を幻視していた。トウーレルの要塞。降り注ぐ矢の雨と数多の石飛礫。初めて死を意識した日。自分がまだ無力な子羊でしかなかった日の事を。

絶叫と共にジャンヌの体が激しく反り返り、レイは思わず動きを止めた。

「殺す、殺す殺す殺す！殺してやる！アングル……！アングル兵！」

すかさず跳ね起き、レイを押し倒す。そのまま後ろに倒れ、衝撃に肺が圧迫されて怯んだ隙に馬乗りになると両手で彼女の首を捕らえた。

「この、アングルの雌豚があ！」

「ち、が……にほ……じ……！」

レイの反論は掠れて言葉にならなかった。倒れた弾みで短剣を落とし、すぐに弩に切り替えようとする。が、鬼気迫る表情に間近に迫ったかと思つた瞬間、頭突きを食らわされ、竦んだ隙に遠くへ蹴り飛ばされてしまった。

徐々に力が増していく両手の隙間に指を入れようとするが叶わず、下半身を起こして逃れようとする。が、腹に体重を掛けられ脇を太ももで挟まれビクともしない。

「お前達だけは許さない、お前達は、お前は、お前はあ……！」

成す術も無く食い込んでいく指にレイの意識が朦朧とし出す。力の抜けた手が地面に落ちる。が、爪先に当たる固い感触がレイの意識を呼び起こした。気力を振り絞り、それを彼女の太ももに突き立てるとジャンヌは悲鳴を上げてレイの上から転がり落ちた。

「クソツクソツクソがあー！アングルの売女があー！」

「だから、日本人だって言ってるでしょうが！」

何度も咳き込みながらレイはそれだけ叫ぶとまた咳き込んだ。倒れた際の衝撃は未だ抜けきらず、酸欠で朦朧とした体は起き上がる事すら出来ない。

身を振ってうつ伏せになり、這って距離を取ろうとする。が、怒りに震えるジャンヌが太ももに刺さった矢を抜き取ってその背中を踏みつけた。再び地面に突っ伏したレイの脇腹を蹴り上げ、再度仰向けにすると胸倉を掴んで持ち上げる。残る手で長剣を抜き払うと炎を纏った刀身が現れ、二人を囲むように炎の壁が上がった。

「お前だけは許さない。罨り殺しだ、じわじわと焼いて焼いて焼き尽くして！灰になるまで焼いて川にばらまいてやる！見る！アングルの魔女だ！魔女が魔女を炎で清めてやる！あはははははは！」

「ほうははへぬ。」

「もお！無茶苦茶だあ!!？」というオルミーヌの叫びと同時に炎を割って現れた豊久の左足がジャンヌの胴体を捉える。その勢いはぶつかっても尚衰えず、横っ腹を抉った姿勢のままレイの脇を通り過ぎ、二人揃って井戸へと落ちていった。

ジャンヌの手から逃れたレイは再び地面に体を打ち付け、またしばらく咳き込んだ。ようやく落ち着いたレイが顔を上げ、豊久が来た方を見ると地面に垂直に立つ石壁と、そこから垂直に生えた石壁を見つけて乾いた笑いを漏れた。

「たしかに、無茶苦茶だ。」

第8話

8.

起き上がる事も意識を飛ばす事も出来ず、地面に転がっていたレイを起こしたのは豊久であった。いつの間にか井戸から這い上がってきた彼は、レイを起こして具合を確かめると肩に担ごうとレイの股下に手を伸ばした。

「大丈夫、です。自分で歩けます、から。」

無論嘘である。歩くどころか息をするだけで辛く、体のあちこちが悲鳴を上げていた。が、傷一つ無く立つ豊久を見て、安堵し頼もしく思う反面、無性に悔しくなった。

そうは言ったものの、今のレイでは足に上手く力が入らず、何度か試して結局「やっぱり、手、貸してください。」と小さく付け加えた。

レイの言葉に豊久は無言で頷き手を差し伸べた。

その手は思いの外、大きく暖かかった。握っただけでわかる。力強さと圧倒的な力の差に安心と若干の嫉妬を覚えつつ、立ち上がる。一瞬ふらついたがたたらを踏んで耐えると豊久は「よか。」と満面の笑みを浮かべた。震えながらも歩き出すレイにまたも豊久は「よか。」と言って今度はその背中を軽く叩いた。

すると、まだ衝撃が抜けきっていないレイの体はそれだけで再び咳き込みだした。その激しさに目を丸くするも悪びれる様子の無い豊久を涙目で睨みつけながら、レイはふとジャンヌの首が無い事に気付いた。

「あの人、は。」

「おん？なんぞ訳ん分からん事ばかり言いよるから、頭ど突いて黙らしたわ。」

「首、取らないんですか？」

「俺は女首は取らぬ。」

臆面も無く言い切る豊久に、レイは目を丸くし井戸へ振り返る。

「まさか、まだあそこに？」

「おう。」

こめかみが疼くのは怪我のせいだけでは無い、とレイは確信していた。

「……とりあえず、縄でも探しましょうか。城になら多分まだありますし。」

「なして。女首は手柄にならぬぞ。」

内心、手柄首を取れず焦っていた彼は一刻も早くもう一人の男の元へ戻りたいと若干苛立ちながら尋ねた。

「いや、このままじゃどっちみちあの人死んじゃいますよ。そしたらあの井戸使えなくなっちゃいますよ。」

「む。」

「いいんですか？しばらく汗物も粥も無し。肉も魚も処理できないから乾きものだけ。水浴びだって出来ませんよ。」

「そいは困る。」

「というわけで、さっさと引き上げましょう。ついでに暴れられたら困るんで縛っておきましょう。」

手柄を焦るあまり、周りを見失っていた事を指摘されて豊久は言葉に詰まると、すぐごと縄を探しに城へと向かった。その間にレイも近くに焼け残った荷車を井戸の近くに移動させる。

戻ってきた豊久から縄を受け取ると、近くの焼け残った柵に引っ掛けて井戸へと垂らした。

近くに水桶が無い事に気づいて、レイが尋ねる。

「そういえば、どうやって登ってきたんですか？」

「そいはこう。」

言うや否や豊久は再び井戸の中に入った。

手足を突っ張らせてすると降り、縄をジャンヌに括り付けるとまた同じように素早く這い上がる。レイが思わず拍手すると豊久は少しだけ得意げに笑った。引き上げたジャンヌから武器を奪い、手足も縛る。

荷車に乗せるつもりで用意していたが、豊久が易々と背に担いだため、何も言わずまた拍手した。

「何故！何故殺さないのです！相手はあの廃棄物なのです。殺さなければ!!?」

「女首は手柄では無か。恥じゃ。」

「そんな場合じゃない!!?女だろうと廃棄物は絶対に殺さねばならない!!?」

「主らの法度など知らぬ。俺は女首は取らぬ。これが俺の法度じゃ。」
二人が信長達に合流するとそちらも丁度終わった所だった。近づくに連れて見覚えの無い顔が加わっている事に気づき、足が止まりかけたが信長達の様子や先程の感覚が無いことから廃棄物ではないとわかってそのまま足を進めた。

一同は豊久の肩に担がれたジャンヌに慄いたが気絶していると分かるかと安堵した。すると新たに加わった男の内、最も若い少年が進み出て、すぐに彼女を殺すよう迫った。少年は与一と並んでも引けを取らない、妖艶な美男子であった。その麗しい顔立ちとは不釣り合いな物騒な内容にレイが呆気にとられている内に、豊久はまたも頑として拒んだ。すると少年は逆上し、冒頭の口論へと発展した。

その勢いに気圧されて距離を取ったレイは改めて少年を見た。顔立ちは日本人のそれだったが浮世離れとも違う、隔世の感じがあった。服装はオルミーヌによく似ていて、レイは彼女の同僚かと思当をつけ尋ねた。

「オルミーヌさん、あの人知り合いですか？」

「へ？ああ、私の師匠ですよ。前に少しだけですが話したでしょう。」

「安倍清明、だよ。セーメーだよセーメー。」

信長が先を言うと言いは「えっ」と大声を上げた。

以前オルミーヌに十月機関について尋ねたが、その時は他の導師について話すのは職務規定に触れると断られた為、安倍清明の名を聞くのは今回が初めてだった。

思いもよらない人物が出てきて、本気で驚いたその声に豊久達も言い合いをやめ、レイ達を見やる。

と、レイの驚きと羨望の眼差しに気づいた清明はうって変わって、

穏やかな物腰で話しかけた。

「後の世ではだいたい誇張されているようですが、私はそれほど大したものではありませんよ。」

凜とした品のある声はそれだけで陰陽師を自称するに相應しい説得力があつた。

素直に感激するレイに、晴明は内心悦に浸りつつ悟られぬようたおやかに微笑んでみせる。

「ほ、本当にあの安倍晴明なんだ……！」

「なんぞ、主ら知り合いか？おんみよう寺？寺の坊主が何故頭ば剃らぬ。」

「……もしかしてお豊さん、陰陽師知らないんですか？聞いたことありません？九尾の狐とか蘆屋道満とかドーマンセーマンとか。」

「知らぬ。」

「……本当に？」と訝しむ信長に豊久は「皆目知らぬ。」と切り捨てる。

「私の時代では映画や小説……芝居や草子の主人公になるくらい有名な人気なんですけど、信さんの頃は違つたんですか？」

「や、こつちも似たようなもんだ。単にアイツが残念な子なだけ。」

あんたもこつちに飛ばされたのか。あの妙な通路のあの妙な男に会つて。」

「ええ。ある日いきなり。」

信長の問いに晴明の目つきが変わる。

その目にレイはオルミーマを尋問した時の事を思い出した。

「そしてあの男が扉を開け、私はこの世界への漂流物となつた。」

そして私は私の役割を悟つた。私は京で星を眺め、式神と戯れるためではなく、廃棄物をたおすためにあるのだ、と。」

その言葉は不思議なほどすんなりとレイの胸に収まつた。

この遙か古の日本人が何故、縁もゆかりもない異世界を守るために戦っているのか。

何故そう決意するに至つたのか。その意志はどこから来るのか、レイには知る由もない。

しかし彼の意志だけは紛れも無いものだとしてレイは確信した。

「で、こいつやさつききの男がその廃棄物か。難儀したぞ。」

豊久がずり落ちそうになったジャンヌを揺すって抱え直すと、晴明はまた眦をつり上げた。

「あなたが手を下さないというのであれば、私が始末します。さあ、こちらへお渡しください。」

「だとよ。どうする。」

豊久がレイに尋ねると、晴明は怪訝な視線をレイに向けた。

「どういう事ですか。」

「仕留めたんは俺だが、捕えるよう言うたのはこいつじゃ。」

豊久の言葉に晴明は非難がましい目で問いただした。

「いやあの、殺す事に異存はないんですけど、出来れば彼女と話してからがいいかなと。」

「話？彼女は廃棄物ですよ、話し合いが通じる相手では……！」

「いやいや、そうじゃなくて。敵の数とか正体とか、本拠地の場所とか色々聞き出せないかな、と。ほら、向こうは軍勢を率いてるって言いますし、相当数がいるんでしょう？正面から行っても勝てないだろうし、何もわからない相手に挑むより、何かしら情報得れば対策も打てるかなと思っただけですけど……。」

激する晴明の剣幕に押されて徐々に尻窄みになっていく。見兼ねた信長が「つまり尋問にかけたってことか。」と助け舟を出すと、晴明ははたと我に帰り、声を抑える。

「それで口を割るかどうか……。」

「ダメだったらその時はその時で。それに死体からも情報は得られませんし。」

レイの言葉に、オルミーヌはつい先日行われた尋問を思い出し息を呑む。しかし「そいつあ無理かもな。」と信長が水を差し、レイはどう言うことかと振り返った。

「さつきの大男な、殺した途端あなっちまった。」

信長が指す方向には白い粒子の塊が山となって積もっていた。

「あれは？」

「塩です。廃棄物は死ぬと同質量の塩になるのです。」と晴明。

レイは塩の山に近づくと一掴み手に取り、匂いを嗅いでから口に運んだ。

一同は唾然とした。既に原型が無くなり、ただの塩の塊でしか無いとはいえ元は人だったものを何の躊躇いもなく口に作る様に目を疑い、言葉を失った。

晴明はその美貌を崩し、顎が外れそうな勢いである。

すぐさま吐き出し、「たしかに、塩ですね。」と全く気に解さず呟くレイに信長の拳が落ちた。

「アホかおどれは！何当然のように口にしてるんだ！犬か！畜生か！」

「いや、本当に塩かなど。どうやって倒したんですか？」

「……与一とエルフどもでとにかく撃ちまくって、いくら撃たれても止まらなかった。最後にこいつらがアレで撃つてようやくだ。おつかねえ」

途端、信長の顔つきが変わり声も神妙なものになる。

信長が顎で示した先には、新顔の内の二人。西部劇映画から出てきたような出で立ちの男がいた。その背後には回転式機関銃の乗った荷馬車があり、目を丸くするレイと視線が合うと二人とも陽気に手を振り、ついレイもそれに応えた。レイの瞳に意識が逸れているの察した信長は話が脱線しないよう、レイの頭を押さえつけて塩に戻す。

「それでもしばらく動いてましたけどね。上半身だけで。」

晴明の言葉に信長は苦々しい表情で頷く。

その言葉にレイはジャンヌの様子を思い出し、顎に手を当てて黙考した。

「(どうして塩に？元からそうだったのか、それとも死んだからなのか。廃棄物は人じゃ無い。人では無いから、撃たれようが半身になろうが平気……？でもあの時、この人はしばらく動かなかった。それに血も出ていたし、個体差？それとも……そういえばあの時……)」

あの、この人達について何か知りませんか？名前とか、何でもわかる事があれば」

唐突に話の方向が変わり、皆虚をつかれた思いであった。

真意が分からず誰もが閉口する中、レイの言動に慣れつつあった信長が真っ先に答える。

「知らん。最後に何か言っていたが、聞き取れなんだ。お前らは？」
信長がエルフに尋ねるとエルフ達も同様に首を横に振った。

全員この世のものとは思えぬ光景に意識を奪われ、男の言葉は素通りしてしまっただの。

「私も存じませぬ。」と晴明が続き、オルミーヌも頷く。

落胆しかけたレイを掬い上げたのは、意外にも豊久であった。

「この女の名は知らんがふらんす？がどうか言っておつたぞ。きりすと？のためだとかなんとか。その男はたしか、じるどれ？とか呼ばれとつた。」

ジルドレ、フランス、キリスト、アングロ兵、女戦士、魔女。

レイの記憶にこれらに当て嵌まる人物が一人浮かび上がる。

(ラ・ピュセル……iジャンヌ・ダルク?)

その表情に心当たりがある事に誰もが気付いていた。

一同の視線が集中し、レイはその時初めて全員がレイの言葉を期待していると気づいた。

しかし判断材料が少なすぎる上での憶測に過ぎず、レイ自身思考をまとめきれていない。

早計であるとレイが言いあぐねていると、西部劇の男のうち小柄で童顔な方が割って入った。

「なあなあ、どうせならもつと落ち着ける場所で話さねえ？あとなんか食わせてくれよ。」

エルフ達が安否確認や怪我人の手当てに勤しむ中、ブッチの提案で廃城の広間に移した一同は改めて状況を整理するため、互いの情報を交換しあっていた。

廃城に新たに訪れたのは十月機関の長でオルミーヌの師匠、安倍晴明。西部劇風の二人組はワイルドバンチ強盗団を自称し、小柄且つ童顔で悪餓鬼がそのまま大きくなったような方がブッチ・キャシディ。清潔感のある口髭が特徴的な古風な紳士がサンダンス・キッドと名

乗った。荷馬車にはもう一人機関銃の陰に老人がいたが、彼は老齡による呆で会話が成り立たない状態だった。清明曰く、ハンニバル・バルカ氏である。他にもこの場にはいないが漂流者は二人確認されており、一人はスキピオ・アフリカヌス氏と正体不明の飛行機乗りがいるという事であった。三人の正体と残り二人の話にレイはまたも高揚し、早速目的を忘れかけたが清明が廃棄物についての持ち得ている情報を話し始めたためぐっと堪えた。

今回の二人の他に廃棄物は四人おり、一人は洋装だが日本刀を扱う男で一人はジャンヌのように氷を操る女。一人は姿形はまだ不明だが清明同様魔術に秀でた者、最後に廃棄物を統べ化け物達を率いる存在、黒王である。

彼は常に頭から足首までボロで覆われているためもう一人同様、未だ姿も性別も分からずその能力も不明だという。

彼らは既にオルテの北に位置するカルネアデス国、その最北に位置する国境要塞カルネアデスの北壁を落としており、清明達はそこから命からがら脱出してきたという事。

北壁は過去何度も化け物達の襲撃を退けてきた堅牢な要塞であったが、それ故に敵を侮り清明の警告に耳を貸さず、今度の攻撃にはあっさりと屈してしまった事を伝えた。

「今度こそ本当にこの世界が、滅んでしまうかもしれません。」

と、締めくくる清明の言葉は重く、それが本心からのものである事は明白であった。

弟子であるオルミーヌは当然、清明と行動を共にしていたブツチとサンダンス。今しがた脅威の一端を目にしたエルフの面々も表情を曇らせ固く口を閉ざした。

人の形をした人ならざる者。人の道理を超えた未知の力への恐怖。

本能に基づいた、人が生き物である限り逃れられぬ性質。

これはいくら修羅場を潜り抜けてきた彼らとて、克服できる物ではない。

重苦しい沈黙の中、信長は（これはいかん。）と確信した。

邪智暴虐と恐れられ、人を利益と恐怖とで動かし続けてきた彼は、

誰よりも恐れに敏感であった。

唯一豊久だけは臆した様子はないが彼は例外である。彼の中には首を取ることにしか無い。

生来の性格故か薩摩という環境がそうさせたのか定かでは無いが、彼は廃棄物を微塵も恐れていない。

しかし他の者達は違う。改めて対峙した敵が人の道理を外れた化け物だと認識し、恐れが顕在し、伝染しつつある。

国を統治し、幾度となく勝利と敗北を味わってきた信長は恐れが齎すものを身に沁みて理解していた。

恐怖は思考を鈍らせ、盲にさせる。一度恐怖に取られた足が、再び動き出すのは難しい。しかしその一方で信長はそれを動かす術もまたよく知っていた。

早速行動に移そうとしかけて、それよりも先にレイが「あの。」と声を上げたため膝を立てた姿勢で静止した。

再び一斉に視線が集まり、レイはその勢いに一瞬気圧される。だが深呼吸し、低い位置で拳手するち清明が発言を促した。

「二ついいですか？」

「何でしょう。」

「廃棄物について、いくつか思ったことがあります。

今のお話とさっきの二人を見て気になった点とか、私の見解とか憶測や希望的観測を交えて話すんで取り止めのない話になるかもしれないし、見間違いかもしれないんですけど……。」

清明は黙考した。

彼はレイについてまだ何も知らなかった。

信長のような切れ者にも、与一や豊久のような武勇に秀でているようにも見えない。しかし彼女もまた漂流者には違いない。

彼女について知るには、彼女自身の口から聞くのが手っ取り早いと判断した。

「わかりました。どうぞ。」

「それじゃ……ええと多分あの人達。人じゃ無いけど、人なんだと思うんです。」

晴明は厳しい目つきでレイを見つめ、豊久は「なるほど、わからん。」と首を傾げる。

他の者も口には出さないが同じ気持ちであった。

レイは構わず続ける。

「私がジャンヌを、あ、あの女の廃棄物の事です。あの人を撃った時、急に様子が変わって私を彼女の敵国の人間と勘違いして、襲ってきたんです。恐らく彼女の辛い記憶を呼び覚ましてしまったんじゃないかと。その後も攻撃したらやっぱり動いてはいたんですけど、痛がっていたし血も流れたんです。」

彼らは人じゃ無いから、人にできないことができる。矢が刺さろうが、体が半分になろうが動ける。でも多分体そのものは人のままで傷つけば血も流れる、恐らく痛みもある。人としての記憶も感情もあるから、怒るし喜ぶ。能力は人外でも、体や思考は生きてる人間とそう変わらないと思うんです。」

「違う！彼らは最早人間では」

「なら殺せるって事です。人間と同じように。」

激昂する晴明の言葉を遮ってレイは続ける。

「たしかに彼らは人ならざる力を持っています。でも手足を無くせば動けないし、頭を強く打てば昏倒する。半分になっても動いたと言いましたが、半分にまですれば死ぬんです。それにたとえ殺せなくても、無力化はできるわけです。喜びも恐怖も痛みも感じるから、場合によっては脅しや懐柔も可能かな、と思ったんですけど……すみません。自分でも言っていてわけわからなくなってきました。」

晴明は答えなかった。

レイの言葉は間違っていない。

しかし人ならざる力を目にした直後、彼らを生き物だと、人と同じだと言い切る彼女の思考回路が理解できなかった。

「言うじゃねえか、姉ちゃん。」

「たしかに、そうだな。殺せば死ぬ。人間と同じだ。」

強盗団の男達がカラカラと笑う。

二人は今しがた抱いていた人ならざるものへの恐怖が薄れていく

のを感じていた。

どんなに恐ろしいな相手であろうが、生き物である限り死から逃れられない。

かつて非道の限りを尽くし、幾度も修羅場を乗り越えてきた二人にとつて当然の事であった。

しかしこの異様な状況下と、陰陽師である晴明の言葉によつてその事実を忘れてしまつていたので。

二人の笑い声に張り詰めていた空気が弛緩する。一同の表情はまだ戸惑いを多く含んでいたが、恐れは薄れつつあった。

「つまり死ぬまで殺せちゆうことか。当たり前前の事ではないか。」

と豊久が端的に言い現す。二人は大爆笑である。

「あ、あなたは彼らと交渉するつもりですか？話が通じる相手だとも？」

「うんにゃ、そっちは全く期待してませんよ。あつちの目的は人類の根絶ですし、交渉の余地なんて無いと思います。」

けど本当に話を通じないなら、わざわざ徒党を組んだりしませんよ。やるだけやってみませんか？出来なかつたら、出来ないという事実の確認が出来ますし。」

「丁度良い相手もいますし。」とレイは部屋の片隅に拘束されたジャンヌを指差す。

彼女の処遇に関しては未だ保留のため、身ぐるみを剥がし拘束した上で晴明の術で束縛を施し、目の届く所に置かれていた。

「それに向こうは化け物を従えられるんでしょう？彼らに出来て私達に出来ないつていうのは、悔しいじゃないですか。」

そう笑うレイの目に晴明は見覚えがあった。

恐れを知つて尚、足を止めることのできない者。

未知という暗がりには、可能性という闇に手を伸ばさずにいられない者。

それはまさしく人間そのものであった。

感が広がりにつつあった。

狙いすましたかのようなジャンヌの死。

それも恐らく黒王と思われる者の不可視の術によって齎されたそれに、晴明ですら慄き、理解が及ばない様子であった。

姿も見せず、直接手を下さずとも相手を悍ましい形に変える術に皆、次は己の番かと怯えている。

そんなものとう戦えばいいんだ、と。

誰も口にしなかったが皆そう思っているのは明らかだった。

張り詰め、膨らみ続ける緊張感に耐えきれず、誰かが悲鳴を上げかけたその時。

穏やかな老父の声がそれを鎮めた。

「何故その女が死なねばならぬ。そいつは黒王の一味ではなかったのか。」

それまでまともな会話すら成り立たなかったハンニバルの朗々とした声に、誰もが傾注した。

「それは、恐らく、情報が漏れるのを恐れて……」

晴明が喘ぎ喘ぎ応じるがハンニバルは「解せぬ。」と遮って続ける。

「ならば我々を始末すれば済む話だ。わざわざ仲間を手に掛ける必要は無い。」

言われて信長は冷静さを取り戻す。ハンニバルの言う通りである。

黒王は直接手を下さず、人知れず他者を呪い殺せる。それはたしかだ。

現にジャンヌはそれによって始末された。

ならば何故漂流者や人類にそうしない。

何故わざわざ他の廃棄物や化け物を率いて人類を殺そうとする。

そこから導き出される答えはただ一つ。

「黒王は俺達を殺せない。」

信長の結論に豊久が「何故よ。」と問うた。

「わからん。」

「かーっ！それでも第六天魔王か！お主！」

「う、うっさいうっさい！俺は人を殺すのは得意だけど、呪いの類は

「さっぱりなんだよ！」

「恐らく、制約があるのでしよう。我々の知るそれと同じかはわかりませんが、基本魔術は無条件というわけではありません。」

「そうですね。現に私達は何ともありませんし……本人の髪や爪、あるいは前もって直接接触するとか、何か条件があるのかも……。」

晴明の分析にレイが具体的な例を上げて同調すると、豊久はやや驚いてレイを見た。

「なんで、主も呪い師の類だったか？」

「はい？」

予想外の言葉にレイは耳を疑った。

レイが挙げたのは二つの世界でよく知られる呪術の条件である。

豊久がこの手の冗談を言う人物ではないという事は周知の事実であり、殆どが彼に呆れていたが出会って日の浅いブッチやサンダンスは真に受け、まさかとレイを見た。

その視線に気づきつつレイは彼が陰陽師すら知らなかった事を思い出し、慌てて否定した。

「ち、違いますよ。こんなの有名じゃないですか！」

「ほうか？」

「そうですね！ほら、呪い殺したい相手の持ち物を肉と一緒に飢えた犬の前に置いて、犬の首を斬り飛ばす。とか人形に相手の髪を入れて痛めつける、とか有名じゃないですか！」

「知らぬ。というかお主らそがいな事しとるのか。」

豊久が晴明とオルミーヌを得体の知れない物を見る目で見、晴明の隣に座っていたオルミーヌと強盗団の二人はすつと距離を空けて信じられないと言いたげな目で彼を見上げた。

オルミーヌにとつて晴明は厳しくも気高い、誰よりも信頼し尊敬する師である。

師匠が残虐な男では無いことはこの場にいる誰よりも知っていると自負している。

しかしレイは彼と同じ漂流者であり同じ国の出身、その上彼にとつて未来の人間である。

自分の知らない師匠の一面を知っているのかも、と思ってしまうのも無理は無い。

ブッチは「顔の割にえげつねえな、あんた。」と口調こそ軽いものの顔が引きつっており、サンダンスは無言で清明を見つめた。

「そんな、大師匠様、そんな事を、まさか……。」

「しませんよ!?!?」というかオルミーヌ、あなた私の弟子でしょう。私より彼女の言葉を信じるのですか!」

「で、ですよ。わかってます、ええ。当然ですよ。」

言葉では納得しているが、物理的にも心理的にも距離を置かれたのは明らかで清明はがつくりと肩を落とした。

「それで、なんの話でしたっけ。」と与一が軌道修正をはかる。

「とにかくだ。廃棄物は殺せる、黒王はよくわからん呪いが使えるがこいつは今の所俺たちにかけられる事は無いだろう。以上!一度休んで日が昇ったら作業開始だ!解散!」

信長の宣言に、エルフ達もまだ納得しきれてはいないが疲れもあって、その場は一度お開きとなった。

エルフ達が引くのを見計らい清明達も荷馬車に戻って休もうと立ち上がりかけてレイに引き留められた。

軽食と寝床で良ければ用意すると言われ、清明は遠慮したがブッチとサンダンスが食いついたため、結局荷馬車の移動だけ済ませて厚意に甘えることにした。

既に空が白み始めていたが一度休息を取り、日が昇るとエルフ達は作業を開始した。

焼け残った物資の確認や不足分の調達、死傷者の治療と埋葬、雨風を凌ぐための一時的な避難所の確保など問題は山積みである。

元々野営地のようなものだったとはいえ、人数が増えた分規模も増え、それだけに骨も折れる。

二度も住処を奪われ、今後また廃棄物の襲撃があるかもしれぬというのにエルフ達は泣き言も不平も漏らさず働いた。

廃棄物への恐れは今だにある。人であって人ならざる者。自分達

の理や概念を遥かに超えた存在。

それらの恐怖を完全に克服することは叶わない。

しかしそれらを返り討ちにしたという事実が自信となって彼らを奮い立たせた。

そして何よりも、ジャンヌの無惨な最期である。

彼女の死は立ち直りかけていたエルフ達の心を再び挫きかねないものであった。

しかしそれは時間の経過と共に義憤へと変わっていった。

元々仲間意識の強い彼らは隷奴に落とされて以来更に敏感になっており、敵とは言えあつさりと言つてジャンヌを見捨てた黒王へ激しい怒りを抱いたのだ。

ジャンヌに関して、一切同情はしていない。

レイから彼女の生前について聞かされても、自分達には無関係だと割り切っていた。

祖国でも異世界でも利用され見捨てられた哀れな女。結局彼女は異世界でも同じ末路を辿つたのだ。とその程度の認識である。

彼女の死は黒王、引いては廃棄物達への憎悪となって燃え盛り、彼らの決意と結束を頑ななものにさせる糧となった。

もはや彼らを止める者はいない。

恐れは未だある。されどそれを制御する術をエルフ達は知っている。

何よりも、彼らには漂流者という廃棄物よりも恐ろしくも頼もしい味方がいるのだから。

「信長さん。その、ありがとうございます！それとすみませんでした！」

「はっ。」

集落の復興をエルフ達に任せ、ブッチ達の持ち込んだ武器に関心を注いでいた信長は現れるなり、唐突に腰を折つたレイに目を丸くした。

ブッチもサンダンスも何事かと荷馬車の上から覗き込み、近くに

た清明も何事かと思やるがその表情は髪で隠れて伺えない。

レイは現れた時と同じ勢いで顔を上げると、服の裾を握りしめながら辿々しく話し始めた。

「ジャンヌのこと、本当は私がやるべきだったのに。なのに、あんなに偉そうなこと言っておいて私……」

「ああ」と合点がいき、信長はぞつとするような笑みを浮かべる。

「そう気兼ねするでない。俺の手はどうに真つ黒じゃからのう。それに、いい気分だわい。刀を握ったのは久しぶりじゃったからのう、ハハ」

第六天魔王として名を轟かせて、悪名高い織田信長であったが一方で身内には甘い事でも有名である。

その一端を幾度か身近で見してきたレイは、彼の振る舞いが演技であるとすぐに見抜いた。

ありがたいと思うと同時に己の不甲斐なさが情けなかった。

俯きかけたレイに信長は「ところで。」と葉莢を見せる。

「お前、こいつ知ってるか。やつきよう？つて奴なんだけだよ。こいつがあれば、戦そのものが変わるぞ！けど、こいつら作り方知らねえんだって。」

「葉莢ですか？名前と仕組みは知ってますけど、作り方までは……。」

「そつかくいいよな〜これ、ほしい、ほしい！絶対ほしい〜！」

おもちゃ売り場の子供のような、今にも頬擦りしかねん勢いで葉莢を握りしめる信長にレイは重ね重ね深く感謝すると同時に少しだけ気恥ずかしく思い、困ったようにブッチ達を見た。

ブッチ達も冷酷無比かと思われた男が、子供のように銃に目を輝かせ女に甘さを見せる様に戸惑い、同時におかしくてたまらなかった。

ブッチは耐えきれず吹き出し、サンダンスも口髭の下で笑みを零す。

「難しいですよ。私やキッド達のその銃や、葉莢、ガトリング等を調べました。だがどうやって作られた物なのか……。様々な鍛冶場に見せました。この世界の冶金術では作れません。何しろ我々の時代よりも遙か未来の物なのですから。」

そもそも爆発する『かやく』という物が判らない。キッドらは銃の名手ですが、自分らの使っているそれがどうやって作るのかは知らないのです。」

オルミーヌから報告を受け取り、信長を危険視していた晴明は牽制の意も込めて告げたが、信長は「火薬なら、今、作ってつぞ。」と事も無げに答えた。

その得意げな表情に、晴明は「やはりあなた方はおかしい。」と警戒心を露わにする。

「あとは雷管だな。」

「らい…かん…?」

「この弾のケツについてるコレ。叩くと破裂する。」

サンダンスの言葉に信長は首を捻り、ブツチが補足し、晴明が続く。「これは恐らく火薬では無く、何らかの物質か薬品です。我々も調べてはいるのですが……。」

「お前、学者っぽいんだからわからんのか。なんとかしろよ。」

「私は専門は陰陽師、符呪師です。これは薬学者や錬金術の分野です。」

みるみる気概を失い萎れていく信長を見ていられなくなってレイは口を挟んだ。

「あのでも、作れるかもしれませんよ。」

「は?でもお前作り方知らないって……。」

「いえあの、私じゃなくて。他の漂流者の方が。」

「どういう事だと清明を筆頭に全員の視線が集中する。」

「えつと、この世界には過去にも何度か漂流者の方が来ているんですよ?」

それで私も少しだけ調べてみたんですが、漂流者本人かあるいは彼らと接触したと思われる人が何人か見つかりまして……。

その中に銃の開発を試みた方がいるんじゃないかな……と。」

特にアドルフ・ヒトラーに関しては、レイは彼が信長同様兵器を作ろうとしていただろうと確信していた。

彼は二度の大戦を経験し、恐らくこの世界で誰よりも化学兵器の威

力を理解している男だ。

彼自身に知識や技術が無くとも、この世界の科学者や技術者を集めて火器やそれに代わる兵器の研究や開発を進めていた可能性は十分あり得る。

何しろ彼にはそうする権力も経験もあつたのだ。

晴明は機関が認知していない漂流者の存在を疑い、半信半疑でレイに聞いたのだ。

「ですが、それでしたら既に広まっているはずでは……それに、そのような方は我々の調査では」

「晴明さんが言った通り、技術の差がありすぎて再現しきれなかったとか。あるいは材料や技術、理解や協力が得られなくて断念したとか。

それに……私がこの世界の人間だったら絶対に漂流者の、それも兵器に関する情報なんて絶対に他人に渡しませんよ。こう言ったら失礼ですけど、十月機関つてあまりよく思われてないんじゃないですか？ぶっちゃけ嫌われてませんか？」

唐突に痛い所を突かれ、晴明は言い返せなかった。

「私だったら、漂流者を囲い込んで技術も知識も絞り尽くして死ぬまで隠し通しますし、奪われそうになったら最悪殺して研究も何もかも灰にします。」

いつの時代も情報は金である。

またも言い返せず、晴明の美貌が崩れる。

「おつかねえ。」とブツチが笑うがサンダンスは笑えなかった。

途中まではともかく、最後の言葉に関しては決して他人事ではない。

「ですから、あの、可能性はゼロでは無いと思うんですが……」

言いながらレイは不安げに信長の表情を伺った。

所詮、確証の無い憶測に憶測を重ねたこじつけ。たればの希望的観測。屁理屈に過ぎない事は理解していた。

理解していたが、この不器用な男が落ち込むのを見過ごせなかった。

共に過ごした時間は僅かだ。だが、右も左も言葉もわからない世界でどれほど彼の存在が大きかったことか。

エルフの子供達はレイに生きる術を与えてくれたが、彼は安らぎを思い出させてくれた。

言葉が通じる。話が出る。たとえ時代が離れていようとも、同じ故郷を持つ者がいるという心強さ。

それは与一や豊久に対しても同様であった。

だからこそ、レイは彼らの国盗りに加勢した。

奪う事も戦う事も厭わなかった。

しかし結局役目を果たせなかった上、彼の手を煩わせてしまった。

それなのに彼はレイを責めるどころか励まし、自ら道化を演じて見せた。

ならば今度は自分の番だと、たとえ彼のように出来なくとも下手な慰めでしかなくても言わずにいられたかった。

信長もまたレイの気遣いを理解していた。

しかも自分の気遣いが見抜かれ、逆に相手に気を遣わせてしまったと認め、信長は努めて明るく振る舞った。

「よし、レイ。ガドルカ鉱山と周辺の地図用意せい！」

「へっ？」

「ドワーフだよ、ドワーフ！まずアイツらを解放せにや、やつきようも鉄砲も作れんわい！あ、ついでにその漂流者の資料も持てるだけ持つてこい！」

「っはい！」

途端レイが脱兎の如く駆け出す。

切り替えの早さに呆れていた信長はふと視線に気づき、振り返ると強盗団の二人が微笑ましげに見ていた。

「顔はおつかねえけどいいやつだな、アンタ。」

「う、うるさいわい！」

おまけ

「ヒトラーが国父になってるくらいですし、他にももしかしたら、と。

王侯貴族にはなれなくとも、彼らの庇護を受けてる人がいるかと思
いまして。何名かはもうお亡くなりみたいですけど、サンジェルミ伯
爵はまだご存命みたいですよ。その人は多分漂流者です。」

漂流者と思しき人物の資料を広げながらレイが発見した経緯を説
明していると、信長が尋ねた。

「さんじえるみつてのは何者だ？お前の知ってるやつか？」

「いえ、こつちに来て初めて知りました。なのでここに書かれています
こと以外は……。」

「ならば何故彼が漂流者だと？こちらの世界の方かもしれぬのでは
？」

与一が当然の疑問を投げかけるとレイは付箋の貼られたページを
開き、エルフの兄弟に見せた。

「ええつと……ああ、あった。これこれ。シャラクくん、マーシヤ、マル
ク。この人、ぱつと見でどう思います？」

そう言つてレイが指す先にはには舞台めいた派手な衣装と化粧に
身を包んだ、男とも女ともつかないサンジェルミ伯爵本人の絵姿がで
かでかと描かれていた。

「変態だ！」

「変態だ！」

「変態ですね。」

「というわけです。」

「オイコラ。」

ドワーフ解放 第10話

廃棄物の襲撃から、めまぐるしく日々が過ぎていった。

死傷者の治療と埋葬、物資の確保、家屋の建築、再度の襲撃に備えて警備の見直しなど問題は山積みである。

元々財産と呼べるものも殆どなく野営地のような様相だった事や、また信長の采配もあって以前のような形に戻るのにさほど時間はかからなかった。

それでも課題は多く、老若男女問わず暫くは死を悼む暇も無く森を駆けずり回った。

この時最も活躍したのは、ミルズであった。

物資の管理を一手に任されていた彼はすぐに焼け残った物資を確認すると、早急に不足分を割り出し、優先順位を付けてエルフ達に報告した。

これを機に彼の評価が改められエルフ達の態度が軟化したのが、忙しさにかまけた彼がそれに気づくのはもつと後の事だった。

「何考えてるんだろう、あの人達……」

ミルズは手を止め、今はいない漂流者達に思いを馳せる。

襲撃の傷跡も生々しい内に彼らは唐突に男達を率いてドワーフの居留地に出立していた。

最低限の指示は信長が残したものの、殆どはミルズと残されたエルフ達に任された。

信用されているとは決して思わない。依然としてミルズの立場は変わっておらず、寧ろ逃げ場の無い自分だからこそ任されたと理解している。

理解しているからこそ、それに甘んじている己が情けなかった。

「大変だ童貞人間！」

「どどどどど童貞ちやうわー！いや童貞だけでもー！」

「変な馬車が近づいてるー！」

子供の一人がミルズの部屋に慌てふためいて駆け込んできた。

子供は大人達ほどミルズに猜疑心や敵対心を抱いておらず、寧ろ好奇心が勝っていた。

ただ大人達の目もあって表立って接する事は少なく、今回のようにやって来たのは初めてであった。

急ぎ確認すると、子供の言った通り遠目にも悪趣味な六頭立ての馬車が集落に近づいていた。

車体にはオルテ国民であれば誰しもが知る大泊地伯の紋がはためており、ミルズは子供達、特に男の子に避難するよう告げると慌てて麓へと駆け出していった。

入り口で見張りに止められ、馬車から降りたサンジェルミは集落を見渡して、その場で卒倒した。

「どういう……事なの……っ！」

「おひいさま、落ち着いて！」

「どうかお気を確かに！さきっこれをお飲みになって。」

「サンジェルミ伯、何故あなた様が直々にこのような所に……。」

お付きの二人がサンジェルミを宥め、一人が馬車から気付け薬を持ってくる。

エルフ達が警戒し様子を伺う中、人間であるミルズが代表して挨拶に向かうと、サンジェルミはすつくと立ち上がり早足で距離を詰めた。

そのまま胸ぐらを掴まれ、ミルズは爪先立ちの形になる。

「あなたが漂流者？」

「ひっ、ち、違います。きゅ、旧エルフ居留地稅務計算官のつ、ミツ、ミルズと言います。い、今はエルフ達に捕らわれてこき使われています。」

震えながら、なんとかそれだけ答えるとサンジェルミは「そんなことより」と集落の一角を指差した。

「アレ、どういう事なの。」

「あれ、とは……っ？」

サンジェルミの指差す先では、顔や手など皮膚の露出した部分に迷

彩の顔料を塗った見張りが戸惑いつつ様子を伺っている。

「じゃああれは！」

次に指した先では、子供達が空のガトリングガンの取っ手を回しながら「逃げる奴はオルテ兵だ！逃げない奴はよく訓練されたオルテ兵だ！ホント戦争は地獄だぜフウハハハーハアー！」と遊んでいる。

「あれは！」

若いエルフ達が I wanna be your drill instructor の替え歌を歌いながら走っている。

「あれは！」

エルフが一人、小屋から現れるや否や弦楽器をかき鳴らし、傍らで待機していた青年と合奏を始める。

「なんでエルフがランボー化してるのよっ！なんでエルフがフルメタルジャケットごっこしてるのよ！なんでエルフがランニングケイデンス歌ってんのよ！なんでエルフが森メタルしてるのよ！私のエルフの優美なイメージ返しなさいよ！」

「そうよそうよ、どうしてくれるのよ！」

「エルフつつつたらもつとこうキラッキラキラッキラ、全裸の少年が精霊達とキャツキャツキャウフフフフフ。」

「おだまりっ！」

便乗するお付き二人を撥ね付け、サンジェルミはミルズを持ち上げ揺さぶる。

ミルズの体は完全に浮き上がり、その勢いで眼鏡がずり落ちる。

「漂流者ねっ！漂流者の作業なんでしょ！早く出しなさい！」

「そ、それがそのう……今、ここにいません。」

「いないってどういう事よ！隠し立てするって言うならあんた……！」

「すみませんびびばせん！ドッドワーフ解放すんだって、エルフの男連れて行っちゃいました！あ……あの、なんですか、じゅ、銃？銃だか機関銃だか作らすって！」

「なっ……」

驚愕したサンジェルミが手を離し、ミルズはその場に音を立てて落

ちた。

ぶつけた尻を撫でながら眼鏡を直し、サンジェルミの剣幕に押されて慌てて膝立ちの状態で両手を上げる。

「じゅ、銃、ドワーフに作らす、ですつてえ……！ かつかつ火薬は、火薬はどうすんのよお！」

「火薬、もうあります。モリモリ作ってます」

途端、サンジェルミは再びその場に倒れた。

従者二人が慌てて支え、地面に倒れることはなかった。

「おひいさまどうしたのおひいさまー！」

「あなたつ何ぼさつとしてるの！ おひいさまをお運びするの、手伝いなさい！」

「え、ええく……」

「もうっ！ いいわっ、ちよつと何見てるの！ 早く道を開きなさいっ！」

わけがわからず両手を上げたままのミルズを叱咤し、二人はサンジェルミを抱えるとずかずかと集落の奥へと突き進んでいった。

その勢いに見張りも呆氣にとられ、三人の姿が小さくなってようやく我に帰ると慌ててその後を追った。

時を遡る事、一週間前。

ドワーフ解放に向けて信長たちはガドルガ鉱山の攻略に頭を悩ませていた。

ガドルガ鉱山といえばドワーフ族の居留地であり、オルテの武具の製造のほとんどを担う大工場地帯である。

信長が以前シャラに火縄銃の製造を相談した際、ドワーフであれば作れるかもという返答を貰い、以来ドワーフ解放の機会を探っていたのだ。

はかったようにオルミーヌに依頼していた硫黄も届き、あとはドワーフを残すのみとなった。

既に硝石は精製まで済ませ、木炭の用意もある。信長は早速調査に着手し、無事試作品一号が完成。

音も威力も申し分無く、上々の仕上がりであった。

その時の信長の喜びようと言ったら、扇を手にも踊りださんばかりであった。

実験に立ち会ったエルフや晴明達の反応は大変信長を満足させるものでもあった。

彼は喜びのあまりオルミーヌに抱きつき、ついでに乳を揉んだ。即座に叩きのめされた。

腕を抱いて距離を取るオルミーヌをブツチが羨ましそうに見ていた。

豊久もまた久しぶりの火薬の匂いと爆音に高揚し、今すぐドワーフの解放に行くと言い出しかねない様子であった。

以降エルフは村の復興と合わせて火薬の調合を開始し、数を揃え次第ドワーフ居留地へと出立となった。

その時初めてドワーフの解放を聞かされたエルフ達からは当初反発が起こったが、シャラの説得に心を動かされ、果たして彼らもドワーフ救出に乗り出した。

晴明、ブツチ、サンダンスの三人も誘ったが三人は本部に戻らねばならぬと辞退し、饞別にと弾切れの拳銃と回転式機関銃を置いて行った。

ガドルカ大工廠はオルテ最大の兵器廠であり、当然守備は堅牢である。

四方は鉾山である山岳に囲まれ、その山肌へばりつくように砦が築かれている。

砦は二つの郭からなり、麓にはドワーフの区画と兵士の生活区画が、山の中腹には本丸が敷かれ、それぞれ岩山を切り出して作られた分厚く高い城壁に囲まれている。

砦の手前には壁こそ無いものの物資の受け渡しのための基地が設けられ、ドワーフ製の武器や逗留する兵士のための物資が常に行き交い、櫓が一定の間隔で建てられている。

軍議の最中。試験で何度も火薬の威力を目の当たりにしたオルミーヌも、その物々しく頑強な護りに齒が立つのかと懸念していると斥候から報告を受けた信長が告げた。

「城自体は硬いが、規模の割に兵士の数はさほど無い。恐らくほとんどが前線に送られているんだろう。問題は……」

「帝国党武装親衛兵団。」とシヤラが続く。

オルテでも屈指の勇猛さを誇る兵団である。

その名は国中に知れ渡っており、腕もさることながら最たる脅威は全員がドワーフ製の装備に身を包んでいる点だ。

シヤラが与一も豊久でも文字通り歯が立たぬやもしれぬと零すと、二人は不敵に笑った。

数は信長達と比べればずっと少ないが、それはそれだけ彼らを選りすぐりの存在だという証左でもある。

騎馬による突撃でも食らえば、弓兵と歩兵しかない信長達は決してただでは済まない。

「俺に案がある。」

と豊久が静かな声で言った。

残念な子と呼ばれて久しい豊久であったが、エルフの村での一戦や廃棄物の襲撃での戦いぶりに、戦に携わる才覚は誰もが認めていた。

豊久の案は、オルミーヌの得意とする石壁を用いての封じ込めであった。

砦は正面の門以外、出入りは不可能だ。

当然、彼らもそこから出入りする。

ならば彼らを城壁から誘い出し、出てきた所を石壁で囲み上から爆薬を投げ入れる。というのが豊久の作戦であった。

当人であるオルミーヌは自分の術を、身を守るためだけの物だと思いついていた術を敵を殺すために使うという豊久に衝撃を受け、言葉を失っていた。

抵抗はあった。しかし彼は既に廃棄物をそれで仕留めており、反論する言葉を思いつかない彼女はただ俯くしかなかった。

最たる障壁は言わずもがな、砦そのものである。

たしかに信長の火薬は強力だが、城壁を崩すには量も威力も心もと無い。

梯子を掛ける、城門を破壊するなどの正面突破は避けたいところだ

が坑道を掘ろうにも鉱山周辺の岩盤は厚く固く、経験不足のエルフでは発破も難しいため時間がかかりすぎる。

籠城され、援軍を呼ばれば挟み撃ちにされ一卷の終わりである。信長達はオルテには既に援軍を回せるほどの余力が無い事を知っていたが、さりとて周囲は切り立った岩山。土地そのものが巨大な要塞とも言える地形だ。

逃げ場などどこにも無い。それは砦にとっても同じ事だが、長期戦となれば不利なのは経験も物資も無い信長達であった。

試験を重ねて強力な爆薬を作る手もあるが、環境が粗雑でエルフの器用さに助けられている現状それは望ましくない。

レイが石壁の出現する勢いを利用して人間を撃ち込む事を提案したが、そちらは即却下された。レイは豊久が出来たのだから、更に身軽で敏捷なエルフであれば可能だと思っていたが、当人達が「そんな事、トヨさん以外にできませんよ！」と必死に否定したため棄却となった。

誰しも腕を組んで唸る中、それまで片隅で無心に木苺を頬張っていたハンニバルが唐突に信長を呼んだ。

振り返るとハンニバルが手で何かの形を示し、再び木苺に夢中になった。

誰もが意味を解さず首を傾げる中、理解したのは信長だけであった。

それから数日後。信長達はエルフを率い、ガドルカ鉱山に向けて出発した。

斯くしてドワーフ占領地への進撃は成された。決行はまたも夜であった。

闇を斬り裂く爆音と炎、煙幕と衝撃にガドルカの兵士達は恐怖と驚愕に染め上げられ、奇襲と気づく間も無く兵士も物資も櫓も次々に灰塵に帰した。

豊久の号令にエルフ達が闇の声を上げ、一気に攻め入る。その肌は炭で黒く塗りつぶされ、夜の闇に彼らの明るい目だけがギラギラと浮かんでいた。土気を回復する間も無く基地を蹂躪。

続く二の郭では城門前で難関の一つ。帝国党武装親衛兵団と衝突した。幸いにも彼らは歩兵であった。重装の彼らを前に、豊久は一旦兵を退かせた。

すかさず親衛兵団も追いかけるがその足取りは重く、一方のエルフ達はほとんど丸裸で圧倒的に身軽であった。親衛兵団全員が城門を出る間にエルフ達は距離を取った。

そこへオルミーヌの石壁が出現し、親衛兵団の行く手を遮った。突如現れた巨大な壁に兵士たちは驚き、次々に足を止める。

その間にも壁は現れ続け、最後の一枚が完全に兵士達を捕らえると同時に彼らは囲まれた事を理解した。

豊久の合図で一斉に爆薬が投げ込まれ、次の瞬間轟音と共に大気が振動した。

壁の隙間から炎と爆風が漏れ、上部から火柱と煙が上がる。

石壁は衝撃を浴びても尚も健在で中の様子は伺えなかったが、炎と黒煙が収まり余韻が響く頃。豊久の合図でオルミーヌが術を解くとほどけるように崩れ去り、後には無残な屍だけが残った。

無傷のまま一瞬にして重装兵を壊滅させた豊久達に砦の兵士達は狼狽し、しかし城門を閉じる事を忘れなかった。

間一髪侵入を免れ、兵士達が安堵の息を吐きかけた。が間を置かず、与一の矢が城壁へと放たれる。

矢にはそれぞれオルミーヌの札が括り付けられており、壁面を穿つと同時に石壁が出現し、階段となって現れた。

「見事!!?・御見事!!?」

豊久を先頭にエルフ達は一気に駆け上がると兵士達が追い付くよりも先に壁を降り、城内へと攻め入った。

幸運にもそこからドワーフ達の区画はほど近かった。

豊久はシャラに促されると迷わず彼らの元へ向かい、迎え撃つ警備の兵士を討ち倒し、遂に彼らを解放した。

工房とは名ばかりの收容所に押し込められていた彼らはひどく衰弱していた。シャラを始めエルフ達に動揺と失意の色が広がった。

彼らにとってドワーフとは、野蛮で卑しく乱暴で下品で侮蔑と嘲笑

と共に語られる存在である。しかしそれはエルフには無い屈強な肉体と頑固さと勇猛さへの羨望の裏返しでもあった。

そのドワーフが今や手足は枯れ枝の如く痩せ細り、長く豊かだった髭は汚れて縮れ、目は暗く落ち窪んで眼窩に濃い影を落としている。

彼らは呆然とし、エルフ達を見ても気だるげな視線を投げかけるだけだったが、やがて騒ぎを聞きつけて現れた一人の老爺が豊久達の前に歩み出た。

「外の騒ぎは何かと思うたが……、お前らがやったのか？ 皮肉なものじゃない。今更お前らが助けに来たのか……？」

「俺達が、じゃない。俺達も助けられたんだ、漂流者に。」

「誰でもええわい。解いてくれ。もううんざりじゃ。解いてくれ。頼む。頼む。たとえお前らがエルフだとしても、解いてくれ、ワシらも戦える……！」

震える老人に豊久は「おう。」と応じた。

「主やらがどわあふか。すごかヒゲじゃ、背が低かのう！ ひどく痩せちよるのう！」

初めてドワーフを目にした豊久が率直な感想を漏らすと老人の目に畏れが走った。

「お主が、その漂流者か。」

「皆目知らぬ!!? こ奴らがそがいと呼んじよるだけで。戦こう前に飯じゃな。飯じゃ飯じゃ!!?」

言うや否や、豊久はエルフ達に呼びかけ食料庫や手持ちの食料、焼け残った物資をひっくり返し始めた。

火を起こして水を沸かし、ついでに砦内で捕まえた家畜を片っ端から捌いていく。

水晶越しにオルミーヌからの報告を聞いた信長は目眩がした。脱力する体に力を入れ、再度確認する。

「敵の目の前で、飯を、食いだしたのか。」

「あああーっ馬を、馬をつ荷馬車の馬や軍馬を片っ端から捌いてっ煮てますっ！」

「やめさせろーっ!!?」

「駄目ですよお豊さん、いきなり肉はお腹壊しますよ！まずはお粥です！あと血は捨てないでください。あとで使うんで！」

「ほうか。」

「レイー！お前も止めろーっ！」

オルミーヌの悲鳴と遠くから聞こえるレイと豊久のやりとり二度絶叫すると、信長は深くため息をついて項垂れ、また顔を上げた。

「乱丸ーっ！俺にも湯漬けをもていっ！はーいいないよミヤー、知つてまーす！判つとるわんな事アボケエ!!？ああくあ、米食いてえええ!!？」

一息に吐き出された信長の切実な願いはガドルカの峰々に木霊し、どこまでも響き渡り、やがて余韻だけが残った。

城塞に立てこもっていたガドルカの兵士達は突如攻撃が止み、ドワーフの収容所地区から煙が立ち上るのを見て困惑していた。

焼き討ちにしては静かすぎるが、あまりにも量が多い。

しばし呆然と外の様子を伺っていた彼らは砦の入り口に近づく豊久と与一に気づかず、声をかけられて漸くその姿を認めた。

「どわあふらば解放したど。今、飯ば食うちよる。今、逃げんと飯ば済んだら皆殺しになつど。逃げるなら俺らは追わんど、身一つで得物ば捨ちて落ちい。早う決めい。」

骨つき肉を片手に現れた豊久が降伏を迫ると、兵士達は驚愕のあまり身を乗り出した。

その表情に既に兵士達が豊久に吞まれていると確信した与一は、彼の才能を改めて認知した。

「今はどわあふは飯に目がいつとるが、食い終わるまで時間はなかぞ。飯ば終わば次は主らじゃ。あやつら、おまんらの生肝まで食わん勢いぞ。城ば開けるか死ぬか、すぐに決めい！」

城ば開けい！これが最後ぞ！決めい!!？」

三度目の勧告でようやくオルテの兵士から返事が来た。

豊久が毅然と「降り兵の首は取らん!!？」と誓うと、速やかに門が下され兵士達は投降した。

「そいでん、こん代官はいずいじや。」

「私だ。城は開けたぞ、逃がしてくれるだろうか?」

「応。すぐ一席ば設けて、腹ば切る仕度ばさせる故、しばし待つちくいや。介錯はおいがさばつとするち。」

名乗り出た代官に、豊久が切腹を言い渡すと当然代官は狼狽え出した。

豊久はこの地に切腹の習慣が無い事を知らない。そしてそれを伝える者もない。

よって代官は豊久に将の器にあらず、と見切りをつけられ、と同時に首を落とされた。

一目散に逃げ惑う兵士達を横目に豊久は「飯ん続きぞ。」と踵を返し、与一に釘を刺す。

「追い討つ必要は無かぞ。」

「あ、ばれてました?」

「助けるち言うた。違えば無しじゃ。」

「つい、昔の癖で……そんな事ばかりやらされてたんで……。」

誤魔化すよう笑う与一に豊久が振り返る。

「もうやらされば無か。こいは我らの戦じゃ。」

返された言葉に与一は今度こそ動揺を隠しきれなかった。

豊久がまた歩き出し、姿が見えなくなると陰から様子を伺っていたエルフ達が顔を出した。

「与一さん、追撃は?」

「しなくていいよ。今はね。ごはん食べよう。」

振り返りこそしなかったが、その声は穏やかであった。

第11話

11

ガドルカ鉱山の襲撃から一夜明けて、ドワーフ達は果たして復活した。

一時は過労死寸前かと思われたが、他種族に比べて一際頑丈で生命力の強い彼らは大量の食事と酒、そして睡眠によって直ちに回復し、すっかり戦前の姿を取り戻していた。

逆にエルフ達は解放以来夜から朝まで休む間も無く彼らの世話に追われ、疲労困憊しつつ改めてその脅威の回復力にドワーフ達へ畏敬の念を抱いていた。

「追加注文来ました！スープと麦粥百人前ー！」

「ビール届きました！ここに置いておきます！」

「腸詰仕上がりました！」

「卵通りまーす！」

ドワーフ区画の炊事場ではエルフ達が慌ただしく行き交い、人の区画や城塞から篡奪した物資が届けられ、すぐに消えていく。

火と行き交うエルフの熱気で誰もが額に汗を浮かべ、拭う間も無く働いている中。

家畜を潰していたエルフの一人が、ふとシヤラが薄っすらと笑みを浮かべていることに気づいた。

水場近くの作業故、他と比べて比較的涼しいとはいえ熱気も臭気も強烈である。

「シヤラ、なんで笑ってんだ？」

「ん？ドワーフが帰ってきた。寝物語のドワーフが帰ってきた。」

どこか誇らしげな笑顔には子供のような無邪気さがあった。

鉄砲の話をするため、信長はある一軒家を借りてそこに各工房の親方達を集めていた。

丁度食事時だったこともあり、心象を良くするために宴の場を設けたのだが、気概を取り戻した彼らの食欲はすさまじく、信長もしばし

目的を忘れて見入っていた。

やっと思い出した頃には既にドワーフ達は出来上がっており、受け答えは確かなものの「それよりもっと酒と飯を持って来んかあ！」と文字通り話にならない。

失敗だったと項垂れる信長の隣で、豊久と与一は我関せずといった風に各々食事を楽しんでいる。

そこへ追加の酒樽を抱えたレイと、料理を持ったマーシヤとマルクが現れたため、最早誰も信長のことなど気にも留めない。

信長は故郷の家臣一同に想いを馳せ、「今思えば、お前らすごく俺の言うこと聞いてたんだね。」と遅れ馳せながらその忠実ぶりを実感していた。

与一は酒を舐めつつ、初めて見る料理に顔を引きつらせ、レイに尋ねる。

「うわあ、何ですかそれ。真っ黒じゃないですか。」

「これですか？馬の血の腸詰です。クセはありますけど、お酒に合いますよ。」

「……食べるのか？」

醜悪な見た目と血と腸という単語に、獣食に抵抗のある与一は酔いも手伝って露骨に顔をしかめた。

獣食が当たり前の豊久も、酒と合うと聞いて興味を抱くがその見た目に抵抗感が拭えず、手を伸ばそうとしない。

豊久同様、肉に抵抗が無く密かに彼に親近感を抱いていたレイは見兼ねて率先して手を伸ばした。

一切れ頬張りつつ酒を煽り、喉を鳴らして飲み込む。

唸るように息を吐くと顔を赤くして頬を緩ませた。

言葉は無いがその表情だけで全てが伝わり、与一、豊久はゴクリと喉を鳴らす。

「嬢ちゃん、あんたいける口だね。」

「いや〜えっへっへっへっへ。」

ドワーフの賞賛にレイはだらしなく顔を緩ませた。

その姿に豊久の対抗心に火が点き、同じように一切れ口に放り込むと一気に杯を空けた。

「おおっあんちゃんもやるじゃねえか！」

囃し立てるドワーフ達に気を良くした豊久は胸を張って荒々しく鼻息を吐いた。

後はもう語るまでも無い。

そこに与一やドワーフも加わって競い合うように飲み交わし、気がついた頃には信長とエルフの子供以外は全員出来上がっていた。

肩を組み、盛大に酒を零しながら杯をぶつけ合うドワーフと豊久。服を肌蹴させ、かつての上司の愚痴をドワーフにぶちまける与一。黙々と木苺を食べるハンニバル。

ドワーフと輪になって調子っぱずれの声で歌い踊るレイという阿鼻叫喚の光景が広がっていた。

「うわっ何ですかこれっ！酒くっさ！」

様子を見にきたオルミーヌが入り口から顔を覗き込ませると同時に口と鼻を手で覆う。

信長達はすっかり慣れてわからなかったが、部屋には料理と酒の匂いが充満しきっていた。

と、レイがオルミーヌに気づき、その肩を掴んだ。

レイのただならぬ雰囲気にもオルミーヌは圧倒され、身を竦ませる。

「オルミーナさくん、えへへへへ。見ましたよ」

「オルミーヌです。み、見たって何をですかあ。」

「あの石の壁、本っ当に凄かったですよ！なんで教えてくれなかったんですか〜！」

オルミーヌは言葉に詰まった。

以前、魔術について聞かれた際に下手に話したら面倒なことになると察して「自分はまだ修行中の身ですので……」と誤魔化し、明かさなかったのだ。

廃棄物の襲撃の際に一度見られてしまったが、結局その後も慌ただしく、レイが話を聞く機会は無かった。

言い淀むオルミーヌにレイは一人で勝手に納得する。

「まあ仕方ないですよね、無闇に手の内を明かしたっていいことなんて何にもないですもんね。」

「そ、そうなんです！師匠からもなるべく人には教えるなって言われてて……あはは。」

嘘では無い。しかし、基本善良なオルミー又は仮にも一蓮托生の間柄であるレイに隠し事をした事に罪悪感を抱いていた。

「でも本当に凄かったですよ。廃棄物の時も、今回も、オルミー又さんがいたから何とかなつたんですよ。」

「や、やめてくださいよ。本当にすごいのはみなさんの方じゃないですか！私なんて、私なんて、ただ言われた事をしていただけで……！」

尚も賞賛をやめないレイに、オルミー又は気恥ずかしさと後ろめたさからあ慌ただしく掌を左右に振った。

オルミー又は己を恥じていた。弟子の中で、最も若く経験も浅い自分に自信が持てなかった。

何故、師匠の直弟子でありながら未だ一つの術しか使えない自分にこの漂流者達を任せただろう。と常々不安に感じていた。

晴明は彼女を弟子の中で最も才能があると認めていた。しかし彼女にはその事を伝えておらず、また彼自身が優秀すぎたせいで相対的にオルミー又はは自分が酷く劣つて見えたのだ。

その上、初めて術を見た豊久や信長に自分が思いもしなかった使い方を示された時も、悔しさよりも情けなさが勝った。

それ故にレイの言葉を素直に受け止められず、己を卑下する言葉を吐いたが、続く言葉に呆気にとられた。

「いや、十分すごいですよ！言われた事をきちんとこなせるって、難しいんですよ。オルミー又さんが信頼されてるって証拠ですよ。」

「信頼、ですか？」

「そうですよ、オルミー又さんならやってくれる。大丈夫だって思われてるんですよ。」

考えたこともなかった。

オルミー又はどうしようもなく善良で、愚直で勤勉であった。

故に、それが当たり前だと信じ、疑った事が無かったのだ。

オルミーヌは改めてレイを見た。真つ赤な顔で体を左右に揺らす、間抜け面。

オルミーヌは未だにレイが苦手であった。初対面の時の苦手意識が未だ拭いきれず、避けている内に距離が生まれてしまい、互いになんとか関わりとうしなかった。

所詮酔っ払いの戯言である。明日になったら忘れているに違いない。とオルミーヌは確信していた。

しかし同時にそうであつてほしいと願わずにいられず、オルミーヌは否定の言葉を続けられなかった。

「何言つちよう。功劳者は俺じゃ。先陣切つたのも俺。城は落としたりも俺ぞ。」

「ええ、違いますよ。僕れすよ、僕がいにかつたら城壁登れなかつたりやないれすか。」

「いやいや、俺だろ。なんたつて指揮したのは、この俺様だからな！」横で聞いていた豊久が「誰が一番の功劳者か。」という話と勘違いし、自分こそがと名乗りを上げた。

聞き捨てならぬと与一が異議を申し立て、続いて素面の筈の信長が加わると三人はしばし睨み合い、間も無く取っ組み合いへと発展していった。

食器が宙を舞い、卓がひっくり返される。それを笑って見ていたドワーフ達もやがて巻き込まれて逆上し、大乱闘となった。

「み、みなさん落ち着いてください！こんな事をしてる場合は……！レイさん、レイさんも何か言ってくださいよう！」

「あははははは！いいぞー！やれやれー！デカイ方に二十ゴールドだー！あははははは！」

オルミーヌは慌てて止めようとするが声は届かず、レイに協力を求めたがレイは腹を抱えて笑っていた。

エルフの兄弟は早々に外へ避難し、ハンニバルは相変わらず部屋の隅で木苺を貪っている。

騒ぎを聞きつけたエルフ達が慌ててやってくるが、漂流者とドワーフが相手では何もできず手を拱いている。

オルミーヌは頭を抱えて己の無力さを嘆くと同時に、この状況に慣れつつある自分に深くため息を吐くのだった。

第12話

12

夢を見た。目覚めと同時に忘れてしまったが、碌な内容ではなかった事だけは覚えていた。

見知らぬ天井に首を横に捻れば、暗がりの中に漆喰塗りの壁が目に入り、ドワーフの占領地だと思ひ出す。

親方達との宴の後睡魔に負け、街で一番いい宿の部屋を借りたのだ。

夢のせいか寝起きだというのに嫌に目が冴えていた。

寝台から出て窓を開けると、夜の冷気がレイの意識を更に覚醒させた。

建物は丁度広場に面した位置にあり、窓を開けると広場を一望できた。静かな夜だった。

広場には既にドワーフやエルフの姿は無かった。規則的に組まれた石畳がぼんやりと白く浮かび上がり、所々に残る炊き出しの跡だけが昨夜の喧騒を物語っていた。

西の空に下弦の月が浮かんでいた。恐らく午前。まだ日の出には時間がある。

青みがかった深く暗い空に薄めた墨汁をひいたような雲がかかり、月と星だけが街を照らしていた。

どの建物にも明かりは無い。

寝直そうと寝台に戻ったが眠る気配は訪れず、ふと静かすぎる事に気づいて部屋を見渡した。

自身以外誰もいない。廃城には状態の良い部屋が一つしかなく、レイ達は一つの部屋で寝起きしていた。エルフの手が加わってからもなんとなくそのまま過ごしていたため一人で過ごすのは久方ぶりだった。一応寝る時は布で仕切ってはいたが、それでも鼾の全く聞こえない夜というのは落ち着かなかった。

隣の部屋か、別の建物だろうと見当を付けて横になったがやはり眠

れず、結局体を起こすと近くの椅子にかけられた上着を羽織り、部屋を後にした。

廊下に出るとレイの部屋以外にも多数の部屋があり、扉の前で聞き耳をすると人の気配があった。起こさぬよう、慎重に歩を進めていく。

階段を降りるとその度に板が軋む音を立てた。静寂の中でそれはやけに大きく聞こえて、レイの肝を冷やしたが、幸い誰も起きることはなかった。

目当ての人物がどこにもいないとわかると、レイは宿を後にし夜の街へと繰り出した。

木骨造の建物が軒を連ねる光景は、さながら絵本の挿絵のようであった。

特にドワーフの区画は建物も家具も彼ら用に小さく設計されており、レイは自分が小人の世界に迷い込んだような気分になった。

服の隙間から入り込む冷気がガドルカ鉱山が山の中にある事を思い出させたが、レイはまだどこか夢心地が抜け切らなかった。

道すがら時折両腕を摩ったり、意味も無く手櫛で髪を梳かしたりしながら心当たりのある場所を訪ね、最後に街と外を隔てる城壁にぶつかった。

近くの塔から歩廊へと上がると胸壁越しに昨夜の攻撃の跡が目に入り、レイは安堵した。

火薬と汚物と人の焼ける匂いが鼻を刺し、それはレイの中にあるもやを拭い去っていくように感じた。

そのまま城壁を一周する。入り口に差し掛かったところで、親衛兵団の死体を鳥が啄んでいるところを見かけた。

ひしやげた鎧の隙間から器用に頭を突っ込んで肉を引きちぎる。レイがしばらく眺めていても素知らぬ顔である。

昨夜の光景を思い出して改めて感慨深く溜息を吐く。振り返り、山の中腹にある本丸を見上げると様々な思いがこみ上げてきた。

オルテ最大の工廠であるガドルカが落とされた以上、オルテは風前の灯火である。

かつてのオルテはたしかに大国であった。でなければ遙かに長命なエルフや頑強なドワーフを征圧し、五十年も戦い続けられない。

だが全ては諸行無常。盛者必衰である。

今やその命運がエルフとドワーフ、そして建国者と同じ漂流者にかかっているのだ。因果な話である。

と、その時空が白み始めている事に気づいた。腹の虫が音を上げる。

少し早い、まずは腹ごしらえである。結局三人は見つからなかった。しかし腹が減ったら帰ってくるだろう、と奇妙な信頼を胸にレイはそのまま来た道に戻り、広場へと向かった。

ガドルカ鉱山郊外。元は石切場の今は瓦礫と砂利しかない広場にレイは豊久と対峙していた。

きっかけは若いドワーフの一言だった。豊久が腹ごなしに彼らを誘って互いの剣を披露し親睦を深めていた所、ドワーフの一人が豊久の組手甲冑術を見たい、と言い出した。昨夜の宴の後、親方から話を聞かされ、元々今度の戦いに加わりたいと思っていた彼等は改めて豊久の腕を確かめたくなったのだ。断る理由もなく豊久は一も二もなく快諾した。しかし親方にそのような話を話した記憶が無く、首を傾げると親方に話したのはレイであったと続いた。

成る程、と豊久は納得した。彼女は普段から本人や、本人の見ている所でそういう事をするのは珍しくなかった。酒の席であれば尚更だろう。

具体的な称賛の内容を聞かされて呆れるやら、ドワーフ達からの視線がこそばゆいやらで、豊久は照れ臭くなって頭を掻いた。

しかし、信長達やエルフはともかくドワーフでは体格差がありすぎてやり辛い。

最初に見せるのであれば一般的な形の方が良いだろう、と豊久が人を呼ぼうと振り返った所に幸運にもレイが現れた。

彼女は昨夜、信長がドワーフ達に依頼した鉄砲の試作品が完成したのを知らせに来たのだ。

そして話は冒頭に戻る。

「丁度ええ。お前が相手せい。」

「えっ、……いやまあ願ったり叶ったりというか、光栄ですけど私じやお豊さんの相手なんて務まりませんよ。それにほら……」

廃棄物の襲来以来、レイは折を見て豊久から体術を学ぼうと思っていた。

ジャンヌの不意打ちに受け身すら取れず、逃げることも叶わなかった己を悔やんでいたからだ。

そのため今回の申し出は本来であれば有り難かったが如何せん唐突で、更に他人に披露するときは素人の自分が相手では下手をすれば豊久の面目を潰しかねない。

そう考慮して辞退したが、豊久には伝わらなかった。

「どわあふらでは体格差がありすぎてうまくいかん。」

「そ、それなら信さんや与一さんに……。」

「お前この間じゃんぬとか言う女に負けとつたろ。ついでじゃ、鍛え直ちやる。来い。」

そう言われてはレイも反論出来ない。

結局レイは豊久に一方的に叩きのめされる破目になった。

「ひぎいー……お、お豊さん、あの、せめてもつと平らな所でやりませんか……？」

「アホ。敵がそがいな事気に掛けてくれると思つとるんか。」

「ごもつと……っのふっ！……こっちは初心者、なんですけど……」

「体で覚えんのが一番早えど、さつさと立てい。」

「あべしっ。」

何度も地面に転がされて、既に満身創痕のレイに豊久は間髪入れずに言った。

豊久も一応手加減はしている。

しかし何度ひっくり返しても立ち上がるレイに豊久は段々面白くなってきて、つい力が入りそうになっていた。

ドワーフ達も最初こそレイに同情していたが、次々と披露される豊久の妙技と何度もそれを食いながらも立ち上がるレイの姿に誰も気

にかけなくなっていた。

「ぐえっ！」と一際太い声を出してレイが倒れる。

数秒地面に伏していたが、豊久が期待して待っているとまた立ち上がり、豊久をギリギリと睨みつけた。

「こん、のおー！」

「おっ」

レイが豊久に体当たりし、腰帯に手を回そうとする。が豊久が身をひねって躲し、レイは勢いを殺しきれず、数歩つんのめりながらも立ち止まった。

振り返ると同時に豊久が飛びかかる。

レイの首が豊久の脚と腕に捕らえられ、その勢いで後ろへ倒れた。

間違いない。豊久がアラムにかけた技である。

ドワーフ達は噂で聞いた技にどよめき、思わず腰を浮かして拳を握りしめる。

「お豊さん、あの、あの、私、男の人に押し倒されるの初めてなんです。」

「うん。優しくしちやるけ、安心せい。」

「なんで鞘を持つんですか！やだ！やめて！流石に死にますってそれはー！」

「大丈夫ち。顔が潰れたくらいで死なん。」

「そうでした！そうじゃなくて、やめて、やめ、ギャーっ！」

必死に訴えるレイに構わず豊久は鞘を振り翳し、レイの顔を碎く寸前で止めた。

レイは恐怖で手で顔を庇ったまま硬直している。微かに震える指先としゃくり上げる声に漸く豊久が後悔して顔を覗き込もうとする
と涙目で睨みあげ

「ぐべっ！」

鞘を掴んで押し上げ、額を打ち砕いた。

隙をついた反撃に豊久の脳天が揺さぶられ、その衝撃で身体が後ろに傾く。

豊久の力が緩んだ隙にレイは身体を下にずらして脱すると、今度は逆に豊久に覆い被さった。

「つぎけんな！手加減しろ馬鹿！あほ！死ね！」

その勢いで地面に後頭部をぶつけ、豊久の視界が一瞬明滅する。馬乗りになつて殴りかかるレイに、豊久はすぐに持ち直してレイの両手首を掴んで押さえ込んだ。

レイはすぐに頭突きへと切り替えるがそれよりも早く豊久が下半身を浮かせて、膝でレイの背を蹴り上げる。

レイが痛みに怯んで態勢を崩した隙に、次いでその勢いで上半身を起こすと同時に豊久はレイの腕を引いて体を引き寄せた。

低く重い音と共に互いの額がかち合う。脳が激しく揺さぶられてレイは数秒身を強張らせて耐えようとしたが、すぐに全身から力が抜け、豊久の上に倒れた。

レイを抱え、ドワーフ達に向き直つた豊久はふん、と得意げに鼻を鳴らしてみせる。

ドワーフは結局負けてしまったものの最後のレイの奮闘ぶりに感心し、自分達も負けていられないと奮起するのであった。

「なんなの、あれ……」

遠くから様子を窺っていたサンジェルミの従僕、フラメーとアレスタは呆然としてその一部始終を見ていた。サンジェルミから漂流者の力量を見定めるよう仰せつかり、忍び寄っていたのだが、すっかり機会を失ってしまった。結局間に入れぬまま漂流者二人とドワーフは与一に呼ばれて街へと戻つてしまい、後には不運な従僕二人だけが残された。

与一に呼ばれ信長達の元へ戻つた豊久達は、工房の一室でサンジェルミ伯爵と対面した。

以前レイから受けた説明の通り豊久には理解の及ばない男で、彼は伯爵である彼自ら、自国を売る手伝いに来たと語つた。

統領は誰だと尋ねるサンジェルミに信長と与一は無言で豊久を指さす。

「おかしな話の流れじゃっどん、俺という事ばなっちよる。」

「あなた……あなた達のお名前はなあに？漂流者ならお名前知ってるかもしれないよ。」

サンジェルミはレイを担いだまま話を進めようとする豊久に内心動揺したが、余裕の表情を崩さず尋ねた。

豊久、与一、信長、ハンニバルと続いて最後にレイが残り、レイは意識こそあったが口を動かす気力すらなかったため、代わりに豊久が答えた。

ハンニバルと聞いてサンジェルミは再び平静さを失いかけるが冷静に受け流し、不敵に笑う。

「……どうやらお前も俺らの生きた時代より、だいぶ後の世から流れてきたのか？」

「も、つてことは、もしかしてその女も？」

「ああ。」

「あら残念。なら、もう知ってるのかしら？セキガハラの後にはシマツ家がどうなったか……ねえ？」

サンジェルミは流し目で豊久の反応を伺ったがはたしてその答えは、彼の予想から大いに外れたものだった。

「そがいな事は言わんでも、決まっちゃる。」

あの段でん既に義弘叔父上はわいらが時ば稼いで脱しておられた筈じゃ。義弘様さえ薩州に帰られたなら決まりきっちゃる。島津は徳川家ば滅ぼした。何十年、何百年かかったか知らん。じゃっどん、必ず島津兵子が滅ぼした。」

一片の迷いも無い、本心からの言葉であった。

凜と断言する豊久にサンジェルミは初めて表情を崩した。

「な、何よこの子……。なんであの敗走の中、何の疑いも無くそう思えんのよ。どういう神経してんのよ。」

呆気にとられるサンジェルミに信長が話に割って入った。

「いやまあ、その、こういう子なんです、ゴメンなオカマ。ところで俺は？俺は？俺はどんな風に後世に伝わってんの？」

サンジェルミが未来の南蛮人と知って、過去にレイから海外でも人氣と聞いていた信長は期待に胸を焦がして尋ねた。がサンジェルミ

の答えは投げ遣りなものだった。

「あんたはもうなんか一言では言えないわ！空は飛んで怪光線出して巨大化したり、この世を魔界に変えたり体真つ二つでお茶立てたり！あ、あんたは武器の方が有名。」

想像もつかない返答に、信長とついでに教えられた与一は「何が起きた未来!!？」と二の句を継げなくなった。

その頃にはようやくレイも手足を動かせるようになっていたが、黙って大人しくしていた。

この状態で起きれば二人から説明を求められるのは間違いない。

レイはサンジェルミの話について概ね予想がついていたが、面倒な事になると見越し、話が済むまで豊久の上で狸寝入りを続ける事にした。

首都強奪

第13話

話が本筋に戻ったのを見計らってレイも加わるとサンジェルミは改めて計画の概要を話した。

藩地伯権限で議会を招集。彼の手引きで信長達は首都ヴェルリナに潜入し、彼の軍と共に政庁舎を征圧。

議員達には前もって根回しし、無血で首都を漂流者に奪還させる。というのがサンジェルミの考えた筋書きであった。

詳しい日程や軍備について話そうとした所で、レイが挙手した。

「あの、一ついいですか？」

「なあにあなた。」

サンジェルミは訝しんでレイを見た。

他の漂流者と違い、レイに関して彼は殆ど情報は持っていないなかったが概ねどこから来たか予想はついていた。

豊久や与一のように武芸に優れているわけでも、信長のように領主としての経験と知識があるわけでも無い。かといってサンジェルミのように錬金術や薬学など、学問に通じているようにも見えない。

ただの女、というのが第一印象であった。

「えつとサンジェルミ伯爵？はあれで来たんですよね、御領地から。」

とレイは窓の外から見える彼の馬車を指差した。

サンジェルミ自らが設計した、八輪六頭立ての豪華な馬車である。

外観は長方形。後ろ側に入り口が、御者台側の側面にそれぞれ小さな窓がついたもので、形は質素だが色合いは遠目から見ても鮮やかな桃色である。側面には彼の顔の意匠がされた巨大な掲旗がかかっており、走った際に人の目を惹くよう計算されている。

「そうよ。あんたまさか、私の馬車にケチつけようっていうの？」

「いえ、その独創的だなあと。」

「レイ。少し黙ってる。」

「はい、すみません……。」

信長に窘められ、以降レイが話に参加することはなかった。

この時のサンジェルミのレイへの印象は、胸も頭も軽い女、という物だった。

会議を終え、サンジェルミが退席したのを確認するとオルミーヌが口火を切った。

「ノブさんはあの人を信用するんですか？」

豊久も与一もレイも、口には出さなかったが同じ気持ちであった。

三人も信長をじつと見据え、自分の言葉を待っている事に気づくと信長は得意げに笑った。

「どうしてそう思うんだ？」

「だって怪しすぎますよ。あの人。たしかに言っている事の理屈は通っているかもしれませんが……。」

オルミーヌには政治がわからない。

しかし信長の君主としての慧眼には一目置いており、彼が言った「他所から来た奴にほいほい指揮権を渡すか。」という言葉覚えていた。

そのため大藩地伯であるサンジェルミが指揮権どころか国を譲る理由も、それを彼らが信じる理由もわからなかった。

「やはり罨では。」と与一が言う。

クーデターという餌で信長達を釣って、少ない兵士だけ連れてほいほい誘い込まれた所を軍勢で叩く。

その可能性は十分ある。が、彼は鉄砲の存在を知っていた。知つていながらオルテに作らせず、信長達にそれを準備する期間を与えた。それらを超える武器を既に秘密裏に作っている可能性も捨てきれないが、おそらくそれは無い、と信長は踏んだ。

彼からは信長達のような匂いがしなかった。

「じゃあやっぱり廃棄物なんじゃ……!」

「それは無いです。」

即答され、オルミーヌは困惑しながらレイを見た。

「ど、どうしてそう思うんですか。」

「えーとですね、まず一つ。人類を滅ぼしたがってる筈の廃棄物が何十年も領主として経営するのか、という点。二点目は正直勘なんですけど、あの人が世界を恨んでいるようにには見えない点。むしろ滅茶苦茶楽しんでるように見えますね。」

あと最後。これが一番の理由なんですけど、あんなどつからどう見ても変態でしかない人が、漂流者じゃないわけないでしょう。」

最後の理由にオルミー又は目の前の漂流者達を見つめて「あー…。」と納得した。

当然三人は食い下がる。

「どういう意味じゃゴラ、俺らがあのオカマと同類ち言いたいんかお主！」

「そうですよ、幾らなんでも今のは聞き捨てなりませんよ！信やお豊はともかく！」

「くおら与一、貴様何自分だけまともみてえな言い草してやがる！」

発端であるレイを放つて睨み合いを始めた三人に呆れながらオルミー又は話を続ける。

「そ、それなら信用しても大丈夫なんですかね…?」

「うーん、そこは私にはなんとも…。漂流者だからって必ずしも味方とは限らないと思いますし…。とはいえあの人に過去に一度ヒトラーに領土譲ってますし、同じようなことしても不思議じゃ無いとは思うんですよねえ…。まあ当時と今で心境が変わって、領土に愛着が湧いてないとは言いい切れないんでなんとも…。」

「そいつは無いな。」

と今度は信長が否定した。

与一も豊久も振り上げた拳を下ろし、続きを待つ。

「ああいう手合いはたまにいる。信義とか忠誠心とか元から何も無いのだ。だから簡単に裏切る。簡単に裏切るが、その裏切りには怨みとか先祖代々の情念とかそういうもんがない。利益と打算からの物だ。」

だから奴は信用できる。誰かを裏切っている間はな。」

と、信長は自信満々に締めくくった。

経験に裏打ちされた言葉に誰も意義を挟む者はいなかった。

「おかしな話ぞ。姿形だけでなく、中身も妙ぞ。」

「……なんにせよ、話に乗っかるのは決定だ。アイツめ、あんな目立つもんで来よってからに。」

既に廃棄物達は人類への攻撃と漂流者の排除に動き出している。

大藩地伯であり、国父との交流も深く影響力も知名度も高い、良くも悪くも目立つ男を廃棄物側が認知していない可能性はまず無い。

遅かれ早かれ、漂流者と接触した事は廃棄物の知る所となる。そうすればあちらもサンジェルミがオルテを裏切るという結論に至る。

なにせ彼は既に一度裏切っているのだ。

廃棄物側も手を打つてくると警戒した方がいい、と言う信長に豊久は変わらぬ調子で言い放った。

「俺らははなから戦んつもりぞ。邪魔すつ奴ばらば全て倒す。無血でん国ち奪った試し無か。」

頼もしい男だ、と信長は彼がドワーフやエルフに惹かれる理由を改めて実感した。

クーデターの決行に向けて、漂流者達は急速に準備を進めた。

ドワーフの優れた冶金技術と奮闘の甲斐あって鉄砲を百丁、十日足らずで用意する事ができた。

レイはその間信長の指導の元、ひたすら銃の修練に努めた。

とはいえ火縄銃は数があって初めて威力を発揮する。今度の戦で銃を使うのはサンジェルミの配下だ。彼らは鉄砲の用意が済み次第首都で合流する予定なので、レイ一人に修行をつける意味はさほど無い。

信長は試し打ちも兼ねた気休めだと言ったが、単に誰よりも早く新しい銃を試す口実がほしかっただけだとレイは最初の修行で悟った。そのためレイの訓練は主に弾込めに費やされた。頭で考えずとも体が勝手に動くようになるまで徹底的にしごかれた。

与一はエルフ達と共に廃城から火薬を補充し、早合と焙烙玉、火矢を量産。

信長はレイの修行の傍、サンジェルミと計画を練り、豊久はドワーフ達の鈍った体を鍛え直し、そして遂に首都強奪の当日を迎えた。

サンジェルミの権限で漂流者及びドワーフ、エルフ両二百名。鉄砲や火薬、爆薬を詰め込んだ馬車は無事検閲を突破し、予定通り首都ヴェルリナの政庁舎へと乗り込んだ。

豊久を先頭に向かい来る衛兵を撫で斬りにし、会議室へ辿り着くと果たしてサンジェルミが会議卓を挟んで僧服の男と言い争っていた。廃棄物だ、と一同は一目見て理解した。

僧服の男の体は半透明に透けており、向かいの壁が薄つすらと見えていた。

膝から下が無く、そこにあるべき部分は途中から千切れた紙のようなものが宙をさまよっていた。

傍らに座る二人の議員は虚ろな表情で腰掛けており、その体からはこれまた半透明の糸が伸び、男の手へと繋がっていた。

苦虫を噛んだような顔で男を睨みつけるサンジェルミに信長が話と違う、とぼやくと、男は豊久達に向き直った。

ラスプーチンを名乗るその男は、長い黒髪を左右に分けて垂らした眼鏡の優男であった。

口調や物腰こそ僧侶らしく穏やかだが、粘着質な笑顔がそれらを台無しにしていた。

その名にレイは真っ先にロシアの怪僧、グレゴリー・ラスプーチンを連想した。

しかし記憶とは似ても似つかない姿に怪訝に思っていると、それを読み取った彼は値踏みするような目でレイを一瞥した。

「おや、私をご存知の方がいるとは。もしや後の世の方……日本人ですか。ふふ、奇妙な縁だ。

国王様はともお忙しい、正直あなた方に関わっている暇はありません。何しろこれから世界を滅亡させるもので。ですので私はこういう策を。」

言うや否や帝都の各所から火の手が上がり、呆然と椅子に腰掛けていた議員達が窓に張り付いた。

と同時にレイ達とは別の扉から五人の武装したゴブリンが現れる。「私もこの都に兵を入れさせて頂きました。まあ嫌がらせの類ですが。いやはや誠に申し訳ありません……」

言い切らぬ内に、豊久は会議卓を飛び越えてまず二人。着地と同時に振り返りざまに残る三人を斬獲した。

豊久の決断の速さにラスプーチンは一瞬呆気にとられる。がすぐさま平静を装い、軽蔑と挑発を混じえて豊久に語りかけた。

しかしやはり豊久はこれも無視し、意に介するどころか耳にすら入っていない様子で卓上に上がった。

そしてラスプーチンの傍に座る議員の片割れ、豊久達が現れた時も街に火の手が上がった時も何の反応も示さなかった男の前に来ると、その顎を思い切り蹴り碎いた。

一切の呵責も躊躇いも無く何度も何度も顎を砕き、その度に議員の頭が椅子にめり込む。

忍び込ませた兵をあつさり返り討ちにされ、配下を足蹴にされ文字通り顔を潰されたラスプーチンは端正な顔を歪め、言葉を失う。

四度目でようやく我に返ったサンジェルミが止めると、今度は信長が彼を追い詰める番であった。

「冷や汗一滴かいたら負けよ。」

彼の焦燥を見抜いた信長の口は饒舌であった。

「笑えよ。ちゃんと笑ってなきやダメだろ。どうした、謀士きどり。笑いが引きつってっぞ。」

こつちからも言わせてもらおうわ。ありがとな。

ホントはお前らが無血でこの国かつさらう気だったんだろ？俺らが出て本当は渋い面をしたいのだ。ちゃあんと渋面するオカマ伯の方が可愛げがあるわい。」

自分達が廃棄物の脅威を喧伝する、国を奪う大義名分が出来たと続けて信長は一際邪悪な笑みを湛えた。

「笑えよほら、こつすんだよ。」

遂に表情を保てなくなつたラスプーチンは煙のように姿を消した。後は蜂の巣を突いたような騒ぎとなつた。

大急ぎで総員戦闘準備に走らせ、信長は豊久が叩きのめした議員を尋問にかけたが、議員は会議の間の記憶が無く混乱しており、面倒になった豊久に気絶させられあえなく失敗した。

「敵の数がわからんとどうしようもない。が、やるしかない。」

既に敵が手を打ちに来る事は想定していた。覚悟はできている。

街の外で待機していたサンジェルミの軍勢と合流し、初めてその全容を知った時は誰もが一瞬不安に駆られたが豊久の号令に一糸乱れぬ動きで応じてみせた。

統率のとれた動きと表情に、満足し種子島を配備すると豊久は改めて作戦を告げた。

サンジェルミの兵からなる砲兵を信長、ドワーフら歩兵を豊久、エルフら弓兵を与一が率い、敵を庁舎に引き寄せ、鏖殺。

逃亡も降伏も一切許さず、一人として生かして返さぬと告げる豊久の目はこれまで見たそれと同じ、否それ以上に輝いていた。

「全員首級にする。覚悟せい、そいが戦ぞ。」

レイも兵達も皆、その瞳に魅入り誰一人言葉を発さなかった。

話が終わると皆持ち場につき、敵兵の到着を待った。

与一らは建物の屋上へ、信長と豊久らは庁舎正面の大通りと繋がる玄関前に位置した。

レイは信長率いる鉄砲衆に混ざり、オルミーヌは数名のエルフと共に庁舎内で各々の水晶の会話の中継を担った。

まだ敵兵の姿は見えない。

代用品で調練をしていたとはいえ、初見の武器で戦うとなつては優秀なサンジェルミの兵達にも緊張の色が見えたが、ドワーフの一人が自分達用に作ったという大筒を披露し、レイが興奮。豊久が爆笑し、それに宛てられて多少和らいだ様子であった。

「ところであなた、それ、なんなの？」

「あー……えっと」

信長達と共に玄関前に位置していたサンジェルミが問うたのは、レイの格好であった。

胴体には暇を見て自作した弾帯を袈裟懸けにし真ん中には双眼鏡、

腰には同じく胴乱と弩、顔に顔料を塗りたくり、肩に火縄銃を担ぐ姿は古今東西世界を股にかけて闇鍋軍団の中でも明らかに浮いていた。指摘されてレイ自身も羞恥心が込み上げ、誤魔化すように頬を掻く。

「信さんがこの世界で初めて銃を披露するんだからとにかく派手に、目立つようにしろって……。」

打ち合わせをする内にレイも楽しくなってしまう、つい悪ノリでした提案が採用されたのだ。

時間の都合上、レイ一人分しか用意できなかったが本来であれば全員に施すつもりだったと聞かされ、サンジェルミは戦慄した。

テーバイ神聖隊を模した男同士のつがいの軍を作るだけあって、サンジェルミの趣味は幅広く近代のそれも範囲内であった。

しかし苦勞して作り上げた自分の軍を勝手に塗り替えられてはたまったものではない。

サンジェルミは危うく彼らの魔手を逃れたことに胸を撫で下ろし、今後も彼らから守る事を固く誓うのだった。

第14話

14

夕暮れ時に敵軍を確認したと、斥候から水晶越しに伝令が届いた。数の上では信長達の方が不利だが殆どがゴブリンからなる歩兵であった。

彼らは庁舎に向かって大通りをまっすぐ突き進んでおり、じきに庁舎へ到達すると締めくくると信長は水晶を懐に仕舞い、兵達に呼びかけた。

「構ええい。この世界で初めての銃火ぞ！お前たちが魁ぞ！お前達はその先頭に立っている。お前達の後ろに何億丁もの銃が続く。お前たちは今、歴史の上に立っている！」

かくして、戦いの火蓋が切られた。

初撃は練度不足でありながらも、敵兵の恐怖を駆り立てるのには十分な威力であった。

信長の合図でそこへ弓衆による高所からの一斉射撃で数を減らすと同時に時間を稼ぐ。

一週間ひたすら弾込めに費やした事もあり、レイの動きは迅速であった。

しかしやはり数に対して手が足りず、ほとんどはサンジェルミの兵によるものであった。

彼らの動きは辿々しく、爆音と煙とその威力を目の当たりにした恐れからも遅れていたが続く二度目の射撃で敵兵の足が完全に止まった。

煙幕越しに響く断末魔と怒号に信長が確証を得ると同時に豊久が関の声を上げる。

豊久率いるドワーフ兵の突撃に敵の戦列は容易く崩れさった。

五十年間虐げられてきた彼らは積もり積もった鬱憤を晴らすように、敵を薙ぎ倒し豊久の宣言通り皆殺しにした。

豊久から伝令を受け取り、信長は与一へ後備への攻撃を銃兵に援護射撃の用意を促す。

一方的な蹂躪に戦争屋では無いサンジェルミも高揚し、勝利を確信するが再び届いた豊久からの報告に信長は不吉な予感を抱いた。

「敵は引いち行きよる。後備がおらん。」

続く与一からの報告に信長の顔色が一変した。

「敵が少人数に分かれて、街中に分散し始めた！各所で火を点けてて煙で見通しがきかない！」

「まずい、こいつはまずい。」

「ちよつ……どういふ事よ！」

「対応が早すぎらあ！敵の将はまさか……銃を知っている？」

一際高いサンジェルミの声に、ようやくレイも異変を察知する。

二人の視線を無視して信長は豊久に戻るよう伝えるが豊久は応じず、ドワーフだけが返された。

その言葉にレイは双眼鏡を掲げ、豊久の姿を確認した。

彼の向かいに立つ一人の男の姿を確認してレイは思わず「うっそお」と漏らし、信長が食いつく。

「知っているやつか、レイ。」

「は、はい。多分、新撰組副隊長、土方歳三、です……！」

「なんですって！ちよつと貸しなさい！……間違いないわ、なんて事！」

サンジェルミがレイから双眼鏡を奪い取り、同様に驚愕する。

レイは今更晴明からの「洋装で帯刀した日本人」という情報を思い出し、己の記憶力と察しの悪さに自己嫌悪した。

自分達のように、銃を知っている時代から来た廃棄物の可能性を完全に失念していた。

銃を製造する能力が無くとも、それへの対応策を知っている者がいてもおかしくない。

☒杖を握りしめるレイに、信長は続きを促す。

「どんな奴だ。」

「信さんの時代から三百年程先の人です。徳川幕府が敗れた際に、幕府側について最後まで応戦した人で、えつと……」

「京の治安維持と不穏分子の粛清に努めた男よ。鬼の副隊長と呼ばれ

ていたけど、最後は……。ちよつと、まずいわよ。」
「え。」

「お馬鹿！トヨちゃんは薩摩の子よ。薩長ついたら倒幕派の総大将みたいなもんじゃない！」

続くサンジェルミの言葉はレイにかつての聖女の成れの果てが何をしたか思い出させた。

廃棄物は話が通じない。

三百年前の、レイからしてみれば無関係としか思えない豊久であっても土方にとつては許しがたい仇敵である。

「ちよつと、何、あれ。」

再びサンジェルミが声を上げた。が、それは先程までの感情的なものではなく低く、静かでしかし震えていた。

ただならぬ様子にレイが双眼鏡を奪い返すと、土方の周りに土煙とは別の濃い霧が漂い始めていた。

天候からして霧では無いことは確かである。

観察を続けると霧の中から徐々に形が浮かび上がり始め、やがてはつきりと見て取れるようになった。

それは紛れもなく人であった。無数の人の顔が霧の中から現れては消え、現れては消える。嘆き、あるいは怒りの表情を刻んだ無数のそれは何かを訴えるかのように口を動かしている。

が、肉体の無い彼らの声は音にならず、表情だけが声なき声を物語っていた。

信長が豊久に連絡を入れるが、豊久からの応答は無い。

そのうち顔だけだった霧は次第に首、胴体、腕が形作られていき、やがて五人の剣士となると豊久に斬りかかった。

豊久は咄嗟に隣の建物に退避するが躲しきれず、剣先が頬を掠める。

レイは双眼鏡を下ろすと努めて平静に進言した。

「信さん！射撃の許可を、援護しないと。」

「ダメだ、豊に当たる！」

「合図はお豊さんに。彼が建物に飛び込むのと同時に撃ってください」

い。」

「くああくそつ！おう伝令、今言った通り伝えろ！」

信長からの伝令を聞いて、豊久は「おう」とだけ答えた。

出来れば自分一人で討ち取りたかったが、実体の無い剣士の相手をするのは難儀であった。

豊久は土方を挑発しつつ、悟られぬよう彼の立つ位置を調節した。

種子島の射程圏内に戻り、土方が再び剣士を呼び出した時、豊久は吼え、すぐさま建物に飛び込んだ。

またも挑発かと忿怒に染まった土方が一步踏み出す。が、豊久の後方で待ち構えていた銃兵達の一斉射撃に剣士達は霧散した。実体の無い彼らに弾の勢いは止まらず、そのまま土方を撃ち抜く。

廃棄物となった彼の動体視力は剣士を霧散させた刹那弾を認識し、上体を逸らす事で急所への直撃を避け、即死は免れた。

それでも無数の弾丸が手足や胴体を掠め、肉を抉り取っていく。激痛と共に血が溢れ、服を滲ませる。

土方が流血し、膝をついたのを見て、レイは歓声と共に拳を握りしめた。

「やったーやりましたよ！廃棄物は殺せる、殺せるんだ！」

その声に視線を上げた土方は再び目前に現れた豊久とその背後に控える鉄砲隊を見つけ、憎悪を膨れ上がらせた。

「くおら信長！こいは俺の首級ぞ、手出しすんね！」

「何言ってるんですか、早い者勝ちですよ！悔しかったらさっさと首取って帰ってきてください！」

「こいはレイか。つたく、生意気言いよって……」

その声量でもって水晶を介さず直接怒鳴りつける豊久に、レイが負けじと言い返す。

信長では無くレイが応答したことに豊久は少し驚き、水を差された事に憤慨するもその口元は緩んでいた。

己を無視してやり取りをする二人に土方は迫り上がってきた血を吐き捨て、再び立ち上がる。

「貴様らに土道は無いのだな……。」

「はん？こいは合戦ぞ。首の搔き合いに道理なぞあらんど。使える手
えは何でん叩つ込まねば、相手に申し訳ばなかど。」

「島津、シイイマアアズウウー！」

微塵も悪びれぬ豊久に土方の怨嗟が爆発し、残滓となった靄が揺れ
る。

一連のやり取りを聞いていたオルミーヌは「もう聞いてらんない。」
と呆れ果て、豊久を無自覚に相手を怒らす天才と形容した。

その絶叫は豊久に負けず劣らずのものでレイ達の元まで響き、さす
がのサンジェルミの兵も冷や汗を流していた。

第二射の用意を済ませ、再び兵達が銃を構えたが信長が待ったをか
ける。

その隣には、庁舎内でオルミーヌと待機していた筈のハンニバルの
姿があった。

レイ達が豊久の合図を待つ間。

その背後ではハンニバルが再び奇行に走り、信長とサンジェルミを
混乱させていた。

しかし彼が木苺をまとめて潰す様子に信長は一閃を得、与一に命じ
て再度敵の動きを確認させた。

「たしかに敵勢は分散してバラバラに動いています。一見メチャメチャ
に見えますが」

「方向性があるな!?？」

「大きく迂回したりしてますが、多分その本営に向かっております
よ。」

「で、あるか。」

報告を受けた信長は敵の目的を悟り、会心の笑みを浮かべた。

「敵の腹あ読めた。奴らはこの国を奪る事を諦めておらんのだ。目的
は切り替わっておらん。此の期に及んで変えておらん。固執してい
る。全員、この庁舎から出る！お豊はそのまま敵をこちらに近づけさ
せるな！オツパイヌ、すぐに来い！地図だ、この建物の地図持って
来い！」

敵将は戦鬪の合戦の玄人だが、帥の素人である。」

その頭の中には既に作戦が組みあがっており、援護射撃を終えるとレイとサンジェルミ、最低限の砲兵とドワーフにその場を任せて一旦庁舎内へと引き上げていった。

指揮官がいなくなつて兵達は困惑したが、銃の製作者でもあり勇猛且つ経験豊富な戦士でもあるドワーフの親方の一喝に役目を思い出し、すぐに切り替えた。

親方は軍扇さながらに斧をふるい、片手には信長から渡された水晶を手に兵を指揮した。

その様にサンジェルミは「私の軍なんだけどな……。」と複雑な思いを抱きつつ、戦の采配を取る経験は無かつたため大人しく従つた。

初撃は完全に敵の不意を打ち、剣士毎土方を撃ち抜いた。

しかし仕留め切れず、却つて敵の戦意を焚きつけるものとなつた。

銃弾の雨を受け、一度は膝をつくも立ち上がる土方に兵達は慄くがレイの歓声に冷静さを取り戻す。

「やったーやりましたよー！廃棄物は殺せる、殺せるんだ！」

血が流れるつて事は生きてるつて事で、生きてるつて事は殺せるつて事です！」

無茶苦茶である。

が、今しがた超常的な存在を目にした彼らには、彼女の理屈は却つてすんなりと収まつた。

豊久から敵将を負傷させた事に対して不平の声を上がったが、豊久より先に一撃を喰らわせたと聞いて高揚と恩知らずな物言いに奮起しレイも負けじと言い返す。

その間にも彼女の手は装填に勤しんでいた。

続く第二射の用意を済ませ、構えの姿勢に入る。が、戻つてきた信長に撤退を命じられた。

怒り狂つた土方は激痛を物ともせず、豊久に斬りかかった。

剣筋は重く鋭く、一撃で豊久の大太刀を叩き割る。が怪我による衰えには逆らえず、その動きは次第に鈍つていった。

地面に建物に血筋が走る度容易く躲かれ、土方は苛立ちを募らせる。

失血も相俟って土方の動きは精細さを失い、豊久に掠りもしない。剣士達を呼び出そうにも先程の攻撃で蹴散らされたばかりな上、脳に血が行き届かず土方の集中力を欠いていたことも相俟って叶わない。

躲すばかりで自ら仕掛けぬ豊久に、土方は更に怒りを煮えたぎらせていた。

一方豊久は口惜しいと感じていた。

あれだけの銃弾を浴びせられて尚も奮い立ち、己に向かってくる土方に感服していた。

それ故に、彼をそうさせたのが自分では無かった事が悔しくてならなかった。

出来る事であればもう一度。今度は己一人で全快の彼と戦いたいと願った。

しかし同時にそれは叶わぬ事だと諦めていた。ならばせめて、信長の計略が果たされるその時まで、その健闘を最後まで見届けようというのが豊久の思いであった。

限界を迎えた土方の足が縛れる。

膝をつき剣を杖に体を支える土方に漸く豊久が脇差を抜き、土方は忿怒の形相で叫んだ。

「よくも俺達を、新選組を舐めやがって……！いつまでも飛んだり跳ねたり出来ると思うなよ！」

「俺は主を舐めた事なんど一度も無かど。戦場ち跳んでん跳ねでん、何でんするど。」

心底心外だと言わんばかりに豊久が返すと同時に、政庁舎から火の手が上がった。

無事果たされたのだと、理解した豊久は満面の笑みで見上げた。

信長の指示を受け、庁舎から退去した一同は周囲の建物に身を潜め、機を伺っていた。

間も無く裏通りから黒塗りの鎧を着た敵兵達が現れる。

いくつかの出入り口は馬車で塞がれており、身軽で機敏ではあるがオークのような腕力の無い彼らは周辺を散策し、ようやく見つけた出入り口に次々に中へと入っていった。

やがて彼らが完全に建物内に消えるのを確認すると、与一は一番に火矢を放った。

矢はまっすぐに庁舎の窓を通過し、廊下に放置された樽を貫く。と樽から周囲に巻かれた油へと引火した。一瞬にして炎が上がり、同時に油を伝って波の如く広がり建物を飲み込んでいく。

続けざまにエルフ達が火矢を放ち、窓から垂れ幕から掲旗から全てが炎に巻かれていく。

免れた兵士が畏だと叫びながら出口に向かおうとするが、彼らが出口を目前にした丁度その時、床から石の壁がせり上がり、退路を塞いだ。

熱く重い壁を見て破壊は無理だと悟るや、諦めの悪い彼らは窓を割って脱出を図る。

しかしそれも信長の計算のうちである。

破ると同時に外で待機していた鉄砲兵が群がる敵兵を蜂の巣にし、絶望へと追い込んだ。

やがて爆音と共に炎が窓を突き破り、黒煙が立ち上る。

その熱風と体の芯まで揺さぶる轟音に信長は身を震わせ、高笑いした。

「また、私の札がひどい事に使われている……!!?」

立ち上る黒煙を見上げて呆然とするオルミーヌの耳に遠くから「さすが、オルミーナさん!」とレイの声が届いたが、全く嬉しくなかった。

呆然と庁舎を見上げる土方に豊久は尚も言い詰める。

「信や与一は俺が大將ち言うたが、俺は一度もそがい思うた事は無か。

俺は所詮……俺は所詮功名餓鬼よ。義弘殿や親父殿になれん。じやつどん奴は違う。第六天魔王、織田前右府信長は違う!

俺が主相手にがまればすれば、その間を食らうて信が必ず潮目を変
える。その為なら、飛んでん跳ねでん、何でもするわい！」

疑心の色など微塵も無い真っ直ぐな瞳に射抜かれ、土方は四肢に力
が戻りつつあるのを感じていた。

豊久もまたそれを悟り、笑みを深くする。

「俺ら兵子が関ヶ原で死んでも、島津のお家はそれを糧に事を成す。
死んでも死なぬ、そいでん何でも出来る！」

「島津！」

「俺がここで死んでも、そいを糧に事は成す！碌でも無い事かも
しれんがの！」

「てめえら島津の、それが、俺達を殺しやがった！」

土方が再び剣を構え、靄が豊久へと迫り来る。

一際濃く現れたそれに豊久が迎え撃とうと飛び込むと、ドワーフの
親方が加勢に現れた。

「トヨ・ジジムサイ事、言つとるのお！」

横目で振り返り、彼の思惑を理解した豊久は臆する事なく地面を蹴
る。

「応！構わんど。撃てえ！俺ごと撃てえい！」

豊久の覚悟に親方は間髪入れずに応じた。

大筒から無数の礫と釘が放たれ、豊久共々剣士達を撃ち抜く。

その姿に土方が呆気にとられた刹那、豊久の膝が土方の顎を砕い
た。

土方の手から剣が離れる、がその闘志は尚も健在ですかさず拳を豊
久の顎に食らわせる。

「てめえは、本物のいかれた！」

「戦ちもんは、はなからいかれたもんで！」

（土方、土方、最早、潮である。織田信長、那須与一、島津豊久。倒さ
ねばならぬ。何としても何としても。）

突如土方の脳内に国王からの指令が下った。

元より彼の任務は威力偵察である。しかし完全に火の点いた土方
を止めるのは国王とて容易くない。

首をよこせと脇差を手に迫る豊久の顎に今度は膝を入れ、組み敷く。

そのまま彼の顔面を殴打するが、豊久も一切怯まず猛烈な勢いで殴り返した。

「死ね！きつさと死ね！」

「貴様こそ首おいでげやあ！」

最早子供の喧嘩である。

互いに組みつき打ちのめしあう二人に、加勢もできず手を拱いていた親方は同じく現れたはいいものの何もできず困惑した様子の剣士と目が合った。

「あ、ども。」

会釈され、つい親方も返してしまった。

(退けと、言っているのだ。私は。)

黒王の最後通牒に土方が唇を噛み締める。

と、その時一同の上空に一頭の竜が現れた。蛇のような頭と胴体に、強引に足と翼を足したような奇怪なそれに、思わず豊久も親方も意識が奪われた。

その隙に土方は靄を足場に竜へと飛び移る。

途端豊久は憤然と肩を怒らせ、叫んだ。

「降りち来い！こつからが戦の本尊だろうが！」

ようやくと日ノ本武士と戦ん出来たと思うたに、飛んで逃ぐるとは許せん。首ばもいじやるから降りてこい！」

清々しいほど無自覚な棚上げに土方は反論の言葉が喉まで出かけるが呑み込み、土方は騎手に「構うな、行け。」とだけ命じた。

竜が去り、見えなくなると豊久は勇ましく腕を組み直した。

「敗けた。が、勝った。」

それだけ言うのと気力を使い果たした彼は気絶し、そのまま地面へと倒れた。

大筒による出血と土方の火事場の馬鹿力で負った痛手は計り知れなく、豊久は親方の声にも応じず深い闇に意識を落としていくのだった。

第15話

15

ドワーフの親方に背負われ満身創痍で帰ってきた豊久を見て、誰もが言葉を失った。レイも危うく銃を落としかけたが、すかさずエルフと与一を呼び、彼らが合流するまでの間出来る限り治療に励んだ。

が、首都潜入のため持ち込まれた物資は最低限しか無く、庁舎を焼く際に運び出しきれず殆どを失っていた。精々血を拭って破いた服を包帯がわりに充てがう程度しか出来ない。

その間に信長は近隣の医療施設の位置を確認し、兵士に担架を作らせる。

結局与一達が到着するまでレイは呼吸と脈拍を確かめ続けながら、ひたすら豊久の生命力に縋るしかなかった。

多大な被害を齎しはしたが首都奪取は成功した。

市街地の三割が焼け政庁舎は完全に廃墟と化したものの、豊久を除いた漂流者側の損害はほとんど無傷と言ってよかった。

サンジェルミは目論見が外れた上、首都の惨状と敵よりも味方による被害の方が甚大であった事に怒り心頭であったが他に選択肢が無かった事は理解していたため、信長に怒りをぶつけるだけで溜飲を下げた。

豊久も本人の素質なのか与一とエルフの治療のおかげなのか、碌な医療設備も無い中ですぐに回復の兆しが現れた。一同は安堵し、同時にドワーフ以上の頑丈さに呆れた。しかし尚もレイは気が気でなかった。

豊久の負傷はたしかにレイを動揺させた。あの熱いくらいだった手が冷たく、顔から血の気が失せていたのを見た時は肝が冷えた。と同時に、心のどこかで彼は死なないと思いついていた自分に気づかさされた。

初対面こそ、死にかけの体であったがすぐに強靱な回復力を見せ、幾度と無く彼の勇猛さを目の当たりにし、死線を易々と飛び越える様を間近で見た。

現実離れた、御伽噺の主人公のような彼の働きぶりにレイはすっかり魅せられ、それ故に失念していた。否、そうであつてほしいと願っていた。

喪失の恐怖を思い出し、己の浅はかさへの自己嫌悪に陥ったレイは以前の快活さを失った。

氣を利かせた信長が焼け残った書類整理の作業を頼んだり、与一が逐一豊久の様子を報告に来たりしたが、レイの心は沈んだままだった。

氣を使わせてしまった事を恥じ、今後の展望に向けて気持ちを切り替えようとしたが叶わず、逃げるように仕事に没頭した。

信長から頼まれた仕事の他、負傷者の手当てや食事の世話、繕い物、宿营地の清掃や鉄砲の手入れなど出来る事があれば休まず働いた。

しかしやはり、常に心ここに在らずといった様子でエルフが比較的状态の良い書籍が見つかったと言っても彼女の心は動かず、事務的に一覧に記すだけであった。

その間、レイは見舞いにも訪れなかった。

何度与一から快調に向かっていると聞いても、何度部屋の前まで行っても豊久の冷えた手と青ざめた顔を思い出してしまい、扉を開けることが出来なかった。

豊久が意識を取り戻すまで、そう時間はかからなかったがレイにはひたすら長く感じられた。

その夜レイは夢を見た。

この世界に来たばかりの頃の夢だった。

当時はまだ信長も与一もおらず、レイは一人で廃城で過ごしていた。マーシャとマルクに出会い、孤独では無かったが彼等も毎日来てくれるわけではなく、また日が暮れる前にはいつも帰ってしまうため夜になるとレイは一人だった。

明日も彼らは来てくれるのだろうか。明後日は。一週間後は。一ヶ月後は。

言葉の通じないもどかしさも合わさって不安ばかりが募り、毎夜そ

れから逃れるように目を閉じた。

これが夢であればいいと願い、朝、石畳の冷たさに目覚め一人ぼっちの廃城で絶望する。

それがレイの日常だった。

付き添いをしていたエルフから意識が戻ったと知らせが入り、レイは仕事を放り出して豊久の元へと走った。

途中与一とすれ違い危うく彼を転ばせるところだったが無視し、そのまま豊久のいる部屋へと駆け込んだ。

そして彼はいた。寝台の上で上体を起こして驚いた表情でレイを見ていた。

「なんじゃ、騒がしかのう。」

頭から爪先まで包帯で覆われていて、一見誰かわからぬ様相であったが紛れもない豊久の声であった。

当然顔色は何えなかったが包帯越しにもその表情はありありと伝わった。

以前と変わらぬ声の調子にレイは安堵すると同時に全身から力が抜けていくのを感じ、その表情を崩した。

「あははははは！・ミイラだミイラ！あははははははは！」

突如自分を指差し笑い出したレイに、豊久は何が何だかわからず目を丸くした。

腹を抱えて笑い転げていたレイは次第に足が震え出し、立っていられなくなつて壁に体を預ける。

「あははははははは！・くっふふふふふふ、ふひ、うひひ、くーつくくくくく！」

壁を叩いて縋り付くがやがて支えきれなくなり、その場に崩れる。

そのまま床にへたり込むと流石に咳き込んで俯いたが、数秒後止んだかと思うとまた笑い出した。

「何しに来たんじゃ、お主。」

呆れて豊久が声をかけるが返答は無い。

騒ぎを聞きつけ、駆けつけた与一やエルフが何事かと問うが当然豊

久には見当もつかず「レイがイかれた。」とだけ言った。

「ど、どうしたんですかレイさん。とりあえず立つてください。」

「あはははは！だって与一くん、あれ見てくださいよ！ミイラですよミイラ！インディ？ハムナプトラ？ザ・マミー？ハロウィーンはまだ先ですよ、あははははは！」

手を貸そうとする与一の裾を掴み、尚を笑い続けるレイ。

呆気にとられていた豊久も人の顔を見るなり笑い出したレイに段々腹ただしさを覚え、エルフ達に近くに連れてくるよう言いつけた。

両脇をエルフに抱え込まれ、大した抵抗もせず引きずられたレイはそのまま豊久の目の前まで来るとその側頭部に拳骨を食らった。

「あははははははがっ！いったあ、何するんですかもう！あははははははは！」

「やかましいわ！こちとら怪我人やぞ、静かにせんか！」

「だって、ぶふっ、無茶言わないでくださいよ。ぶぶぶ。」

目尻に涙を浮かべつつ吹き出すレイに豊久が再度拳を落とすと「ぎゃん！」と悲鳴を上げて、しばし痛み悶える。

がやはり止まらず、無駄だと悟った豊久は追い出すよう告げた。

その間も笑い止まらず、声は廊下に反響し建物中に響き渡った。

「……つたく騒がしか女ぞ。おい与一、何ニヤついとるんじや、気色悪い。」

「んー？」

扉が閉められ、レイの声が遠のいていくのと聞きながらふと豊久は与一が薄っすらと笑みを浮かべていることに気づいた。

元々愛想の良い彼は常に笑みを湛えているような節があったが、今回のそれは明らかに違う。

しかし与一は意味深に微笑むばかりで豊久の問いには答えず、「薬とご飯持ってきますね。」とだけ言ってさっさと部屋を後にした。

誰よりも目端が利く与一は気づいていた。レイの涙が笑い泣きのそれでも、痛みからくるものでもなかった事に。

しかしそれを告げる気はなかった。今はまだ本人すら知らないそ

れを知った独占欲と充足感を噛み締めていたかった。

一人残された豊久はさっぱりわからん、と首を傾げ再び寝台に背を預けた。

豊久の復活と同時にレイも活力を取り戻した。

以前のような無茶な仕事はしなくなったが、精力的に取り組んでいた。

案じていた信長や与一は勿論、彼女に感化され不安げだった兵士達も活気を取り戻し、次の戦いに向けて支度に勤しんだ。

信長とサンジェルミが評議会議員の資産を没収し、国中に散らばったオルテの軍の対応や国交について策を弄している間、レイは廃棄物や彼らが率いている化け物の情報を改めて見直していた。

首都の国立図書館やサンジェルミの蔵書、オルミーンを介して十月機関の協力を得、過去の廃棄物や彼らとの戦い、化け物の生態や攻略方法などひたすら資料を集めた。

何百年、何千年の間この世界の人間は廃棄物や化け物達と戦い、そして勝利してきたのだ。

彼らが積み重ねた知恵と経験は決して無駄では無い、と少なくとも自分達よりはずっと詳しいと信じていた。

流星にレイ一人では到底手に余るため、サンジェルミの伝手で人を紹介してもらい協力を得た。

彼らとの初対面時、召集された一同を前に簡単な自己紹介を済ますとレイは続けて言った。

「ご存知の通り、私は漂流者です。世界を救う、などと言われていますが……そもそも私はこの世界の事すら何も知りません。ですから教えてください。この国であなた達が成し遂げたものを。あなた方の父祖が切り開き、積み重ねてきたものを。あなた方の力を貸してください。」

噂の漂流者の元で働かされると聞いて怯えていた彼らはまず、レイの佇まいに意表を突かれた。

異世界より来たる、人ならざる者。自分達より優れた技術や知識を

齋らし世界を救うが同時に災厄の芽とも成り得る畏敬の存在。

しかし目の前に現れたのはどこにでもいそうな、ともすればこの国でもありふれた女のそれであった。

続いて彼女から発された内容に耳を疑った。

つい先日首都に篡奪し、その脅威の力でもって黒王軍を殲滅してみせた彼らが自分達の助けを求めているという事実が信じられなかった。

同時に彼らは恐怖に隠れていた矜持がむくむくと頭をもたげてくるのを感じた。

知識人である彼らは漂流者達の持つ知識や知恵に敬意と憧憬、そして嫉妬心を覚えていた。

漂流者の文明や技術をいくら吸収し、真似しようとも彼らには決して届かなかった。

追いついたと思えばとうの昔に通り過ぎた過程であったり、それらを根底から覆したりと遙か先を行く存在であった。

その彼らが自分達に協力を求めている。

この事実は彼らの自尊心を満たし、漂流者に協力する十分な理由となった。

これが功を奏し、レイと彼らの間に妙なわだかまりや距離感が生まれることはなかった。

またレイの好奇心の旺盛さは彼らと相性が良く、彼らの関係も研究の成果も良好なものへと繋がっていった。

レイが本調子を取り戻した翌日、突然信長が地元の有力者を集めて演説をすると言いだした。

日程や場所、呼び出す人物も既に決定し、後は準備を残すのみとなり、レイもそれに駆り出されていた。

当初レイは資料の精査に専念する予定だったが派遣された人員がレイより遥かに優秀で、レイは速攻で「これ私いない方が捗るな。」と判断し、今は殆ど彼らに任せて報告を待っている状態であった。

銃の修練や弾帯等装備品の改良、繕い物の修繕等する事はあった

が、大した量ではなかった。

つまり彼女は暇を持て余しており、そこに信長が話を持ちかけてきたのだ。

当然レイは乗った。信長と膝を交え、舞台の配置や衣装や演出などで大いに盛り上がった。

サンジェルミとオルミーヌが渋い顔をしていたが、二人は歯牙にもかけなかった。

前日の夜も遅くまで演習し本番当日、広間には予定通り大勢の群衆が集められた。

皆、まだ見ぬ漂流者を恐れ、口々に噂している。

影から様子を見ていたレイはオルミーヌとサンジェルミの前口上の後、エルフ達に合図を送り、広間の灯りを落とさせた。

俄かに視界を奪われた事に一同はどよめき、一層喧騒が大きくなるが次第に小さくなっていきやがて誰もが口を閉ざす。

室内が静寂に満たされ、恐怖と緊張感が最高潮に達するのを見計らい、信長は姿を現した。

広間の奥へと続く入り口の周りに明かりが点り、信長の影が映し出される。同時に煙幕が焚かれ、ドワーフの演奏する低く力強い法螺貝の音に促されて信長はゆっくりと前へ出る。

続けざまに雄大な太鼓の音がゆっくりと響き、それは鳴らす度に徐々に速度を上げていった。

それに合わせて明かりが壁や天井を舐めるように移動し、信長が部屋に入ると同時に曲調が変化し明かりが一斉に信長の姿を照らし出した。

太鼓と笛の音が一際高く、強くなる。それに呼応するように信長は見得を切った。

「我こそは第六天魔王、織田前右府信長である。我らが主『鬼島津』豊久ををを代表して、主らに申付けることがある！」

音と煙と光、そして信長の形相に有力者達は驚愕し、言葉を失った。

声も出せず、じつと信長を見据えて驚き、震え上がっている。

その様子に信長は満足し、続きを述べようとしたが恐怖に打ち震え

ながらも一人の男が声を上げ、遮られた。

「あろう、漂流者様。」

「なんだ。第六天魔王様と呼べい。」

「第六なんとかさま。そちらの方がトヨヒサ様なんでしょうか……？」

男に背後を指され、振り返るとそこにはまさしく豊久の姿があった。

空腹に目を覚ましたものの、まだ目が覚めきっていない彼は半ば無意識に部屋を出て建物内を徘徊していたのだ。

全身を包帯で覆い、幽鬼の如くにじり寄る豊久に有力者達は完全に恐れ入るが、慌てふためくサンジェルミと信長の様子に冷静さを取り戻した。

「あ、あの恐ろしげな人が、主様ですか……？」

「う、うん。そう、そうですあいつが、変な鬼さんです。」

動揺のあまり信長も演技を忘れ、そうしている内にも豊久は広間内を「めし、めし。」と言いながら徘徊する。

「どうすんの、ビビるの通り越してドン引きじゃないの！」

「どっどうすべどうすべ！」

「何も考えてないんですか！」

「オルミオツパイ、お前みんなにオツパイ見せて間を持たせろよ！」

「バカじゃないの!?!？」

「与一ツ！早くあいつなんとかしろー！」

「こんなんで黒王に勝てんのか!?!？」

想定外の事故に信長達も混乱し、とうとう収拾がつかなくなってしまう。

影から一部始終を見ていたレイは、それなりに時間と手間を費やした演説が大失敗に終わった上、原因が原因なだけに怒る気すら湧かず脱力し、その場に崩れ落ちた。

第16話

16

豊久の部屋に向かう途中、レイは台所の前を通り過ぎようとして彼が戸棚を漁っている姿を見つけた。

「また抜け出したんですか。」

「暇で死ぬる。あと腹減った。」

干し肉に手を伸ばそうとする手を軽く叩いて皿ごと避難させれば、豊久は手を引つ込めて不服そうに上目遣いでレイを見た。

「まだ固形物はやめた方がいいですよ。」

「粥ばかりで飽いた。肉が食いたい。」

「……ちよつと待つててください。何か用意しますから。」

豊久に座るよう促し、レイは戸棚を漁ると少しして温めたアーモンドミルクに蜂蜜を加えたものを用意した。

豊久はその色に嫌な記憶を呼び起こされ、露骨に顔をしかめる。

まだ廃城にいた頃。エルフ達が豊久達に感謝と恭順の意を示すため、ささやかな宴を催したことがあった。

元々貧しい村だったこともあって内容は豪華とは言い難かったが、彼らの心尽くしに敬意を払い、丁重に頂いた。

しかしその中に信長、与一は勿論豊久ですら受け入れがたいものがあった。

山羊乳である。

日本において乳製品が広く一般化したのは明治以降であり、当然彼らの時代にその習慣は無かった。

古代や彼らの時代の前後にも飲用されたという記録は残っているが、常用する物ではなく薬用や度胸試し等に用いられる物といった趣が強かった。

エルフ達の手前拒絶するわけにもいかず、されど決意もつきかねる。

誰もが躊躇い手を出さぬ中、レイは真っ先に口をつけた。

「あ、おいしい。さっぱりしていいですね、これ。」

レイもまた山羊乳を飲むのは初めてだったが、牛乳で慣れていたため三人ほど忌避感は無く寧ろ好奇心が勝ったのだ。

平然と二口目で一息に飲み干す姿に驚嘆し、同時に悔しくなっけけと三人も手を伸ばす。

当初は慣れぬ風味に戸惑ったが、レイのいうとおり後味が良く、舌に残る微かな甘味は悪くなかった。

一度飲んでしまえば忌避感の薄れ、気を良くした三人は勧められるがまま飲み進め、後日仲良く腹を下した。レイを除いて。

閑話休題。

忌々しい恥辱の記憶に鼻に皺を寄せ睨みつける豊久にレイは概ね察しがついて誤解を解く。

「山羊じゃなくてアーモンド……豆乳みたいなものです。蜂蜜多めに入れたんで、飲みやすくなってると思います。」

そう言って渡せば、山羊とは違う香りに警戒心を和げる。

少し匂いを嗅いでから軽く口をつけ、二口目で一気に流し込んだ。

「おかわり。」

「はいはい。」

空のカップを差し出され、鍋に残った分を入れてやれば今度は一口で飲みきった。満腹には至らないが、腹の虫はまぎれた様子であった。

豊久が落ち着いたのを見計らい、レイは本題を切り出す。彼女の目的は土方の情報を集める事であった。

意識が戻った後も与一の判断で面会が制限され、今日ようやく許可を得られたのだ。

既にドワーフの親方の方からの聞き取りは済ませ、まとめた物を提出している。後は豊久を残すのみであった。

レイは聞き出した情報を紙にまとめつつ、脳内でドワーフの親方の話と統合し考察していた。

(数は一度に五人以上、召喚から消えるまでの時間はそう長くない。呼び出すのに時間がかかる、一度呼び出すとまた再召喚するのに時間

がいる。剣士がこちらに向かつてこなかった点といい、建物に入ったお豊さんを襲わなかった点といい、おそらく召喚したり使役したりできる範囲はさほど広くないか、土方の認識外だと襲えないか……。親方の話を聞くに意思があるっぽいから形を真似ただけじゃなくて、性格もあるのか本物の幽霊ってことなのか……。つか竜騎兵とかまじでいるのかー、偵察用ならまだしもカルネアデスを落とすようなのだと……。いやー無理っしょ。バリスタや投石機で倒した、なんて話もあるけど碌に動けない砲台なんて寧ろ良いのでしかないし、こつちも空を飛ぶ方法を……。そういや晴明さんが飛行機乗りの人がいるって言ってたけど、どうなったんだろう？ 仮に見つかったとしても数は期待できないだろうし、今からじゃ作るのも乗れるようにするのも当分先だろうし……。グービンネンにグリフォン兵貸してもらおう方がまだ……。あれ、そもそも竜がいるなら、なんで最初からそれで攻めてこなかったんだろ？

「楽しそうじゃの。」

「はい？ あ、すみません。つい……。」

つい豊久を放置して思案に耽ってしまった事を詫びると豊久は頬杖をついて「よか」と欠伸交じりに応えた。

回復しているとはいえ、まだ体力は戻っていない。

消化器官を刺激され、そちらに血が回った豊久はうつらうつらと船を漕いでいた。

「ほら、部屋に戻りますよ。立てますか？」

「ん。」

促せば豊久も眠気には勝てぬと素直に立ち上がった。

その足取りは既に覚束なく、目も半ば閉じかけている。

仕方なしにレイが手を取って背中に手を回し、部屋まで誘導すると豊久はそのまま寝台へ潜り込んだ。

布団に潜るなり軀をかき始めた豊久を呆れつつ見下ろし、ふとレイは己の手を見た。

手にはまだ豊久の体温が残っていた。

以前ほどではなかったが、それでも意識を失っていた時よりよほど

暖かく、強かった。

レイは小さく笑みを浮かべ、拳を握りしめると音を立てないよう部屋を後にし、自室へと向かった。

豊久の供述をまとめた物を職員に提出し、調査の済んだ化け物の報告を受けていたレイの元へサンジェルミの使いの者が現れた。

彼らはレイを別室に連れて行くと、グービンネンとの会議の決定とレイの出席が決定した事を伝えた。会議の決定はさておき、自分が出席する理由が解せず詳しく尋ねると種子島を商談に使うため、その実演に参加しろという話であった。レイが納得し、承諾すると彼らは有無を言わず全身を測定し始めた。抵抗する間も無く全身くまなく調べ尽くされ、本人ですら知らない、知りたくなかった数値を白日の元に晒され、終わる頃にはレイはすっかり意気消沈していた。

傷心と共に戻ってきたレイに、職員はその日一日優しかった。

後日、首都ヴェルリナ郊外。演習場にて無事講和会議を終えたグービンネン商業ギルド連合代表を招いて、種子島の公開演習が行われた。

演者は信長率いるサンジェルミの私兵からなる鉄砲衆である。首都篡奪後も連日訓練は欠かさなかったが、観衆の元行われるのは初めてであった。

また、その相手がグービンネン連合ギルド序列筆頭「放蕩」「なれど出来息子」バンゼルマシynchayロック八世とあつては流石の彼らも緊張の色が見える。

クーデター時と同じ揃いの衣装に身を包み、鍛え抜かれた体を誇らしげに見せつける彼らの中にやはりレイはいた。

行進では旗手として先頭を任せられ、続く実演では射手も勤めた。

当然彼らと衣装は異なるが前回と違い、彼らの中においても違和感の無い物に身を包んでいる。

衣装を考案したのはサンジェルミであった。

演習の決定で信長が当然のようにレイも参加させると言い出したため、サンジェルミは前回の決意を思い出し、慌てて今回の演習は自

分が担当すると宣言したのだ。

自分の兵に女が混じるのは本意ではなかったが、信長の考えにも同意できる部分がある。サンジェルミとしては譲歩のつもりだったのだが、この時を待ちわびていた信長は憤慨し、会議は紛糾した。

結局衣装や旗の設計はサンジェルミが、それ以外は信長が担当すると言う話で決着がついた。

レイの衣装は男衆を基礎に両世界の戦女神を題材にしつつ、随所に東洋的な要素を盛り込んだ異国情緒溢れる仕上がりのものである。

男衆の中で唯一の女ということもあって、女性性を際立たせる造りではあるが下品になりすぎず派手すぎず、ほどよく互いを引き立てる物に設計されていた。

サンジェルミが衣装を担当すると聞いてレイは不安しかなかったが、出来上がった物を見て胸を撫で下ろした。

しかしそれは束の間の平穏であった。

衣装に合わせて化粧も施されているが、主流のそれや戦化粧でもなく舞台や歌劇のそれに近い。最早原型を留めない程盛られており、見物に来たエルフやドワーフは勿論、与一や豊久ですらそうと聞かされても信じられない程であった。

豊久など「なんじゃあいつ、妖だったのか？」などと聞こえよがしに言う始末である。

羞恥心で爆発寸前だった所に豊久の悪気の無い一言が加わり、兵士達はレイが事故を起こさないか終始危惧していたがレイは的に豊久の姿を重ねてやり過ごし、無事演習は終了した。

閉会の挨拶も終え、早々に控え室に向かおうとするレイの肩をサンジェルミの配下が捕まえる。

「どこに行く気。レイ。」

「……控え室で、着替えようかと。」

「あらダメよ。バンゼルマシンがあなたに興味を持ってね、是非お話ししたいって。」

「着替えた後じゃダメですか？」

「ダメよ。」

賓客の希望を断るわけにもいかず、レイは折衷案を出すが無下にされ、バンゼルマシンの元へと連行された。

レイがちんどん屋染みた仮装になったのには理由があった。無論、サンジェルミの趣味や兵士達と並んで埋没しないため、というのもあるが、ついでにバンゼルマシンの気を削ぐ意味もあった。

異名の通り、彼は女に目がなかった。その女性遍歴は数知れず、全員揃いも揃って美女であったが好き嫌いをした事は無い。単に彼の肩書きと血筋故に近づく女性もその手の者が多いというだけである。

同時に彼は優秀な商人であった。それ故にサンジェルミはレイが彼に目をつけられる事を予想していた。彼女がバンゼルマシンの元へ行ってもサンジェルミ達には何の損害も無い。が渡す理由も無い。何よりサンジェルミは彼の事が顔以外大嫌いだった。故にレイに似合わない仮装をさせた。彼の意地汚さを熟知しているからこそ、彼女には何かあると思わせたかった。

レイは憂鬱であった。羞恥心もあったが、前もってサンジェルミから強く釘を刺され、彼がレイにとって苦手な人種だと察知していたからである。自分が相手にされるとは毛頭思っていないが自分は漂流者であり、彼は商人である。警戒は怠らなかったがその笑顔を前にしてレイは敗北を悟った。

与一やエルフの天性のそれに慣れ、高を括っていたレイの心は見事にへし折られた。

自分の顔が他人にどう作用するか自覚のある者の表情。それは時として無意識のそれを凌駕する威力を発するのだと、レイは悟った。「お初にお目にかかります。シャイロック商会及びシャイロック銀行大番頭、バンゼルマシン・シャイロック八世と申します。レイさん、とお呼びしても？」

「あっはい。」

「先ほどの銃、と申しましたか。火器の類については我々も取り扱っておりますが、我々のものとは大夫趣が異なる……」

「あっはい。」

遠巻きに様子を伺っていたサンジェルミは「まー、猫かぶっちゃつ

て！」と吐き捨て、信長は心配半分と面白半分ではらはらしていた。「ご存知かと思いますがこの度、我々が貴方方を援助する運びとなりまして。貴方からも何かご要望があれば是非にと思ひまして。」

「要望、要望ですか……あつー！そうだ、あの、要望というより質問なんです、そちらの商会で扱っている火器について、その、お答えできなければそれで構いませんので……。」

「……内容にもよりますが、私に答えられることであれば。」

まさかの要望にバンゼルマシンは声を低くして軽く膝を曲げるとレイも意図を察し、口に手を当て耳元で囁いた。

「そちらの商会で扱っている油って、もしかして、ギリシア火ですか。」
「ギリシアびび？」

「えっと、私の世界でずっと昔に使われていた火薬でして、ローマの火とか海の火、戦いの火、液化、作られた火薬、メディアアの火、ナフサ、とも呼ばれていて、海戦でもつばら使われていたと言われてまして、もしかしたらこちらに伝わっているのかと思ひまして……。」

「……その名称に覚えがないが、ちなみに材料は？」

「それがその、未だ不明でして……石油を元にしていいると言うのが主流なんですけど……すみません、これじゃ参考になりませんよね。」

見るからに気落ちするレイにバンゼルマシンは人好きのしそうな笑みをたたえた。

「よろしければ、場所を変えて話しませんか？詳しく聞けば、お力になれるかもしれません。それにその姿では貴方も落ち着かないでしょうし。」

「はい、是非！あ、でも一応信さん達にも断っておきますね。」

胸の前で手を組んで破顔するレイにバンゼルマシンは顔には出さずとも訝しんでいた。この女、幾ら何でもチョロすぎる、と。好奇心に目を輝かせ、先程までの警戒がすっかり失せている。ただの馬鹿なのか、自分を油断させるための罠なのか。考えあぐねている内にレイは信長とサンジェルミの元へ走っていく。バンゼルマシンの配下も案じるが彼は危険性は無いと確信していた。今自分に傷一つでも着けば、困るのはオルテ側である。サンジェルミや信長の反応を見る

に、彼らぐるみの計画では無いことは察せられる。

ならば彼女の独断か。果たして彼女の価値は如何程か。とバンゼルマシンは一瞬冷酷な商人としての眼差しを向けたがほんの一瞬のこと、傍の配下を除いて気づく者はいなかった。

場所と姿を改め、レイと落ち合ったバンゼルマシンは落胆していた。

サンジェルミがあれ程隠したがった女がどれほどのものかと期待していたからだ。

しかし今日の前にいる女は見た目も中身も凡庸そのもので、彼の期待に応えるものではなかった。つまり、サンジェルミに一杯食わされたのだ。時は金なり。時間も気力も無駄にし、少々苛立っていた彼は話が終わると早々に会話を切り上げようとした。

しかしふと、このまま返すのは放蕩の異名を持つ自分には相応しく無いと思い直した。

それに自分達が優位であることに変わりはないが、サンジェルミの提案をそのまま呑んだ事も面白くない。彼は、ほんの瞬きの間、獰猛な笑みを浮かべると目の前の獲物を見定めた。

「ところでレイさんは我々が銃とは別の商売について、検討しているのをご存知ですか？」

「え、そうなんですか。初耳です。」

「そこで是非あなたにもご相談に乗っていただけたらと思ひまして。」
「でも、私、商いについてなんて知りませんよ。そういう事は信さんやサンジェルミ伯爵の方が……。」

「とんでもない。あなた方の発想は我々には無いものばかりです。是非」

「はあ、私に出来ることであれば……。」

「尤も」

徐に彼は恭しくレイの手を取った。

「個人的に援助することも、吝かでは無いが。」

そのあまりにも自然な動きにレイはそれが為されるまで気づかず、しばし放心していた。

他人がすると気障としか取られない仕草だったが、彼がすると恐ろしいほど絵になった。

日本人には馴染みの無い動作にレイは思わず素っ頓狂な声を上げる。顔を上げると同時に片目を瞑ってみせるバンゼルマシンにレイはようやく我に返った。

顔に熱が一気に集まっていくのを感じると同時にサンジェルミの警告を思い出す。

一方バンゼルマシンはわかりやす過ぎる程動揺しているレイに内心大笑いしていたが相変わらず人の良い笑みを浮かべていた。

以前多聞が驚いていたのを見て、試してみたのだがその反応は期待以上だった。

レイの手に力が入る。が、一瞬の躊躇いの後、再び脱力した。

瞬間その目に微かに殺意が灯ったのを見て、バンゼルマシンは淑やかに手を離す。

「失礼。あなた方の国では一般的では無いのでしたね、すっかり失念しておりました。」

「い、いえ。こちらこそ、変に驚いたりしてすみません……けど、私。その本当に商売とかわからないんで、その……」

口では平静を装うが後ずさりし胸元で手を握りしめるレイに彼は「それとも」と追い討ちをかける。

「もう心に決めた方がおいでで？」

「はい？」

「それは残念です。せめてもの慰めに、その幸福者の名を伺っても？ ああもしや、先程の方々の中に？ 失礼。野暮でしたね。失恋した哀れな男の戯言だと、思ってください。」

「へ？あ？え？」

予想外の言葉に妙な表情で固まるレイに、バンゼルマシンは勝手に話を終わらせると配下に命じて彼女を送りとどけさせた。

傍にはバンゼルマシンの配下しかいなかったが、それ以外の気配に彼は感づいていた。

早ければ今日明日には噂になっているだろう。精々恨むならサン

ジェルミを恨みたまえ、と冷酷な商人は哀れな女に一瞥をくれてやった。

翌日、バンゼルマシンの思惑通り、「レイがバンゼルマシンに求婚された。」だの「仲間達の中に思い人が。」という噂が蔓延した。

娯楽の無い彼らはそれをネタに散々揶揄い、レイはしばし居心地の悪い思いをする羽目になるのだが当然この時は知る由も無かった。

第17話

17

「それで、実のところどうなの?」

日課の銃の修練中、脈絡も無く切り出された話題にレイはまたか、と思いつつ返答した。

「どうって何がですか。」

「いやだわ、この子とぼけちゃって。いるんでしょ、好きな人。」

バンゼルマシンに解放されて間も無く。レイは彼のとんでもない置き土産に苦しめられていた。すれ違うエルフもドワーフも皆、ある者は愉悅に浸りまたある者は微笑ましげな視線をレイに投げかけてくる。最も付き合いの長い信長達ですら誤解だと理解していたが、否定するどころか面白がって煽ってくる始末である。

「そうかそうか、とうとうお前にもそんな相手が……なんなら俺が仲人してやろうか?」と信長に言われた時は、その髭を全部塗り取ってやろうかと思っただぐらいであった。

この件に関して、レイは特に否定も肯定もしなかった。否定したところで却って逆効果であることは目に見えており、どうせ一過性の物だと諦めてやりすぎせばそのうち皆飽きるだろうと見なしていたのだ。

が、甘かった。他人の色恋沙汰程面白い者は無い、特に娯楽に飢えていた彼らにとってそれは格好の餌であった。

レイが曖昧な態度を取れば取るほど話に尾ひれがつき、「バンゼルマシンに迫られ、一方的に振られた。」話はいつの間にか「レイがバンゼルマシンに求婚されたが仲間内に思い人がいるため断った。」という確定事項へと変わっていた。

レイはバンゼルマシンの笑顔を思い出しつつ、銃弾を発射し見事的のど真ん中を撃ち抜いてから答えた。

「いませんよ。そんな人。」

「また照れちゃって、この子は。いいじゃない、私達の仲でしょう?」
「いいわよね、恋って。何もかもが輝いて見えて。私も若い頃は

……。」

「またその話？よしなさいよ、今はこの子の話してるんだから。で、誰が好きなの？ノブノブさん？ヨイチきゅん？トヨトヨ？それとも、エルフの誰か？」

「エルフだったらやっぱりシヤラクんとか？それとも弟さんのどちらか？きやく逆紫の上〜！」

「あら、エルフだったらあの顔に傷のある子だと思っわ。エルフにしては野趣に溢れてて素敵よね〜！」

「もしかして、ドワーフとか！ほら、最近よく親方の所に顔を出してるでしょう？！」

「やだ老け専〜でもわかるわ〜、あのずんぐりむっくり体型と筋肉の組み合わせは素敵〜！それにお髭も柔らかかそうでいいわよね。」

「ちよつとあなた、それちよつと卑猥よ。」

テーバイ神聖隊は男同士のつがいの軍隊である。その性質のせいか、隊員は皆この手の話題に特に敏感であった。サンジェルミのように女性に敵対心を抱いておらず、また幾度となく訓練を共にし一度は死線をくぐり抜けてきた彼らはレイに対して友好的であった。

悪い人たちでは無い。寧ろ善良ではあるが、毎度毎度レイを出汁にして最終的に本人そっちのけで盛り上がるため、流石にウンザリしてくる。

声を低くしての内緒話は次第に姦しくなつて、隊長に怒鳴られ一度は霧散する。がしばらくすると今度は隊長を交えて大盛り上がりする。というのがここ最近の日常であった。

「結婚おめでとう、レイ。」

「おめでとー。」

ブルータス、お前もか。訓練後、昼食のため食堂に向かったレイは一同が会する中マーシヤとマルクに祝福され、顔を引きつらせた。

すかさず信長を見れば必死に笑いを堪えて震えながら食卓を叩いており、与一も「悪いですよ。」と言いつつその顔は吹き出しそうになっている。サンジェルミは済ました顔で茶を飲んでるがその手

は震えていた。シヤラは慌てて弟達を諫めてレイに頭を下げ、オルミーヌは気の毒そうなしかし好奇を孕んだ視線を投げかけてくる。唯一豊久だけが普段通りかと思いきや、真に受けた彼からは「よいやや子ば産めよ。」と激励された。

思わぬ伏兵にとうとう信長も与一もサンジエルミも耐えきれなくなり、吹き出す。この手の冗談を言わない豊久の爆弾発言に周囲は一斉にざわめき出し、「マジかよいつの間にな！」「誰の子だ、というか一体いつ。」と口々に噂する。

一際喧騒が大きくなりレイはおろか最早誰にも止められないと思われたその時。

与一の柏手がそれを止めた。

高く乾いたその音は一瞬で静寂を蘇らせ、当惑する彼らの視線を一身に浴びながら与一は起立するとレイに真つ直ぐ視線を投げかけた。

「おめでとう。」

と言って拍手する。

その音につられて一人、また一人と拍手が連なり食堂いっばいに歓声が溢れた。

「おめでとう、レイ。」

「おめつとさん。」

「おめでとう、レイさん」

「おめでとうございます。レイさん。」

「おめでとう、嬢ちゃん。」

「めでてえな、おい。」

「おめでとう！」

「おめでとう！」

「おめでとう。」

一部を除いた全員の心からの祝福の言葉にレイは最早否定する気力すら湧かず、ただ笑うしかなかった。

「で、どーなんだ。」

「はい？」

「だーかーらー、本当にいい人、いないのか？俺が取り持ってやるぞ、ん？」

「信さん、しつこい男は嫌われますよ。」

昼食後。新しい火器の試験のついでに既存の火器を火薬の量を変えて威力を試していた所、再び信長が持ち出した。

流星にオルミーヌから窘められたが、信長は半ば本気であった。彼らの時代、結婚は家同士が。位によってはその家が仕えている主家が決定する物であった。レイの場合、総大将である豊久が指示するべきであるが、彼は戦い以外では何の役にも立たないため必然的に自分が取りなす物だと信長は思っていた。

それにいずれ、漂流者の肩書きを目当てに彼女を狙う者が現れるのは目に見えている。バンゼルマシンのそれは火傷程度で済んだが、今度もそうとは限らない。

腕も立たず、政にも疎い彼女がそれに翻弄され、傷つく様を見るのは憚びない。ならば今のうちに適当な男を見繕って宛てがっておこうというのが、信長なりの思いやりであった。

しかし結婚は本人同士の同意に基づく物という認識が強く、一連の件で気が滅入っていたレイは理解に至らず、鬱陶しそうに彼を見るばかりであった。

周囲で準備するエルフもまだ言ってる、と半ば呆れてはいるが耳を時て離し立てる機会を伺っている。

「これだけいい男が選り取り見取りなんだ。一人くらい、好みの男がいるだろ。」

「いい男」に自分を数えている様子の信長にレイは「何言ってるんだこいつ。」と口にごそしないが露骨に顔に出した。信長を見、それからオルミーヌに視線で助けを求めたが、彼女は無言で首を横に振った。

何を言っても無駄と悟るとレイはしばし腕を組んで身近な男性陣の顔を思い浮かべた。

テーバイ神聖隊の言葉を思い出しつつ、一人一人の印象を確かめる。

信長は歳が父親ほども離れているため当然範囲外である。与一は

美男子で人当たりも良いが美形すぎて異性を通り越して美術品という認識に近い。豊久も顔も性格も申し分ないが彼は戦争以外に興味が無い上、犬を食べるのは戴けない。そもそも三人とも既婚者である。戦国の習いとしてはおかしくないが、現代を生きたレイには頭ではわかっていても受け入れ難い。サンジェルミ、テーバイ神聖隊は言わずもがな。調査員の面々は知り合ったばかりの上、そもそもレイに興味が無い。

それ以外となると、とまで考えてレイは一人だけ該当する人物に気づいた。

時間にして数秒。「あ。」と閃くと同時に、少し離れた場所で与一と共に火矢の試し打ちをしていたシヤラを指差した。

「シヤラクんですかね。」

「え?」

「はあ!?」

てつきり自分達三人の誰かかと思っていた信長は目を丸くし、オルミーヌも意外とばかりに驚く。

シヤラもまさかの指名に「え、俺!??なんで!??」と自分を指差して驚いている。

「えーだってシヤラクくん、リーダーシップありますし責任感あるし面倒見もいいし義理堅いし村長ですし顔も整ってて背も高くって最近一段と逞しくなりましたし……理想的では?」

「あー、たしかに。そう言われてみれば……文句のつけようが無いですわね。」

同性であるオルミーヌに同意を求めれば、顔を見合わせて頷いた。改めてシヤラを見ると彼は戸惑いの表情から一転、顔を赤くする。

信長も文句のつけようがなく、全くその通りと膝を叩いて笑う。

三人からのまさかの誉め殺しにシヤラは耳まで赤くなって俯き、周囲のエルフから肘で突かれた。

これに不満を抱いたのは与一であった。元々負けん気が強く、度々エルフに対抗心を抱いていた彼は同年代のシヤラより男として劣ると言われたようで面白くなかった。

競争心に燃える与一の目に射抜かれ、シヤラは怖気立つ。

「良かったですねえ、シヤラ殿。」

「は、はい……。」

口調は恐ろしいほど優しかったがその目は笑っていないかった。

ぞつとするほど美しい笑みにエルフ達は慄き、巻き込まれないようさりげなく距離を取ろうとして続いた言葉に足を止めた。

「それにエルフは長生きですからねー、どうせなら自分より長生きしてくれる人がいいですよ。」

そう語る横顔に皆、故郷に残した妻や恋人を、あるいはかつて父を見送った母を思い出した。

彼女達もまた同じ事を思っていたのだろうか、と。

レイの口振りは普段通りの軽い物だった。しかしその表情に影が差して見えるのは、果たして煤のせいか自分の心がそうさせるのだろうか、と。

切実な願いに誰もが押し黙る。

そうと知らないレイは突如静まり返った周囲にエルフと人間の関係はまだ改善されていない事を思い出し、慌てて補足した。

「あ、でも実際シヤラクんとどうこうなりたいて気持ちは全く無いですよ！あくまで理想的な相手だなんてだけで、ええ。それにシヤラクん、エルフの女の子からも人気でしょうし、私、彼女達を敵に回す気無いですし、そもそもエルフと人間じゃ寿命も価値観も全然違いますし……ですから安心して下さいね、シヤラクん！」

自分に気があるのかと思いかけた刹那、即座に自信満々に親指を立ててまで断言され、シヤラは「あっはい。」と頷くしかなかった。

その後、レイの一言が信長達の琴線に触れたのか再び話題になることは無く、試験はまずまずの成果を出して終えた。

後曰。

「兄ちゃん、レイに振られたんだって？」

「元氣出しなよ、女なんて星の数程いるよ。」

何故かシヤラがレイに振られた事になっており、今度は彼がそのネタで暫く揶揄われる事になるのだがシヤラ自身は勿論レイも知る由

もなかつた。

第18話

18

オルミーヌの元に一通の文書が届いた。送り主は十月機関の導士の一人、つい先日斥候として北壁に潜入した人物である。

レイが出来る限り、廃棄物に関する情報を寄越すよう頼んだ事もあって、導士が北壁を脱した後直ちに送るよう晴明に命じたのだ。

先んじて内容を確認したオルミーヌは、すぐにレイだけでなく信長達にも報せた方が良くと判断し、水晶越しに招集を掛けた。

オルミーヌの呼び出しに応じたのは信長とサンジェルミ、そしてレイだけであった。豊久、与一、ハンニバルは水晶を置いて街を出歩いており、オルミーヌが探しに出ようとしたが信長が制したため、一足先に彼らに伝えることにした。

斥候が知らせたのは、黒王軍の動向と目的、そしてその能力に関するものだった。

「人は賢すぎる。」

それが黒王が人類廃滅を掲げる理由だった。互いに殺しあうだけで無く、他の生命や星まで脅かす人類に絶望し、彼は人類の絶滅を決意した。そしてそうならない者、化け物達にとって代わらせ、永久に発展も前進もしない安寧の世界を作る事。黒王はそれを世界の救済と呼んだ。

その一步として、北壁では化け物達の文明化が進められていた。農耕、文字の発明、貨幣経済、奴隷制等。ついこの間まで原始的な奪い合いの生活しか知らなかった者達の急速な発展が確認されている。

黒王の動機の陳腐さにレイは興味を失いかけたが、化け物達の様子になると突然前のめりになった。その姿勢にオルミーヌは半ば呆れつつ、続けて黒王軍の軍勢についての報告に移った。

新たに巨人とケンタウロス、青銅竜が配下に加わった事。青銅竜は以前ジャンヌがかけられた浮腫の呪いにかけられ、地面に拘束され、生きた鉱山と成り果てている事。肉が巨人の装備や貨幣として利用されている事。そして新たに廃棄物として源義経が確認された事。

彼の能力はいまだ不明だが単純な戦力として決して侮れない事。

最後にオルミーヌは黒王の能力について、新たに二つ確認されたと話した。

食料を無尽蔵に増やす力と、あらゆる傷病を癒す力である。

どちらも実際に見たわけではなく化け物達の話を聞いたに過ぎなかった。が、周囲の街を襲っている様子も外部との交易の様子も無いにも関わらず、潤沢な物資に溢れていた事。傷病者の姿はおろか医療施設が一つも無かった事。何より実際に恩恵に預かった、その場で見たと口にする者の多さからほぼ間違いないと判断された。

黒王の能力に対して三者三様の反応を示し、特に「食料を無尽蔵に増やす力」に信長とサンジェルミは暫し啞然とした。

兵站の概念を崩すその能力は敵対する者にとつて悪夢でしかない。尾張でも異世界でもやりくりに苦心している信長は「そんなんこつちが欲しいわ!!？」と駄々っ子のように喚き散らし、サンジェルミは内心共感しつつもその様子に落ち着きを取り戻した。

「ドラゴンだの巨人だのケンタウロスだのが従うわけだわ。」

と、サンジェルミは投げやりに吐き捨てる。

どれもコボルトやオークとは比較にならない巨体の持ち主であり、大飯食らいである。

たとえ街を一つ落としたりとて、とても賄いきれない。貪食且つ獰猛な彼らが大人しく従っている理由を理解し、サンジェルミは納得した。

言葉や表情は落ち着き払っていたが、内心彼は冷や汗をかいていた。

世界の救済を望み、食料を無尽蔵に増やし、あらゆる傷病を治し、浮腫の呪いをかける事ができる人物。その人物にサンジェルミは一人だけ心当たりがあつた。

彼の予想が正しければ、今度の廃棄物はこれまでとは比べ物にならない。サンジェルミは横目でレイの様子を伺った。信長よりも遙か未来の人間である彼女ならば気づく筈だ。あるいは既に気づいている、と。

だがレイの関心は黒王の正体よりも、その行動の方に注がれていた。

「なんでわざわざ化け物に人間を襲わせるんでしょうね？」

「あん？」

「いや、好きだけ作れるんなら作れるだけ作って市場に流して、価格を暴落させる方がよっぽど効率的じゃないですか？」

戦うのも土地を奪うのもその後でいい、と付け加えるレイにサンジェルミは尤もだと訝しんだ。

これまでの言動から見ると黒王は多少の教養があるらしい。ならば直接戦うだけが戦争では無いことは知っている筈だ。

それにあちらにはラスプーチンがいる。彼ならばその異能あるいは口先でもって有力者を惑わし、市場に介入するなど容易い事だ。何よりも彼がそれを思いつかないとは、サンジェルミには考えられなかった。

「じゃあ」とオルミーヌが尋ねる。

「食べ物を増やせるのは、嘘って事ですか？」

「んー……実際大軍を養えてるんで、能力自体は本当なんじゃないですかね。となると、やっぱり何かしら制約があるんじゃないですか？」

「何よ、制約って。」

初めて聞く情報にサンジェルミは怪訝な視線を向け、レイは廃城での廃棄物との一件を説明した。

「で、晴明さんが言ってたんですよ。魔術も無条件じゃないって。」

土方の亡霊も彼の側を離れませんでしたし、ラスプーチンも私らには何も仕掛けてきませんでしたし、何か理由があるんじゃないかなと。」

「で、その何かって何よ。」

それがわかれば対抗策も取れ、うまくいけば逆手に取ることも出来る。

そんな期待からサンジェルミは声を上擦らせるが、レイの答えは「さあ？」という肩透かしなものだった。

実の所レイは黒王の能力に使用回数に制限があつたり術者に何らかの負担がかかるのでは思っていた。が、それはゲームや小説の常識でしかなく、現実にそれを当て嵌めるのは流石に浅はかでない上、魔術の魔の字もわからないレイにそれを判断する術も無い。よつて今のレイにはわからないと言うほかなかつた。

「肝心なところがわからないんじや、どうしようもないじやない！使えない子ねっ！」

「無茶言わないでくださいよ、こっちは向こうと違ってしがない一般人なんですから。」

期待を裏切られた反動からサンジェルミが感情を露わにして食つてかかる。レイも大男のオカマに至近距離で怒鳴られ、多少怯むが負けじと言い返した。更に激昂していくサンジェルミに信長が割つて入るが、それがレイを庇つたように見えますますサンジェルミの癩に触つた。

「何が一般人よ！あんたも漂流者でしょーが！漂流者の時点でもとなわけないじやない！」

「それ自分で言います？てか、そんなわけないじやないですか。ねえ、オルミー又さん？」

「えっ？あつ……はい、そう、ですな……？」

「ほら、ご覧なさい。」

唐突に巻き込まれ、つい気のない返事をしてしまったオルミー又をサンジェルミが得意げに顎で指すと、レイは落胆の眼差しを向けた。その視線に慌てて誤解を解こうとしたその時、水晶に再び通信が入つた。今度は晴明からだつた。

完全に不意をつかれたオルミー又は驚きのあまり「ひやいつ！！？」と素っ頓狂な声を出し、落としそうになりながらも何とか水晶を卓上に取り出した。その鬼気迫る声に冷静さを取り戻し、サンジェルミ達も何事かと振り返る。

それは遂に黒王軍が動き出した事を知らせるものだった。

信長達が出立してから、廃城は様変わりしていた。

簡易的な居留地でしかなかった城の周辺は建物が軒を連ね、最早町と言つて差し支えない。

住宅や家畜小屋、食料庫等の必要施設の他に硝土の集積地。弓矢の工房、火薬調合場は勿論、それらを運ぶ馬車荷馬の往還所、御者の宿に厩なども続々と立ち並び、壁が無いだけで城下町と言つても過言ではない。

十月機関やサンジェルミ伯の使い、グービンネンの商人が訪れるようになってからは益々勢いを増し、近々町を拡張する予定を立てていた。

それらを一手に担うミルズは以前よりも少しずつだが、エルフ達との関係が和らいでいる事に気付いた。

エルフ達はミルズに話しかける時以外は基本的にエルフ語だったが、業務中はオルテ語を使うようになった。名前を呼ばれる回数も増え、出される食事の量が増えた気がした。

が、いまだにエルフの女性陣すれ違ふと厳しい死線を向けられる。それに関してはもう諦めていたが、それなりに堪えた。

町の規模が大きくなるに連れて業務も比例して増えていく。更に帝都の信長からも業務を丸投げされ、流星に限界を迎えた頃。見計らったかのように帝都から二人、要員が送られた。ミルズと同年代の似た雰囲気を持つ青年達であった。

新たな人員も加わり、ますます賑やかさを増していく中。

ミルズは朝礼の後、共に働くエルフの一人から声を掛けられた。彼は通過する物資の管理を任されている一人だ。

「ミルズさん、また来ましたよ。」

「また、ですか。」

最早詳しく聞かなくても分かる。書物だ。

荷は火薬の材料を除けば殆どが廃城を通過していたがある日を境に、廃城宛の荷がいくつか届けられるようになった。

それらは全て書物であった。内容はどれもエルフに関するものであった。歴史、習俗、信仰、神話に御伽噺、若者向けの娯楽作品に献立から家庭の医学等々。オルテ国内で見つかったものもあれば、国外

で翻訳され流通していたものもあった。領主であるサンジェルミと広大な流通網を持つグービンネンがそれらを集めるのは容易い事であった。当初はこんな時に何をと呆れたが検品していたエルフの表情を見て考えを改めた。そして帝国が奪ったものの大きさを知った。報告に来たエルフはそれだけ言っただけ荷物の一覧を提出すると、自分の仕事へ戻った。

その後も各担当からの報告や相談を受けつつ帳簿を記入したり、帝都からの連絡を確認したりしていると遠くから爆発音が上がった。

ミルズはびくりと肩を揺らす。エルフ達は顔色一つ変えず、各々の職務に向き合っている。

音は元エルフの村からのものだ。信長が火薬の実験を村で行なってきた。試験はかの地で行われていた。

ヴェルリナ陥落の報せが届いた翌日。信長から既存の火器とは別に新しい火器開発の企画が送られ、以来毎日のように試験が行われていた。

初めはエルフ達も音がする度に驚き、事故が起きたのでは無いかとヒヤヒヤしていたが次第に慣れ、今ではミルズ以外誰も動じなくなっていた。

寧ろ「今のはいい音だったな。」や「余韻のキレが悪い。」と評価したり、使用された火薬の量を当てあたりする始末である。

ミルズも音の大きさや方角からして元エルフの村からのものどとはわかっていて。が、生来の気質ゆえか未だ慣れる事ができず、音がする度に物を落としかけたり、足を机にぶつけたりしていた。

そんなミルズにエルフ達は何も言わなかった。代わりに生暖かい視線や失笑を買い、その度にミルズはおかしいのは自分なのか彼らなのかと自信を無くした。

後日。街の拡張のため廃城周辺の調査をエルフに頼んだところ、予想以上に巨大な城であったことが判明した。今現在使用している部分はほんの一部に過ぎず、山はおろか周囲の丘まで全体を包むような遺構が確認された。

よほどの大戦で使われたのだろうと推察するエルフに、ミルズは先

日村の子供から聞かされた話を思い出した。

曰く、城は曾祖父よりも前の時代に建てられ、その時大きな戦があった、と。

これだけ大規模な城での戦となると歴史的に重大な事件として知れ渡っているようなものだが、ミルズの記憶にそれらしいものは無い。興味を惹かれたミルズはレイが取り寄せた書物から引こうとしたが、外国語で書かれた膨大な書を前にそつと棚へと戻した。

一先ずミルズは城を復元することに決めた。ドワーフにも依頼し、壁や堀、井戸なども元に戻すよう手配した。

「壁や堀まで？そこまで必要かなあ。」

「うーん、わからない。念の為、出来る事は何でもやっておいた方がいい。」

第19話

19

黒王軍の南進が始まるとほどなくして北から大量の避難民がヴェルリナに流れ込んできた。それとほぼ同時期に西方諸国に敗れた兵士達も帰国し、帝都に不穏な気配が漂い始めた。日を追う毎に増える避難民のあまりの多さに、わざとこちらに追いついて立っているのだと信長達が気づくのにそう時間はかからなかった。

それはレイの認識でいえば、騎行と呼ばれるものであった。

有名なもので言えば、百年戦争でイングランドがフランスに対して行った戦略である。ひたすら進軍して村や町を襲撃、略奪を行う事で敵の挑発や離間計、要塞に大量の難民を押し寄せさせる効果を持つ。

中でも特に厄介なのは難民だ。地元住民との衝突や貧困から犯罪に走って治安の悪化を招いたり、衛生環境を悪化させ疾病を流行らせたりなど、多くの問題を抱えている。

敗残兵に関しては既に手筈が整っており、滞りなく回収されたがやはり問題は難民達だ。

漂流者への恐れからか、帝都で目立った犯罪や衝突などは起きなかった。しかし難民達の恐怖や不安が住民にも伝播し、帝都の空気は徐々に張り詰めていった。ヴェルリナはいつ暴動が起きてもおかしくない状態であった。

晴明の報告を受けてレイはまず、引き続き黒王軍本軍と北壁両方の偵察を依頼した。

黒王の能力に関して、他にも腑に落ちない点があったからだ。それは黒王の能力の数についてだ。

今度の廃棄物を含め、記録されている廃棄物の能力は押し並べて一つだけであり、本人の経歴や逸話に関連するものであった。恐らくそれが彼らに共通する制約なのだろう。その見解については十月機関も同意しており、彼らも同様の疑念を抱いていた。

以上を踏まえてレイはいくつかの仮説を立てた。

- 一、廃棄物としての能力ではなく、元来のものである。
- 二、他の廃棄物の能力を黒王のものと偽っている。
- 三、全て同一のものである。

一は黒王が清明やラスプーチンのように、魔術に精通した者であるという説だ。

だがこれは無い、とレイは確信していた。というのも、レイはそれが使える人物に一人だけ心当たりがあった。しかし記憶が確かならば、彼はそれ以外の事も出来た筈である。彼ならばわざわざ化け物や他の廃棄物を使って戦う理由が無い。

二は他に二人、あるいは三人廃棄物おり、黒王はその存在を隠して能力を偽っている説だ。

漂流者にとつて治癒と食料の増殖の力は特に厄介なもので、優先的に排除したい相手である。無論あちらもそれは想定している筈で、対策を講じる事はいたって自然だ。

文字すらない化け物達は気づくことすらなく、過去の廃棄物達の記録がある人間は疑念を抱く者は現れるが、同時にそれを逆手に取られて黒王に特殊性を見出す者も現れるという寸法である。

この場合、他に二人以上廃棄物がいる事になる。尚、義経は本人の経歴と黒王の能力に関連性が無いため除外した。

三はそもそもの認識が間違っている、という説だ。三つの能力は一見全く別物に思えるが、生命に影響を与えるという点で一致している。そこから三つとも何か別の能力の派生、あるいは応用ではないかと考えた。

以上がレイの仮説である。

ひとまず二と三の検証のため、改めて北壁の潜入と進軍中の黒王軍の偵察を依頼したのだが清明の反応は芳しくなかった。

黒王軍の偵察はレイに言われるまでもなく、もとより行われる予定だった。しかし、先の潜入調査で外部の協力者を一人失っており、もはや協力は見込めない。再度、北壁内に導士だけを投入するのは躊躇われる。

清明が尻込むのを見て、信長が「今なら以前よりも警備が甘い。」と

口を挟んだ。

「今のあいつらはちつと前のおるてよ。今、北壁に残つとる連中は留守中の鎮護共じゃ。士気も練度も低い。それにあいつらは補給を黒王に頼りきつておる。短い間の小兵なら分けられようが、殆どは黒王直下でしか生きられぬ。つまり、今北壁には殆ど兵はおらん。潜入するなら今だ。」

「……わかりました。ですが、期待はしないでください。我々はあくまで魔導士であつて、密偵では……。」

「あ、あとついでに井戸に砒素でも突つ込んでください。それか死体か、排泄物でもいいです。」

「お、いいなそれ。清明、ついでに頼むわ。」

「あなた方は我々をなんだと思つてるんですか!」

「廃棄物絶対ぶつ殺すまん。」とレイは喉元まで出かけたが、飲み込んだ。尚、周囲への土壌汚染や後にカルネアデスを再建を考慮したサンジェルミの猛反対によって却下された。

「あ、あと偵察の時に使つてほしいものがあるんですけど……。」

会議室に集められた一同は声も出さずにその光景を見つめていた。視線の先には卓上にレイのスマートフォンが置かれ、黒王軍によって村や街が破壊されていく様子が映し出されている。

撮影したのは十月機関の偵察で、スマホを双眼鏡に固定し遠距離から撮影したものである。

頼んだのは無論レイだ。

水晶越し、それも映像や撮影といった概念の無い清明は当初レイの話が全く理解出来ず、返答に窮したが見かねてオルミーヌが間に入ると、ようやく理解して了承した。

快諾され、ほつと胸を撫で下ろしたレイは急いで自室に戻つて、本体とモバイルバッテリーを繋いだ。無事充電が始まるのを確認し、安堵の息をつく。いざという時のためモバイルバッテリーにはほとんど手をつけなかったのだが、これでどちらかが故障していたら話にならなかった。

充電が終わる頃。導士の一人が受け取りに来た。文書を届けにきた導士であった。念の為ロックは保ったまま、彼に使い方を教え、その日のうちに引き渡した。その間、信長が物言いたげな視線を寄越してきたが、当然無視した。

それから数日後。晴明がワイルドバンチと共に首都に合流し、スマホは彼手ずから返された。そこにはレイにも予想外の光景が記録されていた。

もはや戦争では無く駆除といった方が近い。それはあまりにも一方的で圧倒的な光景であった。一片の慈悲も容赦も無く、象が蟻を踏み潰すが如く老若男女分けへ出てなく、ただただ擦り潰されていく。その凄惨な光景に耐えきれず、何人かは顔を背けたが退室する者は無かった。

映像が終わるとしばしの沈黙の後、誰からともなく一斉に溜息をついた。圧倒的な軍勢や光景もそうだが、何よりも彼らを驚かせたのはその戦術である。

弓兵を背負った重装の巨人による突破。竜騎兵による航空支援。自分達には想像もつかない、初めて目にする戦い方への衝撃はそれ以上であった。エルフは勿論ドワーフですら震えを抑えきれず、拳を白くなるほど握りしめている。

その様子にサンジェルミは冷や汗をかき、「ど、どうすんのよ。これ。」と信長に耳打ちしようとして、息を呑んだ。笑っている。

信長だけではない。豊久も与一も、薄っすらと笑みを浮かべて見入っている。それは獲物を見つけた獣よりも、もっと獰猛且つ病疾的な笑みであった。

信長は慣れた手つきで映像を戻し、再生した。映像が流れると同時に頭の中で策を講じる。

現状信長達は圧倒的に不利である。数でも質でも劣る上、種子島を除けばまともな装備すら無い。敗残兵を取り込めたところで、高が知れている。

勝ち目など無いと誰もが言うだろう。信長もそう予感していた。

しかし。

(面白い。)

信長を高揚させたのは、本能であった。即ち未知の物を知る喜びである。

(こんなものがあつたら、城も壁も意味を成さん。)

元の世界では知ることすら叶わなかったであろうそれらを、間もなく間近で目の当たりにするのだという歓喜。

初めて機関銃を目にした時と同じか、それ以上の衝撃と感動に信長は打ち震えていた。

邪悪そのものとしか言いようのない笑みを浮かべながら映像を見る信長に、エルフやドワーフは勿論サンジェルミヤオルミーヌも気圧された。

三人が再び映像に釘付けになっっている間。サンジェルミはレイからの視線に気づき、「あたくし、ちよつとお花摘んでくるわ。」と言って部屋を出た。

少し遅れてレイもトイレに現れる。切り出したのはレイだった。

「伯爵、対戦車ライフルとか作れませんか？あとTNT。」

「できるわけねーだろ、バーカ！」

唐突な無茶振りにサンジェルミが率直に返すとレイは「ですよねー……。」と項垂れる。

二人は化け物達の行動が二次大戦以降のそれだと気づいていた。それはつまり、廃棄物にその年代の人物がいるという事である。

「ヘリボーン、いやこの場合ドラゴンボーンか。あれっていつ頃出てきたんでしたっけ？大戦の時はまだ落下傘だったと思うんですけど。」

「その頃にもあるっちゃあるわよ。つつても確率したのはその後だけど。」

「やっぱり、グービンネンにグリフォン借りましょうよ。巨人は地形でどうにか出来るとして、ドラゴンは対空兵器無いと、どうしようもないですって。」

「簡単に言ってくれるわね。タネはどうすんのよ？あの時だってギリ

ギリだったのに、相当のもんじゃないと無理よ。」

「タネ、タネかあ……」

しばらく考えるが何も思いつかず、レイは深くため息をついた。

「あー……。アルキメデスかフリッツ・ハーバーか、アインシュタインでも来てくれてたらなあ。」

「馬鹿ね、アルキメデスはともかく、他は今のオルテじや無理よ、無理無理。」

と、言いかけたサンジェルミの声を、轟音が引き裂いた。突如鳴り響いたそれは耳を塞ぐ暇すら与えず、強烈な衝撃が二人をその場に縫い付けた。音は建物に反響して増幅し、空気がビリビリと音を立てて震える。それが人の声であると気づいたのは、鳴り止んでからだつた。

ようやく動けるようになる頃。耳鳴りにふらつきながらレイが銃剣を構えて会議室に戻ると、果たして信長が豊久と与一に取り押さえられていた。その手にはスマホが握られ、表情は忿怒に満ちており、そばには倒れた椅子が転がっている。

部屋に残っていた者達は悉く耳を抑え、床に蹲っている。

「レイ、はよせい。」

「は、はい……」

急かさされ、信長の手からスマホを取り戻すと豊久が彼を殴り飛ばした。信長は壁に叩きつけられ、そのまますり落ちる。

「大事ないか？」

聞かれて我に帰ったレイが画面を叩くと、無事画面が映り出した。表面の強化ガラスシートが割れていたが、本体に問題は無い様子だった。安堵したのも束の間。ロックを解除し、映し出された画面にレイは目を見開いた。

それは黒王軍の本陣の一部を写した場面であった。無数の歩兵と槍の中、黒王軍の軍旗がいくつもはためいている。その中にほんの一瞬だが小さく写る別の旗があった。

白地に水色桔梗の幟旗が。

レイ達が部屋を出た後も信長達は映像を見続け、ああだこうだと策を練っていた。

その途中、豊久がぼやいた。

「しかしこいは便利じゃが、ちと小さいの。近づかなばわからんぞ。」すると信長は颯爽とした手つきで映像を拡大した。目を丸くする豊久に信長は自慢げな笑みを浮かべる。その顔は豊久の癩に障ったが、それを知ったら余計に喜ぶと思い、何も言わなかった。

目的の場面が終わったため、また元の倍率に戻し、しばらく眺めていると与一が「ちよつと失礼。」と言って一時停止させ、手にとった。それから数秒巻き戻し、慎重にコマ単位で確認するとある場面で指を止めた。それは避難民を襲うケンタウロスの映像であった。その中に異物が一人、一瞬だけだが写り込んでいる。

「こいが義経公か。」

「はい。」

「ほう、なかなかの美丈夫じゃねえか。」

顎鬚を撫でつつ唸る信長に、豊久はそつと距離を置いた。信長は「なんだよ。」と不服げであったが、無言を貫いた。

「あとでレイさん達にも見せないですね。」

そう言うと、与一は信長より少々覚束ない手つきでスクリーンショットを撮った。何をしたのかわからず首を捻る豊久に、与一は振り返って信長に負けず劣らず得意げに笑う。

「な、なんじゃ、ぬしら、なんじゃあー！」

しかし二人とも答えず、映像を再開した。それにまた豊久は腹が立った。

（くだらん。）と思ったが、元来短気な彼は明らかに馬鹿にされて、それを看過できる程大人ではない。

豊久はしばらく無言で映像を眺め、それに気づくと我先にと手を伸ばした。見よう見まねで画面に指を滑らす。が、戻りすぎたり進めすぎたりと思うようにいかなかった。慣れもあるが武器か手綱ばかり握っていた指は太く、狙った場所が反応しない。

苦心する豊久を二人は微笑ましげに見つめ、それが余計に豊久を苛

立たせた。

またシークバーが思わぬところで止まり、舌打ちしかけた豊久の指が一瞬だけ止まった。その場面のまま拡大し、間違いないと確信する。

「信、こいは……。」

言い終わらぬうちに信長は豊久から端末をひったくった。目が怒りで見開かれ、体はわなわなと震えだす。後ろ髪が鬣のごとく広がったかと思うと、次の瞬間、信長は咆哮していた。

倒れていた者達を運び出した後。事情を聞き終えたレイは、動作確認も兼ねて改めて映像を見直していた。

つい戦術にばかり意識が向いてしまったが、廃棄物の確認も目的の一つだった。意識して見返すと桔梗紋の他に土方歳三の姿や双頭の鷲の旗が確認できる。他にも与一が義経を見つけたが、しかしそれ以外の廃棄物の姿は見当たらなかった。レイは落胆しながら画面から顔を上げ、横目で信長の様子を伺う。

彼は少し離れた場所に腰を下ろしていた。間には豊久が座り、そのせいかいつもより小さく見えた。

豊久に殴り飛ばされた後。彼は床で悶えていたが、しばらくするとそれまでの痲癩が嘘のように静かになった。それから倒れていた椅子を起こして座り直し、じっと黙り込んだ。その間、誰も声をかけられなかった。

信長の意識はもはやこの場には無かった。なんとしてもあの男を殺す、殺さねばならぬ。その決意がありとあらゆる残忍な手段と方法とに占められていた。殴られた箇所が熱を持つのに反して、その心は冷え固まっていく。

意を決してレイが報告しても「で、あるか。」と一言。視線すら寄せさない。

すると、豊久が今度は脳天に踵を落とした。誰も想像できなかった行動に言葉を失う。

「貴様！人のもんば傷物にしといてそんな態度はなんじゃ!?？まず言う

ことがあるんじゃないかな、ああ!!」

と、踏ん反り返る。呆気に取られていたレイはその音に正気に戻り、恐る恐る宥めようとするが、「お前は引っ込んでろ!」と怒鳴られ大人しく引き下がった。

豊久の勢いは止まらず、信長が「いや」とか「それはそうだが」とか言う度に平手を食らわせ、とうとう信長は観念してレイの前に進みでた。

「……すまん。」

顔を真っ赤に腫らして頭を下げる第六天魔王の前に、レイはかける言葉が見つからなかった。豊久は腕を組んでじつとこちらを見ている。

困り果てて与一を見ると、穏やかに微笑まれた。清明には目を逸らされ、ワイルドバンチは明らかに楽しんでた。

レイは躊躇いがちに口を開こうとしたがやめ、徐にスマホを構えた。

「信さん。」

顔を上げた瞬間、閃光が瞬き軽快な音が鳴る。時間にして数秒。何が起こったか解らず、信長は「……は?」と間拔けな声を漏らした。

茫然とする信長にレイは画面を見せつける。

「これでチャラです。」

「よか。」と豊久は満足げに頷く。

信長はそれからもしばし固まっていたが、与一がスマホを覗き込み「これは、ふふ、良いしやしんですね。」と口元を押さえるのを見て、青筋を浮かべた。

「ぎっけんなテメエ! コラ! 消せ! すぐ消せ!」

「おっと、レイ殿。ここは私が。」

「与一! テメー、どけ、こちら!」

掴みかかろうとする信長の前に与一が立ち塞がり、首だけ動かして振り返る。その絵になる姿にレイは再びシャッターを切り、反対側へと逃げた。

すると、ブッチが「なあなあ。」と声を掛けてきた。

「そのすまほ？ってやつ写真も撮れんのか？」

「え？はい。」

「うおー、すつげえ！なあ、ちつと貸してくれよ。代わりにあのおっさんから逃してやつからさ。」

あまりにも眩しい笑顔で頼まれ、レイは断れず「あ、はい。どうぞ。」と渡した。

ブッチは見よう見まねでキッドを撮影し、「おー！ほんとに撮れた！すげー！」とはしゃぐ。それをキッドは呆れた目で見ていたが、画面に映し出されたのを見ると目を丸くし「ほう。」と顎を撫でた。

新鮮な反応が嬉しくなり、レイが自撮りの方法を教えていると「レイ殿！」と与一の鋭い声が走った。

振り返ると信長が卓上に上がり、まっしぐらに駆けてくるところであった。しかし辿り着く前にブッチがテーブルランナーを引いて足を取らせ、信長は転げ落ちた。

頭から倒れ、卓の向こうから足だけわずかに見える信長を背後に、ブッチは二人の肩に腕を回してシャツターを押す。

と、少し離れた場所で見えていた清明に声をかけた。

「あんたも来いよ！撮ってやる。」

「えっ！いいえ、私は結構です。というかそれは貴重な物なので、無闇に使うのは……。」

言い終わらぬ内にブッチがシャツターを切ると、そこには腰を反らせて流し目を向ける清明の姿があった。

裏腹な態度にブッチは豪快に笑い、キッドは無言で清明を見つめる。その視線に清明は「ハッ、体が勝手に……！まさか、符呪か！」と慄いた。

そこへ復活した信長が飛び込んできた。が、躲され、清明が押し倒された。その際ブッチは危うくスマホを落としかけたが、キッドが受け止め事なきを得た。

「つとと、わりいー！」

「しつかりしろ。行きなさい、お嬢さん。」

キッドからスマホを返されると、レイは「お願いします！」とお辞儀してその場を任せた。

ようやく扉の前まで来て手を伸ばしかけ、ふとレイは振り返った。そのまま、豊久の元へ早足で駆け寄る。胡乱な視線を向ける豊久にレイがスマホを構えると、漸く意図を察した。二人で横に並び、レイがスマホを掲げる。

「じゃあ行きますよ。笑って……。」

言いながらシャッターを押した瞬間、背後から信長が現れた。振り返った二人の目前に彼の肘裏が迫る。が、与一が飛び蹴りをかまして軌道を反らし、豊久を巻き込んで倒れた。

レイは驚いてシャッターを押したままにしてしまい、二人がもんどりうって倒れるまで一部始終が収められる。

「レイ！ 貴様何を撮ってるんじゃないか！」

「わわっ違います違います！」

「いいぞレイ！ もっと撮ってやれ！」

「信、貴様も貴様じゃ！ 五十路にもなつて、恥ずかしゆうないんか！」

「お前にだけは言われたくねえわ！」

そこへ与一が飛び込んだ。下敷きになった二人が口々に面罵する。

「何じゃあ！」

「なにしやがるてめー！」

「あははははは！」

押し合いへし合い、取っ組み合う三人。

与一の清々しい笑い声に、レイもやがてつられるように笑い出し、何度もシャッターを切った。

会議室が爆笑に包まれる中、部屋に戻っていたものの、全くついていけず蚊帳の外だったサンジェルミは「なんなのこの人達……。」とこめかみを押さえた。そこへ別室で休んでいたオルミーヌが慌てふためいて飛び込んでくる。

「大変です！ 大変です！」

「あ、オルミーヌさん。もう起きて大丈夫なんですか？」

「それどころじゃないですよ！ 外に、外に！」

ただ事ではない様子に豊久達も喧嘩をやめ、全員窓に近づくと、市民や難民からなる群衆が市庁舎に押し寄せていた。

正面の大通りは人で埋め尽くされ、「漂流者様、お助けください。」
「黒王から我らをお救いください。」と口々に叫んでいる。信長の声は市庁舎はおろかヴェルリナ中に響き、その恐ろしい声に人々はとうとう黒王軍が攻めてきた、と勘違いしてしまったのだ。

押し寄せる人の数は次第に増えていき、それに比例して声に必死さが増していく。いずれ内部に詰めかけてくるであろう人波に、信長とサンジェルミは冷や汗を垂らしながら顔を見合わせた。

「ど、どーすんのよあれ！あれ絶対アンタのせい、アンタのせいよ！何とかしなさいよ！」

「ううううるせー！俺は悪くねえ、俺は悪くねえ！」

「いやーこれは完璧にノブのせいですよ。ねえ、レイさん。」

「そうですよ。いい大人なんですから、ちゃんと責任取ってください。」

「腹決めるよ、おっさん！」

「ぐぬぬぬぬ……あー、もう！なんもかんも金柑頭のせいじゃー！光秀のアホー！ハゲー！チキショー!!」

その心からの叫びはヴェルリナの町並みに木霊し、人々は今度こそ恐慌状態に陥った。

その後、我慢できなくなった豊久が集まった人々を一喝。暴言とも取られかねない言葉であったが、人々はそれを激励と受け取って奮起し、最終的に豊久に共感、結束し事態は無事収束した。

サルサデカダンの戦い

第20話

20.

無数の扉が並ぶ白く長い廊下にその男はいた。通路の真ん中には受付と札を掲げた事務机が鎮座しており、作業用の機械や書類など雑多に積まれたそれに半ば埋もれるように新聞を広げている。来訪者に見える位置に掲げられた札が示す通り、男はしばしの休息に煙草をふかしつつ、漂流者の動向を確認していた。

特に目を引くのはやはり豊久達である。

記事の一面には号外と大きく見出しがされ、遂に漂流者の率いる軍と黒王軍が激突する旨やそれぞれの活躍ぶりが活き活きとした筆致で綴られている。

その様子に男の目に安堵するような慈しむような色が差すが、不意に現れた少女によって塗り替えられた。

「哀れね。」

同時に白ばかりの世界は彼女を中心に黒染めのそれへと変わる。少女が男の目前で足を止めると二人を境に空間が二分された。

「もうすぐ私の廃棄物に殺されるとも知らずに、呑気なものね。」

挑発の言葉を繰り返すが男は視線すら寄越さず、黙々と新聞に目を通している。それを言葉に窮しているのだと解釈した少女はますます愉悦に口元を歪ませた。

「いくら足掻こうが、私の廃棄物に勝てるわけがない。みんなここですり潰される運命なのよ。何もかも無駄、全て徒労！ああ、可哀想な漂流者達！なんて無意味な人生かしら。」

「それを決めるのはお前ではない。」

勝利を確信し、浮かれきった少女を男の言葉が射落とす。少女は思わず笑うのを止め、男に向き直るとそこにあつたのは期待していたそれではなく明確な拒絶と軽蔑、そして嫌悪を滲ませた視線であった。

それ以上話すことは無いと黙して語る男に、少女は男の真意を図る

こともせず、感情のままに喚き立てた。

「……余裕ぶつていられるのも今のうちよ！見てなさい、あんたの漂流者なんか、皆殺しにしてやる！」

豊久の弁舌もとい蛮行により、市民達の心を掴んでからの信長の行動は早かった。彼は市民達の熱の冷めぬ内に兵士の選定と編成、指揮官の任命を手配し、続けて決戦の舞台を定めた。

彼の地はマモン間原、サルサデカダン。四方を山に囲まれた盆地である。

狭隘な土地で谷間を縫うように敷かれた道の一つはオルテの中核へと続いている。道の先には南北に伸びる巨大な山脈が天然の要害となつて東西を隔てており、オルテの要地である事を伺わせる。実際オルテの建国以前は関所が置かれており、麓の山にはまだその痕跡が残っていた。

険阻な山道だが、大軍である黒王軍は進軍が制限されるためここを通らざるを得ない。

加えて狭い平地帯で布陣が制限され、最大の武器である数の暴力もここでは発揮しきれない。

信長はここを防衛地点と定め、新たに編成された人類連合軍を率いて砦を築いた。

兵士の数と士気に関しては一先ず解決した。残る問題はその質である。

避難民の中には元兵士の人間も少なからずいたが、その殆どはやはり非戦闘員であった。

確かに火縄銃は他に比べて扱いが容易ではあるが、個人と集団では求められる技術が違う。元々精鋭揃いの軍隊であるターバイ神聖隊や現代で集団行動に慣れたレイと違い、完全な素人の彼らをものにするには時間も人手も無さすぎる。前もって火縄銃や戦場での立ち振る舞いの手引書を用意してはいたが、現状では焼け石に水でしかない。故に信長は新兵の訓練は最低限に留め、残る時間の殆どを普請に費やした。

「弱兵がまともにも戦うには、土と木で支えてやらねばならん。」

という信長の言葉が示す通り、信長が構築したそれは馬防柵と土塁を組み合わせた原始的な山城である。

漂流者達が布陣したのは山脈から連なる、平原を東に睥睨する形で広がる丘陵地帯である。小規模の山が南北に連なる地形で、谷間を流れる川から運ばれた土や砂が積もって扇状の台地となったものだ。

その頂から裾野にかけてを自陣とし、稜線に沿って幾重にも塹壕を掘らせた。

塹壕は斜面を利用して高低差がついており、丘を登ってくる敵を頭上と左右から十字砲火を浴びせる算段である。無論、土塁に取りつかれた時の策として斜面には無数の逆茂木が屹立し、簡単に抜けないようそれぞれ縄で結びついている。

山頂には本楼の他、複数の物見櫓と狭間を備えた足場が築かれるなど、急ごしらえとは思えないほど大規模且つ強固なものが築かれた。

信長自らが現場で指揮した事で後に引けない戦いであるという実感が強まったのか、砦は黒王軍が到着する前日には完成し、人類連合軍は満を持してその時を迎えた。

早朝。空が白み始めた頃。偵察のワイルドバンチからの報せを受けて全軍が臨戦体制に入った。兵達は壕内に身を潜め、じっと様子を伺い命令を待っていた。

日の出と同時に霧が出始め、平原の底を白く覆った。皆、食い入るように水平線の彼方を見遣り、時折漏れる息継ぎや微かな囁き声の他は水を打ったように静まり返っていた。

しかしその静寂は間もなく訪れた地響きと不気味な音階によつて破られる事となった。

初めそれは無意味な雄叫びか鬨の声かとも思われた。しかし霧の彼方に黒いものがちらほらと見えた頃。それは一定の調子を持つて紡がれる、彼らの合唱であると気づいた。読経にも似た抑揚の無いそれから意を解する事は出来ない。しかしそれが開戦の合図、全ての終わりの始まりを告げるものである事は明白であった。

やがて霧を破って現れたるは地を埋め尽くす無数の軍勢。黒備え

の鎧に身を固めたコボルトの槍歩兵と青銅の鎧に身を包んだ巨人。左右にはそれぞれケンタウロス騎兵、ゴブリン歩兵が固め、その上空を竜騎兵が統率の取れた動きで飛び回っている。

津波の如く途切れる事のない大軍に、皆動揺を抑えきれず口々に不安を吐露した。彼らを諫めるべき立場のシヤラですら怖気付き、泣き言を口にしかけたがそれはレイの歓声によって掻き消された。

「ほんとにほんとにほんとにほんとにドラゴンだ！うわー、うわー！本当にコボルト乗ってる、いーなあ、いーなあー！」

「あ、危ないですよ！降りてください、降りて！」

興奮のあまり馬防柵に乗り上げ、シャツターを切るレイを慌ててオルミーヌが制するが、全く意に介さず水晶越しに清明に嘆願した。

「清明さん、清明さん、あれ私達も乗れるようできません!?」

「あ、あれに乗る気ですか!?？正気ですか、あなたは！」

「何言ってるんですか、未来じゃ竜は乗り物なんです！国父だって乗ってるんですよ!?？」

「何が起きてるんですか未来では!?？」

当然元の世界に竜などいない。無論それは承知の上だがレイがあまりにも強く断言するため、清明は冷静な判断が追いつかなかった。

脱力したシヤラは近くの兵士と顔を見合わせようとして、それがレイだけではない事に気付いた。豊久を始め他の漂流者達も理由こそ違えど、待ち侘びていたと言わんばかりの笑みを浮かべている。

絶句する一同に豊久は「こがいなもん、笑うしかなかろうが。」と一際その笑みを濃くする。その顔にやはり廃棄物よりも彼らの方がよほど脅威なのではないか、という思いと彼らが味方でよかった、という思いとで初めて彼らは一丸となった。

黒王軍の戦は大軍の典型である。ただ進み、ただ潰す。戦術もへつたくれもない、極めて単純なものだが数の暴力が最も強力且つ確実である事は歴史が証明している。しかしそれ故に対策が取り易い。数的優位に立つ相手にいかに立ち向かうか。それこそ人類が苦心してきた課題の一つであり、十八番なのだ。

先陣を切ったのはやはり巨人達であった。動画と同じく背中に弓兵、足下に歩兵を随伴している。青銅鎧の身を固めた彼らは、矢やバリスタは勿論の事。火縄銃ですら通用しない。映像を確認後、信長はすぐにドワーフに同じ程度の青銅の板を用意させ、試し撃ちしていたため承知していた。

先頭の一団が射程範囲に入るや否や、前線の兵士達が一齐に火を吹く。無数に放たれた弾丸は通常であれば鎧ごと兵士を食い千切ったであろう。しかし青銅とはいえ、厚さが増せば強度も増す。更に弾道を逸らすよう丸みを帯びた形に設計されており、種子島程度では貫けない仕様になっていた。まるで通用していない事に兵士達の間にも揺るが走るが、すかさず信長が随伴する歩兵に目標を変えた。こちらの装備は以前と変わらず、鶴瓶撃ちに叩き込まれた弾丸になす術なく全身を撃ち抜かれ、先頭の集団は一瞬にして壊滅した。

それを見てすかさず後続の歩兵達が下がり、巨人だけが残される。巨人が壕を突破するのを待つつもりなのだ。

信長が物見の兵士に巨人の進路について尋ねると三体共、中央に向かって進軍しているという報告が返り、やはり、と唸った。

やはり中央突破を狙っている。

包囲殲滅陣は決まれば強力だが反面非常に脆く、欠陥も多い。それを補うための野戦築城でもあるのだが、知っていても迷わずそれを選べる胆力は並大抵のものではない。

(やはりお前なのか、光秀。)

と、信長は黒王軍本陣を見据える。主力であるコボルト兵らの装いで、遠目には黒々とした虫の群れのようにも見えるその中からその姿を認めるのは叶わない。

レイや豊久から自分がいなくなった後について聞かされていた彼は、以前にも増して光秀を酷く嫌っていた。

彼について口にする際は「ハゲ」だの「金柑頭」だのと罵っていたが、一方でその能力については内心認める所があった。

彼への憎悪は期待の裏返しでもあった。

「下がれ!!?・後退しろ、一の壕、二の壕は下がれ!!?・一の壕、二の壕は

捨てる!!？」

信長の命を受け、壕内の兵士が退いていく。それを聞いて豊久を率いるドワーフ兵団が動き出した。入れ違いに壕内に入った彼らは身を潜めて巨人達に接近する。事前の説明通り、指定の位置に神聖隊の何人かが待機しているのを確認し、互いに目配せする。

後は機を待つだけだった。

砦へ進む巨人達の足取りに迷いも躊躇いも無かった。寧ろ勇み、前のめりであった。それもその筈。黒王軍に加わってからというもの、彼らは負け知らずであった。連日の快進撃は彼らに自信と誇りを取り戻させ、自らが地上の覇者であった事を思い出させた。

味方に先駆けて敵を蹴散らし、突破口となる。敵の悲鳴と味方の賞賛を全身に浴びるその快感は、ただ生き延びるためだけの生活では決して得られない高揚感をもたらした。

しかし過剰な成功体験は時として過信へと繋がり、過信は足元を疎かにする。それ故に気づかなかった。彼らの行く先には冥府への口であることに。

初めそれは旗のように見えた。陣地の中央部分、巨人達の進行方向の先で風に靡いている。進むに連れてそれは人間であることがわかった。馬防柵の前に身を晒し、仁王立ちしている。旗だと思っただけは真つさらな布をふんだんに使った衣装で裾が風に靡いて嫌でも目を引いた。手には筒の先に旗を結んだ銃を握り、柵の前に身を乗り出し、仁王立ちしている。舞台役者がそのまま出てきたような出で立ちは、人間でなくともそれが場違いなものだとわかった。

一瞬躊躇うも巨人達の進軍は止まらない。背中のコボルト達が一斉に雄叫びを上げて矢をつがえる。だが位置の関係上正面攻撃が難しく、その上安定感に欠けた巨人の上では狙って当てられるものではない。ほとんどが明後日の方向に飛び、運良く近くを掠めた矢も目測で叩き落とせるほど威力も速度も無かった。

逆茂木やら馬防柵やら歩兵の障害となるものを破壊し、遂に土塁の手前まで辿り着く。その間レイは微動だにしなかった。巨人の巨大な目が、兜の隙間からレイを捉え目前に迫る。しかし尚も動かない。

見据え続けるレイを巨人は柵ごと捻り潰そうと手を伸ばした。

しかしそれが届くよりも先に吹き上がった爆炎と石の礫が巨人を飲み込んだ。

その場に居合わせた殆どが、その時何が起きたのか理解できなかった。

わかったのは作戦を聞かされていた一部の兵士と、立案者であるレイだけだった。

直撃を受けた一体は両足が千切れ飛び、一体は爆風と炎に巻かれて地面を転がった。

火だるまになった一体は悲鳴を上げ、溺れた人間のようにもがきながら近くを流れる川へ走ろうとする。しかし裂傷を受けた足が自重で崩壊し、手前で倒れてしまった。恐怖が痛みを麻痺させているのか、それでも這う這うの体で漸く川へと辿り着く。しかし川と言っても小川であり、巨人にとっては爪先を浸す程度の深さしかない。その上、燃料は海洋国家グービンネン特製の一品である。恐怖と興奮により呼吸が乱れ、更に燃焼による酸欠が加わり呼吸困難に陥った彼の動きは次第に鈍くなり、遂に動かなくなった。

残る一体は殆ど無傷だったが、凄惨な光景に足が竦んだ所を壕内で待ち構えていた豊久率いるドワーフ達による肉薄攻撃に敢えなく倒れ、先の二体と同じ運命を辿った。

「な、なんですか、あれは。」

「え、えつとたしかレイさんはふうがす？って呼んでました……。」

困惑する清明に気を利かせたオルミーヌが解説すると、報告のそれを想像を遥かに超える威力に慄き、息を飲んだ。

巨人の血が川のように流れて一帯が黒く染まる。肉の焦げる匂いと濃密な血の臭いが漂い始め、目の前の光景が幻覚でない事を自覚した頃。

豊久が耐えきれず、吹き出した。

「わはははは、えらいのう！すごいのう！どこぞの山ば噴火したかち思ってたわ！」

それを皮切りにあちこちから歓声が上がる。好調な滑り出しに人

類連合軍の士気が俄かに膨れ上がった。誰もが浮かれ、楽観的になる中。ただ一人、信長だけが厳しい表情で黒王軍の動きを見定めていた。

間を置かずして、再び黒王軍に動きがあった。今度は総攻めであった。

第21話

21.

歓声の中、未だ呆然と立ち尽くしていたレイの意識を戻したのは信長の怒声であった。一瞬自分の事かと思つて疎むも、それが光秀に對してだとわかつて安堵し、双眼鏡を手取る。

先頭の巨人は両足が千切れ、流れ出た血が川を作っていた。残る二体もどちらも四肢のいずれかを失つており、片方は小川に巨体をねじ込むような姿勢で倒れ、堰き止められた水が周囲に溢れ出ている。

続いて前線の壕内へと視線を移すと、点火を任された兵士全員の姿が確認できた。皆、怪我をしている様子はない。

無事終わったと自覚すると、急に体から力が抜けていくのを感じた。危うくその場に座り込みかけたのを理性で留め、馬防柵に寄りかかつてため息を吐いた。

黒王を直に倒せない現状、いくら攻撃を与えてもその度に回復されてジリ貧に追い込まれる可能性が非常に高い。ならば方法は二つ。即死させるか、動けなくさせるしかである。

そこでレイは地雷の設置を提案した。

巨大な体は確かにそれだけでも十分脅威だが、同時にそれは枷でもある。ただでさえ重い体をより重くしているのだから尚更だ。そんな彼らが手足を失えばどうなるか、火を見るより明らかである。

できる事なら平原中にばらまきたかつたが、流石に時間も物資も余裕が無いため中央に限定的に設置する事になった。

そこで問題が一つ発生した。起爆の方法だ。当初はブツチから譲られたリボルバーの機構を参考に、燧発式の着火装置を検討していたが、非常に着火率の悪い物しか作れなかつたのだ。

材質の違いかバネの力加減か、原因は未だ未明である。結局、巨人の目の前で着火するという危険な方法を取らざるを得なかつた。

バタバタと裾のはためく音に、さっさと着替えようと柵の隙間から壕内に戻つた途端。レイは待ち構えていた男達の手に揉みくちやにされた。

「やった、やったぞ！巨人を倒したぞ！」

「なんだよ今の、どうやったんだよおい。」

「こんな簡単に殺せるなんて、流石、漂流者様だぜ！やっぱ化け物には化け物だよな！」

新兵達は好き放題にレイの頭やら肩やらを撫で、叩く。挙げ句ご利益を期待して、焦げた服の裾を千切ろうとする者や、髪を抜こうとする者まで現れる始末である。流石にレイも神聖隊の隊員達に助けを求めるが、彼らは止めるどころか「あら妬けるわね。」「まー！あんなに男を侍らして、いやらしい子ねっ。」「漂流者っただけであーなんだから、男ってやーね。」と野次ってくる始末である。

味方から見放され、数の暴力に抗う術を持たず、暫し好き放題されるレイを救ったのはエルフの伝令であった。

「全面攻勢！全面攻勢です!!？」

水晶から響くその声に総員蒼白になり、意識は再び黒王軍へと戻った。その言葉の通り、黒王軍の全軍がこちらへ向けて動き出していた。

右翼にはオーク、ゴブリン。中央にコボルト。空には竜騎兵。全てが群れを成し、一斉に襲いかかってくる。その隙に輪から抜け出したレイは軍勢を確認後、オルミーヌに声を掛ける。

「レイさん!?よかったあ、応答してくれないから、何かあったかと……。」

「すみません。ちよつと色々あつて……そつちもなんか、大変そうですね。」

「ええ、なんかもう……。」

背後で男達の諍う声が聞こえたので触れると、彼女自身理解が追いついていない様子で歯切れの悪い返答が返ってきた。

「おい、あれ！」

続く言葉は誰かの悲鳴と羽ばたく音に掻き消された。

顔を上げると、いつの間にか正面に大口を開けた竜騎兵が迫っており、咄嗟に壕の底、手前側に身を伏せた。

「伏せろ！絶対に壕から出るな！」

頭上を炎の濁流が掠め、金切り声と悲鳴が飛び交う。時間にして三十秒も無かったが、レイ達には実際よりずっと長く感じられた。

炎が止み、竜が飛び立った音に顔を上げると二人が直撃を喰らい即死。一人は半身を火に覆われ、倒れ、もがいていた。慌てて灰を入れた桶を手に、兵士の元へ駆け寄る。それを見て周りの兵士達も我に返る。各々桶やら外套やら円匙やらを持って集まり、やっと火を収める事が出来たがその頃には既にこと切れていた。

苦痛と恐怖に見開かれた臉は焼け落ち、閉じる事が出来なかった。救いを求めるように伸ばされた手は曲げた状態のまま硬直して元に戻せなかった。服はほとんど焼け落ち、剥き出しになった体は黒々と焦げていた。

レイは再び水晶を手にとると、被害を報告した。作戦に変更が無い事を確認し、通信を終えるとその場で服を脱いだ。

周囲は一瞬どよめくが下には普段の服を来ていたため、すぐに落胆とも安堵とも言えぬそれへと変わった

「総員、持ち場に戻ってください。一、二の壕は空堀のまま、残りの壕で対応します。信さんの指示があるまで壕からは絶対に出ないでください。火縄の確認は怠らず、準備が出来次第、撃ってください。火が消えても焦らず、予備の火がある事を忘れないでください。」

脱いだ衣装を遺骸にかけ、装備を直す。配置につくためその場を離れようとするレイの肩を新兵の一人が掴んだ

「おい、あれはどうすんだよ。今度また来たら、今度は俺達が……。」
「大丈夫ですよ。」

レイは新兵の手を離し、出来る限り明るい声で言った。
「なんてったって、那須与一。日の本一の弓取りですから。」

「言ってくれるなあ。」

聞こえていると知ってか知らずか、と与一は苦笑する。言葉とは裏腹に、その声には微塵の揺らぎもなかった。

ああまで言われて射らねば坂東武者の名折れ。と己を奮い立たせ、

弓を固く握りしめる。以前の自分ならそんな事思いもしなかったろう。そう思えるようになったのは、と我らが総大将たる豊久をちらりと見、続いて上空を我が物顔で舞う龍騎達を見据えた。

その横顔はやはり女子と見紛うばかりに繊細だが、肩は自らの矢が戦局を左右するという重みすら心地良いと思えるほど逞しい。

口元を誇らしげに引き結び、視線を戻す。

与一率いるエルフ弓兵と晴明はそれぞれ、竜を迎え撃つ役割を任ざられていた。

竜の炎の威力は凄まじく、直撃すればまず助かることはない。が、射程そのものは長い、軌道は直線的でその幅も然程広くない事が判明している。であれば当然、攻撃の際は低空飛行にならざるをえない。更に言えば、火を吐いている間は狙いを定めるため無防備である。そこを撃墜する。というのが信長の案であった。

無論、竜がどこに攻撃を仕掛けてくるかも想定済みである。

竜の炎は直線にしか進まない。故に障壁に対して垂直に吐かれた場合、壁が炎を防ぐため然程脅威ではない。しかし平行に吐かれた場合、壁は却って炎の進行を助け、一息で鎮圧されてしまう。

北壁を始め、数々の要塞を落とした理由はそれである。当然、敵は今度も同じ手を使ってくる。

「来る場所がわかっているなら、落とせる。与一にお任せあれ。」

言い切る与一の目にエルフ衆はゾツとするものを感じつつ、付き従った。

果たして信長の目論み通り、竜騎兵が側面へと回り込んだ。低空に降りてきた所をまず与一が騎手を射抜いた。それを見て竜は狙いを与一達に変えるが、向き直った所へ今度はエルフの矢が降り注いだ。

己の強靱な体の前に人間の矢など無意味である。連戦からそう学んでいた竜は、躲す素振りすら見せなかったがすぐにそれは過ちだと思ひ知らされた。

矢は突き刺さるとほぼ同時に括りつけられた筒から白煙が音を立てて吹き出し、竜の視覚と聴覚を覆う。

竜は慌てて体を振って振り落とそうとするが、動けば動くほどに矢

は深部へと沈み込む。更に動きに合わせて煙が四方八方へと広がり、自ら窮地を作り上げ、混乱した竜はやがて状態を保てず落下した。

「やったー！」

とエルフ達から歓声が上がりますが、言い切らぬうちにそれは悲鳴へと変わった。竜はすんでのところで体勢を立て直し、地面を蹴って再上昇すると煙幕の切れ間の微かな視界を頼りに与一達の方へと突進してきたのだ。

すかさずエルフ衆は威嚇射撃を行うが、分厚い皮膚に阻まれ深部には至らない。ほんの数回の羽ばたきで、圧倒的な質量を持ったそれが眼前へと迫る。牛刀のような齒の奥、闇よりも暗い巨大な顎門が開かれる。その暗さに、エルフ達は矢をつがえたまま凍りつく。が、その更に奥に火花が瞬いたのを与一は見逃さなかった。

（南無八幡、我国神妙、日光権現、那須明神。願はくば、かの扇撃たばせたまへ。この矢、はづさせたまふな）

心の内で祈念し、矢を放つ。それが真つ直ぐに竜の口内へと吸い込まれていくのを見て、シヤラは瞬時に意図を理解した。

「伏せろ！伏せるんだ！」

理由は聞かずともその声が深刻さを物語っていた。

一同が迷わず壕の底に身を伏せるのと、矢が燃料袋へと到達するのは同時だった。爆発四散した竜の残骸が断末魔を交えた轟音と共に一帯に降り注ぐ。

遅れて爆風によって舞い上がった土埃が落下し、壕内が薄茶色に染まる。ほどなくして土煙が収まり、恐る恐る顔を上げたシヤラは地獄絵図と化した周囲の光景に顔を引きつらせた。その中で与一は相変わらず涼しげに笑っていた。

一方、晴明の方は混沌を極めていた。晴明は符呪を用いて竜を鎮め、無力化する事に成功。特に苦戦することも無く、竜を地上に引き摺り下ろしたが豊久が乱入した事で妙な流れになった。

「こん竜ば、もろうた！」

騎手を蹴り落とし、その勢いそのまま鞍に跨った豊久は腕を組んでそう宣言した。

話を聞けば、無理矢理押し付けられた役目ではあるが、曲がりなりにも大将である自分が徒歩である事が不服だったらしい。途中何度か馬を手に入れる機会があったものの、なかなか彼を納得させる馬に出会えず内心鬱憤が溜まっていた。

そもそも品種改良はおろか去勢すらせず、荒馬を手懐ける事を良しとする時代を生きた彼が求める馬と、比較的品種改良の進んだこの世界の馬とでは、求められる性質も体格も全く異なるため、無理筋なのだ。

そこへ来て竜騎兵の姿を見た豊久はこう考えた。「馬でなくともよか。」と。

彼からしてみれば天啓とも言える閃きだった。

「いやそれは流石に……！竜ですよ、無茶苦茶言わないでください！」
「鞍も手綱もついとる。馬みたいなものじゃ。それにほれ、レイも言つとつたじやろ。国父の奴も乗っておつたと。なら、俺にも乗れるはずじゃ。」

豊久の言葉に晴明は頭を抱え「あのアマ、余計な事を……。」と内心毒づく。

しかしここで折れるわけにもいかず、再び説得を試みたが豊久は益々意固地になるばかりで、晴明はヤケクソになって叫んだ。

「だからそれは馬では……寧ろ羽の生えたトカゲですよ！」

「やったら、飛ばせばよか！」

「そんな……。」

最早何を言っても無駄だと悟り、項垂れる。弟子の苦勞の一端を味わった晴明は、彼女を偲ぶ事で現実逃避していると今度は同乗を迫られた。

「はっ……えっ？」

当然のように出てきた言葉に理解が追いつかず、間の抜けた声を出す晴明に豊久は容赦無く畳み掛ける。

「俺一人では暴れ出したら、御せん。おんみようと、よくわからん」

で乗れ。」

そこで清明の思考回路が限界を迎え、一旦意識が途絶えた。そして気が付いた時には陣地を遙か彼方に見下ろす位置にあった。遅れてやってきた急上昇による負荷と臓腑の浮き上がる感覚に怖気立ち、浮遊感による心許なさに股間が縮み上がる。

符呪の賜物か天性の才か。手綱を握られた竜は豊久の意のままに動いた。豊久は一息に天へと駆け上がると上空で様子を伺っていた竜騎兵に気づく暇すら与えず接近し、竜ごと騎手を斬り伏せた。

本日初めての手柄、それも竜の首に豊久は興奮し、平原中に響く声で殊更喧伝する。ひとまず満足した彼はやっと清明に意識を向けた。

ひたすら震えていた清明ははたと我に返り、「早く降ろしなさい！」と今まで以上に強い語気で迫る。

陰陽師であり、漂流者の中で最も人間離れた清明といえど、制御しきれぬかどうかもわからない獣で空を飛ぶのは気が気でない。

清明は必死にその事を訴えるが豊久からしれみれば、今の動きで竜が完全に従属していることはわかり切っていた。彼の関心はまた竜に戻り、どんな名前にするかと持ちかける。その態度に清明は危うく爆発しかけたが、いつ術が解けるかわからない今、怒りで我を忘れる訳にはいかない。必死に鞍にしがみ付いて豊久に言い聞かせるが、水晶越しに届いたレイの声が理性を手放させた。

「ああー！ずるいずるい、なんでお豊さんが乗ってるんですか！私が先に頼んだんですよ！」

「ふん、早い者勝ちじゃ。こいはもう俺のもんじゃち。名前じゃやてもう決めとる。のう、龍夫。」

豊久は見える筈もないのに下瞼を指で下げ、舌を出す。

しかし目に見えずとも煽られているのは伝わり、レイは低く唸ってから清明に願ひ出た。

「清明さん、私の分も取っておいてくださいよ！」

「いい加減にしなさい！」

と、清明が言ったかは定かでは無い。とうとう限界を迎えた彼の言葉は、翻訳不能なほど荒んでいたのである。

年長者の威厳も指導者としての意識もかなぐり捨てて喚き立てる。その一連様子は地上の兵士達は勿論、弟子であるオルミーヌにも届いており、絶句する彼女と彼女の師に対して信長は同情の念を禁じ得なかった。

光秀は失望していた。戦局が芳しくないことではない。信長に対してである。嘗ての彼であれば、光秀の企みなどとつくに看破していた。それだけではない。それを利用して自分を追い詰めていた筈である。

「ぬるくなったものだ。」

と、軽蔑を込めて吐き捨てる。

この陣地の構築からしてそうだ。長篠のそれをそのまま引つ張ってきたかのような野戦築城は、彼が既に過去の成功に固執する偏屈な老人となった証左である。

第六天魔王も老いには勝てぬか、と嘲笑と諦念の入り混じった笑みを浮かべる光秀の元へラスプーチンの幻影が現れる。

その表情から聞かずとも難民への工作が上手くいつている事は明らかだった。

「ですが巨人が……。」

一転して憎々しげに顔を歪めるラスプーチンに、光秀は大事ないと伝える。

巨人達は黒王の治癒が間に合い、奇跡的に一命を取り留めていた。しかし完全な回復とはならなかった上、他も以前程の働きは期待できない。

巨大な荷物が増えただけではないか、と臍を噛むラスプーチンを他所に光秀は再び戦況へと意識を戻す。

被害が大きいのは痛い、戦に想定外はつきものである。

難民達を寝返らせた今、信長の敗北は決定した。巨人の有無は崩壊が早まるか否かの違いでしかない。

所詮漂流者の軍は寄せ集めの烏合の衆だ。そこに義理や理念は無い。一人が寝返れば我も我もと連鎖し、いずれ崩壊するのは目に見える。

ている。

何もかもを失った人間は何にでも縋る。今彼らが漂流者に従っているのも、目の前に漂流者という板があったからに過ぎない。

故に裏切る。たとえそれが「今降伏すれば、命だけは助かる。」という見え透いた甘言であつても。

問題があるとすれば、信長に逃げる時間を与えてしまう事である。しかし。

「必ず殺す。今度こそ逃さぬ。」

その為に自分はここにいる。ここまで来てしまった。

無意識に歌の一節が口をついて出た。この世で最も忌むべき男が事あるごとに口ずさみ、嫌でも覚えてしまったものだ。

「滅せぬもののあるべきかや。」

そして人類連合軍はその日の内に敗北した。

第22話

22.

戦局は硬直していた。

数では勝るものの、一貫して正面突撃を続ける黒王軍は未だ壕陣を破れず、徒らに死体を増やすばかりであった。弾幕をくぐり抜けて土塁に辿り着いた猛者もいたが、今度は坂を転がり落ちてくる爆弾に足を取られて、空堀の底は既に死体と呻き声に満たされていた。

それを右翼後方。漂流者の陣地一帯を見下ろす山から眺めていた男は決断を迫られていた。

男はカルネアデス南に位置する小侯国の一つ、ラ・ズナを治める一将である。彼は先日の首都での騒動で真っ先に豊久に恭順し、難民達に決起を促した人物であった。それがきっかけで信長に見出され、難民達からなる軍団の将を任されていた。

男としては渡りに船であり、願っても無い申し出であった。しかし、この頃から既に漠然とした忌避感が彼の胸中を侵し始めていた。

最初それは単なるひとならざる者への、警戒からくるものでしかなかった。しかし黒王軍との決戦に向け、彼らの武器を渡された時。それは明確な拒絶の意思へと変貌した。

性別や年齢、生まれを問わず、持つ者全てを兵士に変える武器。

初めて目にする異界の道具は、彼らの概念を覆す代物であった。表面上は受け入れたが、内心反発と疑念を抱かずにはいられなかった。

そこにはやはり戦士としての矜持もあったが、それが齎す影響が一過性の物ではない事。なによりも彼らの行動がそれだけに終わらない事は想像がついたからだ。

男の部下達も同じ思いであった。

そんな男達に信長は実際に使っている所を見せると言って、傍で待機していた女に声をかけ、男達を練兵場へと案内した。練兵場には既に屈強な兵士達が揃い、件の武器を構えていた。その中に先程の女の姿を見つけて、男達はどよめいた。まさか、いやそんなばかな。てつきり現地の侍女か何かと思いい込んでいたため彼らは、彼女も同じ漂流

者だと聞かされて驚きを隠せなかった。

信長の号令に従い、斉射が始まる。その威力を目の当たりにして、最早その効力を疑う者は誰一人としていなかった。そしてそれが決定打となった。

先手の巨人を呆気なく返り討ちにし、竜騎兵が次々と射落とされていく。その光景にすっかり根を張っていた不信感が芽を出した時、その男は現れた。

男の特徴は既に聞き及んでいた廃棄物の一人と一致しており、公子含む難民連合の将達は一目見てそうだと確信した。

ラスプーチンの要求は黒王軍への寝返りだった。公子や将達の家族を人質に言い寄る彼に、当初公子達は見え透いた虚言だと突っぱねていた。が、彼は漂流者への不信感を煽って、一人、また一人と陥落させていき、残す所とうとう公子一人となった。

その卑劣な手口に男は怒りに拳を震わせ、睨みつける。

「私はあの男に約束した!!? 逃げ回って死ぬならば、戦って死のうと!!?。」

「そして今度は奥方やお嬢さんを差し向けるのですか、あの女のように。」

その言葉に男の頭に妻の姿がよぎった。一児の母とは思えない程若々しく美しい、薔薇の香りがする女だ。その手には幼い娘が縋りついている。

しかしその隣には何故か女の漂流者がいた。そして硝煙の匂いが漂い始めたかと思うと、妻の手から娘が消え、代わりに漂流者の武器が握られていた。

匂いが濃くなり、次第に妻の姿が漂流者のそれへと代わっていく。とうとう見分けがつかなくなると、妻は男に背を向け、漂流者と共に去っていった。

確かな手応えにラスプーチンは口角を釣り上げ、再度機会を与える。

「今、転べばあなた方に国をあげる。黒王様は本当におやさしい。」

「そんなもの、信じられるか。世界廃滅を謳う黒王が!!?。」

「そうでしょうな。だが、今は信じるしかないのだ。たとえそれが処刑場の列の最後尾に周るだけだとしても。お前達は、飲むしか、ないのだ。」

ラスプーチンは公子に詰め寄ると彼の顔を覗き込み、断言した。

「今、お前がこの話を断れば、今日、お前の女房も子供もオークの昼飯になるのだ。これだけは保証しよう。」

男に追従して部下達も公子に決断を急かす。

その瞳に味方がいない事を悟ると公子は拳を一際強く握りしめ、口を開いた。

難民連合軍が下山を開始すると同時に、戦局は覆された。

右翼手前の山にて。終わりの見えない敵をひたすら撃ち続けている兵士の視界の端に白いものがちらついていた。振り返る。が何も無い。気のせいだ、と思い直して視線を戻すと、今度は黒い筒先にひとひらの白い花卉が落ちた。花は落ちると同時に溶けて消えたが、濡れて黒くなった跡が目錯覚ではない事を如実に訴える。

まさかと立ち上がって風上、壕の後方へと視線を向ける。信長から頭を出すなど固く言われていたため、傍の兵士が慌てて咎めるがほどなくして男は山上から滑り落ちてきた大量の雪に底へと沈み、そのまま二度と立ち上がることは無かった。

彼だけでは無い。右翼の一部が背面からの奇襲によつて雪に埋もれ、その場にいた兵士は皆生き埋めとなった。

そこは足がかりに敵兵が続々と壕内へ入り込む。隣接する部隊は事態を把握しきれず呆然としている所を蹂躪された。次の部隊もただでさえ前方の敵に気を取られている上、銃声と硝煙とで視界と聴覚の麻痺しているためかろうじて直前まで敵兵の存在に気づかなかつた。槍で、弩で、斧で次々と薙ぎ倒され、短い断末魔が壕内に響き渡る。

運良く免れた兵士もいたが、我先にと逃げる兵士達に狭い壕内はすぐに詰まり、そこを背後から討たれ、倒れていった。

その最中も冷気が止むことはない。今度は壕を見下ろす位置に氷の足場が出現し、障壁となつて兵士達の前に現れた。続いて何本もの

柱が地中から伸び、天へとその体を伸ばしていく。やがてそれは幾つもの尖塔を備えた白亜の城へと形を整えた。

既に太陽は高い位置にある。それを一身に受けた氷の城は幻想的な眩さを以って兵士達の目を眩ませる。

その隙にオーク兵が城壁を駆け上がり、眼下の獲物を捉える。鈍く光る鏃の色に我に返った時には兵士達は弩による撃ち下ろしを受け、壊滅した。

立て直しを図る間も無く、右翼の壕が次々と破れていく。その報せは間も無く全軍の知るところとなり、他方の兵士らは俄かに浮き足立った。

「落ち着いてください！撃つのをやめないで、撃ち続けてください！」
思わず引き金を引く手を止める兵士達にレイが檄を飛ばすが、効果は無い。レイは仕方なく自分の銃を空に向けて、不意に聞こえた言葉に耳を疑った。

「おい、あれ……動いてないか。」

まさか、と振り返ると丁度うつぶせに倒れた巨人が頭を持ち上げた所だった。兜の隙間から、血に染まった双眸がぐるりと回転し人間達を捉える。

その目が一瞬妖しい光を宿したかと思うと、他の巨人達も呼応するように目覚め始めた。足の残った者は武器を杖に。そうでない者は腕の力だけで起き上がる。

血と汚泥に全身を黒く染め、体を引きずりながら血の川を渡るその姿は地の底から蘇った亡者を想起させた。前線の壕は忽ち戦意を喪失し、武器を捨て泣き叫びながら逃げていく。その恐怖はあつという間に他の兵士達へも伝播し、一挙にと交通壕へと押し寄せた。人が擦れ違える程度の幅しかない交通壕はすぐに限界を迎え、人の壁に隔てられる。待ちきれなくなつた兵士が土塁を登ろうとして射線上に現れ、味方の弾で転げ落ちた。

その隙に空白になった部分に敵の歩兵が殺到する。兵士がいるならいざ知らず、身軽なゴボルトにとって土と木で出来ただけの壁は障害たり得ず、一気に駆け上がるとそのまま壕内へ降り立ち、逃げ遅れ

た背中に刃を立てた。

一つ、また一つと前線の壕が突破されていく。合わせて逃げる兵士の数も増え、レイ達にもその波が迫っていた。

幸いにも巨人の機動力を殆ど失われており、巨人そのものはそれ程脅威ではない。しかし手足を失っても尚、前進を止めないその姿に敵の歩兵の士気は最高潮に達している。

(これが……これが、明智光秀。)

一時でも信長を出し抜き、天下を獲った男。その手腕にレイは驚嘆すると同時に完全な敗北を悟った。

「後退する兵士を援護します。射撃を続けてください。」

言い終えるとレイは腰に下げていた発煙弾を装填し、巨人に向けて発射した。

弾は白煙の尾を引きながら飛び、鎧の隙間から巨人本体へと突き刺さる。すると短い悲鳴が上げて、再び巨人が倒れた。それに喜んだのも束の間。残る巨人の一体が獣のように天へと咆哮したのだ。先程の巨人とは比べ物にならないその巨大な音の塊に、続けて放とうとしたレイの頭蓋が揺さぶられる。

二、三步後ずさり、とうとう耐えきれなくなって膝を折るのと巨人が杖にしていた斧を投げつけるのは同時だった。

斧は回転しながら飛来し、柵を薙ぎ倒してレイの脇の土塁へと突き刺さる。土塁の一部が崩れ、舞い上がった砂埃が視界を覆った。

巻き込まれた者のうち、直撃を受けた者達は幸いであった。彼らは苦痛を感じる暇も、仲間の苦悶する姿も知らぬまま死んだ。

免れた者達は不運であった。彼らは飛び散った破片や暴発に巻き込まれ、地を這いずり悶え苦しんだ。

奇跡的にもレイは殆ど無傷であった。半ば土に埋もれていたが、頬に落ちる血の感触で我に返ると慌てて這い出し、固まった。

這い出した先には神聖隊の一人が斧に擦り潰され、死んでいた。当然レイは彼を知っていた。何度か訓練を共にし、事あるごとに手袋の下に忍ばせた恋人とお揃いの指輪を見せびらかしにくる鬱陶しい人物だったため、よく覚えていた。しかし、レイの頭は認識できなかった

た。サンジェルミの趣味が大いに反映された組織の一員である彼らは当然の如く美形揃いで、顔形は勿論のことその体も彫刻のよう美しかった。

だから叩き潰された羽虫のように、区別のつかなくなつた組織の中に埋もれる姿と彼とが上手く結びつかなくなつたのだ。

砂塵が晴れ、視界が鮮明になると他の被害も続々と明らかになる。膝を立てた姿勢のまま硬直するレイの耳殻を、伝令の声が叩いた。

「撤退！全軍撤退！全軍、廃城に退け！」

水晶にはヒビが入り、雑音混じりの小さな声であつた。その声に固く目を瞑つて土を握りしめると勢いよく顔を上げ、喉が張り裂けんばかりに叫んだ。

「撤退！全軍撤退！全軍、廃城に退け！」

叫び終わると唾が妙な所に入つて噎せた。それが収まると今度こそ立ち上がつて、繰り返し唱えながら後退した。

最早一刻の猶予もなかつた。

右翼では難民達の攻撃が始まつた。中央の壕陣は突破され、そこから敵兵が続々と入り込んでいる。敗北は必至であり、せめて包囲が完成する前に逃げるしかない。

既に被害は甚大だつた。交通壕には兵士が殺到し、あちこちで将棋倒しが発生していた。種子島が暴発し、飛び散つた火の粉に予備の火薬や爆弾に引火し、誘爆が起こっている所も少なくない。

あちこちで白兵戦が行われていたが、どれもすぐに終わつた。既に勝敗は決しており、とうに戦意を失つた兵士に抗う力は無い。ただただ袋叩きにされるばかりであつた。

あちこちから断末魔と助けを求める声が聞こえた。隣を歩いていった兵士がいつの間にか見えなくなつた。呻き声から耳を閉ざし、追いつがる手を振り払い、倒れた兵士を踏み越える。

しかし陣地を抜け、背後に聳える山へと踏み出た所で遂に追いつかれ、交戦を余儀なくされた。幸いにも打ち捨てられた装薬や種子島が大量にあり、弾にも銃にも困る事はない。寄せてくる敵兵を各々蹴散

らし、一度は撃退する。

しかし黒王軍も必死だった。漸く掴んだ好機に黒王軍の勢いは増しに増しており、逃がしてなるものかとすぐに後続が現れた。撃っては現れ、また撃っては現れる。

その数にいいよ弾薬も底を尽き、いいよか、と着剣して向き直り、唾然とした。

突然、敵の兵士が引き返し始めたのだ。

「なんで……。」

理由はすぐにわかった。豊久だ。黒々と蠢く化け物の只中に紅一点、遠目にもわかるその派手な鎧は彼以外の何者でもない。彼はドワーフの兵士を引き連れ、レイ達と反対の方向、敵の渦中へと飛び込んでいた。

鏃矢の隊形を取り、一糸乱れず敵陣の中央を押し進んでいく彼らに黒王軍は動揺し、どこもかしこも足並みが崩れ始めている。

その様子にレイは彼の目的を理解した。

島津の捨てがまり。

ただし、今度のそれが目指すのは薩摩でも鳥頭坂でも、ましてや廃城でもない。黒王の待つ本陣である。

敵の総大将が、自分達の総大将を討ち取りに来ている。その事実には化け物達は最早他の人間の事など目に入らなくなっていた。全軍が豊久達に向けて転換し、背後からも側面からも襲いかかる。

しかし豊久は止まらなかった。

殺気を漲らせ、唸る槍の群れに自ら飛び込むと一気に距離を詰め、敵を一太刀に斬り伏せた。

その超人めいた動きにレイは思わず乾いた笑いが漏れた。

当たり前だ。何者も彼を止める事など出来やしない。血でぬかるんだ足場も、鈍く光る切っ先も、全知全能の神だって誰も彼も止められやしない。

遠ざかっていく豊久の背中に、胸の奥から熱い物が込み上げてきた。初めて出会った夜に、エルフの村で感じた物と同じだった。

だが状況は全く真逆だった。

「豊久あ！」

レイが叫ぶと豊久は驚いて振り返った。一瞬立ち止まったが、レイの姿を認めるとわははと笑って大きく手を振り、またすぐに背を向けて走り去っていった。

その顔はまるで無邪気だった。利害も損得も勝敗も何も無い。一日遊び倒して満足した子供が、友人に別れを告げるような気軽さであった。

「わははは、達者での、わはははは。」

焦がれてやまない男のそれは、残酷なほど眩しかった。

第23話

23.

豊久を殿にサルサデカダンを脱した一行は一路、廃城へと突き進んでいた。道と言つても獣道と大差ない山道で、列は必然的に細く長くなつた。

幸いにして追手はかからなかつたが、平原を抜けてすぐに黒雲が信長達の背後の空にとりついた。敗北を嗅ぎつけて現れたそれは彼らの後をついてまわり、付かず離れずの距離を保っていたが日が傾くに連れて徐々に距離を詰め、やがて夜陰を伴って追いついた。

一粒、二粒。何うように降り出した雨粒は瞬く間に豪雨へと変わり、傷ついた体に容赦無く降り注ぐ。その勢いに誰もが俄雨を期待したが雨脚は収まるどころか雷鳴まで唸り出し、結局夜明けまで止む事は無かつた。

篠突く雨に一行の足取りは一層重くなる。濡れた体に秋の夜風が体温を奪い、絶え間なく注ぐ雨脚が白い筋となつて視界を遮る。ぬかるんだ地面は歩く度に足を沈ませ、染み込んだ泥濘が爪先の感覚を奪う。

続々と落伍者が現れ、隊列はますます細く途切れ途切れになる。

そこへ来て、人間達はまたも漂流者を裏切つた。途中の村には豊久が用意していた馬が繋がれている筈だった。が、抜け目無い村人は敗北の報せを知るや否や馬を奪つて逃げ、信長達が訪れた時には既に影も形もなかつた。

空になつた柵を蹴り飛ばし、村を発つ。腹立ち紛れが主だが、家屋を前に休みたい欲求に駆られ、それを振り払う意図も込められていた。

兵士達から落胆の声が上がるが、信長の表情にもう自分達にそんな余裕など無いと示されて、黙々と従つた。

一刻も早く帰らなくては。と思う一方、信長はもう打つ手は無いとわかり切つていた。

それほどサルサデカダンでの敗北は大きかつた。単なる戦死者だ

けでない、ここまでの道程でも多くの兵が力尽き、倒れていった。

果たして廃城に辿り着くまでにどれだけ残っているか。目減りしていく兵士らにまともな戦いは期待出来ない。精々、城に籠って耐える事だけだ。しかし、それも長くは持たない。

籠城の際、野戦軍の無い城は必ず落ちる。

信長はこの時ほど豊久を憎たらしく思った事は無かった。

(俺は違う、だど。うつけめが。)

鳩尾がずきりと痛む。

別れ際に豊久がよこした一撃だった。信長の言葉も与一の平手も、豊久を止めるに至らなかった。

戦に関しては機転の利く彼だったが、今回に関しては見当外れも無い所だった。幾ら頭を捻った所で状況を覆す案は浮かばず、却って敗北する未来を裏打ちするばかりである。

しかし、信長は進むのを止めなかった。たとえそれが破滅を遅らせる程度の道でしかなくとも、進まないという選択肢はありえなかった。

「どうした、与一。」

村を出た所で与一が振り返るのを見て、声をかける。

目敏い彼の事だ。追手や伏兵に気付いたのかと思ひ尋ねたが、「いえ。」とすぐに向き直ったため、それ以上尋ねなかった。

先頭から大きく遅れた所にレイはいた。信長達との合流こそ叶わなかったが、一応彼女も撤退の列に加わっていた。しかし既に体力の限界を迎えており、いつ脱落してもおかしくない状態であった。

濡れて重くなった服が体力と体温を奪い、ぬかるんだ地面が何度も足元を脅かす。体はどうに冷え切り、足を動かす度に突き刺すような痛みが走る。それに反して銃を握る指先の感覚は無い。しとどに濡れた髪が顔に張り付き、ひたすら不快だったがそれを払う気力すらも残されていない。

後方の列は散開しきっており、歩いている人間よりも倒れている人間の方が多い有様であった。

途中までは足跡を辿っていたが、跳ね返った雨粒が白い靄となって地面を覆い隠してしまったため、所々に転がる死体が唯一の道標だった。

銃を支えにかろうじて姿勢を保つ彼女の足取りは重く、俯いた顔からは血の気が失せ、その口は固く引き結ばれている。

開いたら最後、感情のままに喚き立ててしまおうと分かっていたからだ。

どうしようもない。仕方がない。最初から無理だったんだ。そんな言葉が浮かんでは弾け、重石となってレイの内側に積もっていく。

元の世界でも、何かを成し遂げた事など一度も無かった。他人に誇れるような物など何も無かった。知識も技術も無い自分が出る事などある筈も無く、慌てて書物に縫った所でわかったのはどこまでも自分が無知で、何も出来ないという事実だけだった。

それを認めたくなくて、なけなしのそれに縫って、結果はこの様である。

漠然とあつた万能感が洗い流され、曖昧だった自分の輪郭が明らかにされていく。濡れた服に浮き出た本性はあまりにも幼稚で浅ましく、無力だった。

遅れて辿り着いた村にはやはり信長達の姿はなく、代わりに力尽きた兵士が柵に、軒下に、家の中に転がっていた。

わかっていて。が、村を見つけた瞬間、期待してしまった。しかし、横着な心が寄る辺を求めて視線を彷徨させた。誰でもいい。誰でもいいから、側にいてほしい。

しかし周りにあるのは物言わぬ骸ばかりで、唯一の連絡手段である水晶も長らく応答が無い。

掻き消すような雨音が静寂を際立たせ、レイの孤独を浮き彫りにする。

次第に嗚咽が込み上げてくる。堪えようとしても一度切られた堰はずぐさま崩壊し、やがて何もかも溢れるまま零れ落ちた。

目の奥が熱く歪み、頭がズキズキと疼く。頬に流れるのが雨なのか、自分のものなのかすらわからない。ただでさえ悪い視界がますます

す濡れて判然としなくなると、心細さが一層募った。

寒い、寒いと訴えるように体が震え出す。それを抑えようと腕を伸ばして。

「あつ。」

支えを失った体はそのまま前へと倒れた。

派手な音を立てて、泥濘の中に沈む。寸前で顔を逸らし、手をついたが頭のとっぺんから爪先まで泥に埋もれた。

ぬるい泥の感触に辟易しつつ、反射的に閉じた目を開ける。すぐ目の前には同じように倒れている死体があり、死んでから時間が経っていることが漏れ出た物の臭いでわかった。

体を起こそうとする。が、倒れた拍子に歩き方を忘れたのか、思ったように動かない。泥を掻き掻き、やつとの事で起き上がると、今度は足が地面に吸い付いて離れない。原因から解放された足から、僅かに痛みが引くがすぐに蓄積されたそれが取って代わり、熱を持ってレイを苛んだ。

(どうすれば、良かったんだろう。)

もつとたくさん地雷を用意すれば良かったのか。それとも無茶でも夜襲の一つでも仕掛ければ良かったのか。

自分ももつと優秀だったら、と詮無い考える一方。彼女自身、そうだとしても状況が変わっていなかった事は理解していた。

戦争とは人の営みの一部であり、一つの集大成。信長の言葉を借りれば「それまでしてきたことの帰結」であるとレイは考えている。

仮にレイが優れた技術者で兵器を作る知能と技術があり、それが作れたとしよう。

しかし、作れる事と運用出来る事には大きく差がある。更にその機能を理解し、有効に使えるかどうか。気候は、地形は、費用対効果はといった諸々の事情を加味しなければならぬ。

つまるところ、レイに出来る事など何も無い。あつてもそれが戦を大きく変えるような事にはならない、という事だ。最もその事を理解できるようにしたのはごく最近、この世界に来てからののだが。

それでもレイはやめられなかった。もう何もかもわからなかった。

自分が何故ここにいるのか、何をすべきか。戦い方も、歩き方も、行き先も帰り道もなにもかもわからなかった。

いつそシャイロックの誘いに乗ってしまえば良かった。航空戦力の有無による優位性は知っていた。だのに自分はちっぽけな女の矜持を優先させて、といよいよ思考が危うくなった頃。背後から男の声がかかった。

「あんた。どうしたんだ？こんな所で。」

人がいないと思っていたレイは完全に虚を突かれた。すかさず振り返り、種子島を構えるレイに対して男は両手を上げて敵意が無い事を示す。

「お、落ち着けて、何もしねえよ。な、あんた、ひよつとして漂流者か？……やっぱり！その格好、見覚えがあつたんだ。」

男の背に種子島がある事に気づいて、レイはやつと彼が生き残りだとわかった。みるみる表情が崩れ、銃を下ろすレイに男も腕を下ろしつつ、周囲を見回す。

「あんただけか？他の奴らは？」

顔を拭いつつ頭を横に振ると、男は落胆とも安堵とも言えない奇妙な表情を浮かべた。その表情が引かかったが、自分自身男と会えた事に喜ぶ一方、信長や与一でなかった事に気落ちしていたため何も言わなかった。

聞けば、男の他にも数人生き残りがおり、村から離れた場所にある水車小屋で休んでいるらしい。中には手の施しようがない者もあり、「せめて最後までいいは暖かい場所で……。」という思いから危険を承知で暖をとっているという。

男の言葉にレイは暖かい暖炉前の光景が浮かび、続けて在りし日の廃城での団欒を連想した。理性が揺らいでいるのを見抜いた男はレイの手を引いて立たせ、案内しようとする。が、冷えた男の手に驚いて振り払った刹那。男の顔が気色ばんだのを確かに見た。今度こそ不穏な気配を悟り、後退って種子島を構えると男の顔から表情が消えた。

無言のまましばし睨み合う。銃剣を突きつけるレイに対し、男は背

中に差したままである。しかし、焦るどころか抜く気配すら無い。風雨に晒されたレイの手が既に隠しきれない程震えていたからだ。先に動いたのは男だった。刃物を突きつけられているとは思えないほど、緩慢な動作で背中から銃を抜くとレイも弾かれたように動き出した。

踏み出すと同時に男の顎へと銃剣を突き上げる。しかし震えた手では速度も威力も足りず、あっさりとなさされる。そのまま背後へと回り込まれ、無防備な後頭部に男の銃床がめり込んだ。

脳が揺さぶられて猛烈な吐き気が襲いかかり、思わず膝を折る。反射的に前に出そうとした手の片方を男の腕が捉え、後ろへ捻る。そのまま地面へと押し倒し、その衝撃で肺から空気が押し出されレイは短く喘いだ。

残る腕も同じように後ろに回し、背中側で縛り上げる。抵抗をする暇も無かった。最後に猿轡を噛ませると一旦体を離し、困惑するレイを見下ろして告げた。

「あんたを廃棄物に引き渡す。」

吐き気と痛みで朦朧とする意識の中、レイは男に担がれて水車小屋の手前までやってきた。生憎、位置の問題で水車そのものは見えなかったが水の跳ねる音と、軋む音からそうだとわかった。

崖側に立つそれは小屋というには立派な造りの二階建ての建物だった。最大の特徴である水車は崖下、レイ達のいる地点を基準とすると地下にあたる部分にあり、回転こそしていないが勢いを増した水を受けて中途半端に傾いたまま、軋む音を立てている。

建物は川を挟んだ対岸にあり、手前に架かった橋を渡ると男はまず併設する作業員用の住居の扉を叩いた。中から現れた男はレイを見るや声を上げかけたが、咎められて慌てて口をつぐむと再び中に消え、今度は水車小屋の鍵を持って現れた。

小屋の扉を開けると入ってすぐの左手の階段を降り、地下の部屋に

レイを下ろした。地下は剥き出しの基盤が部屋の殆どを占める、天井の低い妙な圧迫感のある一間である。

睨みつけるレイに対し、男はレイから猿轡を外して階段に腰掛けた。

「あんたと引き換えに、黒王に慈悲を乞う。」

「……本気で言ってるんですか？人類廃滅を謳う彼らに、本気で？」

理解できないと言外に訴えるレイに対し、男は悪びれもせず続けた。

「総大将が死んだんだ。もうどうしようも無いだろ。どっちみち死ぬなら、少しでも分がある方につくだけさ。」

目の奥がかつと熱くなり、胸焼けにも似た不快感が込み上げた。噛み殺してやりたい衝動に駆られかけたのをかろうじて理性で押さえ込み、言葉を続ける。

「私は手土産ってわけですか。」

「話が早くて助かるよ。明日、夜明けと同時に立つ。それまで大人しくしてろよ。」

言いながら、腰を上げる男にレイは吠えた。

「恥ずかしくないんですか。」

男の動きが止まり、レイは畳み掛ける。

「あなたにだって家族や友人がいるでしょう。その人達を裏切って、どんな顔して会いに行くんですか。」

言いきらぬ内に男の爪先がレイの顔面を抉った。口と鼻から血を撒き散らして後ろに転がるレイを足で押さえつけ、今度は鳩尾に踵を落とす。

「先に裏切ったのはお前らだろうが。」

何の話だ、という言葉は声にならなかった。

「降伏すれば助けるって、お前らが言ったんじゃないか！なのに……なのにあの野郎……！言うに事欠いて、腹切れだあ？頭おかしいんじゃないのか、なあ、おい！」

男が何の話をしているのか、全くわからなかった。男は自分の言葉で余計に興奮し、更に追撃を加える。

頭に、胸に、腹に、足に。男の足が何度も振りかぶっては食い込む。その度にレイは体を硬直させて悲鳴を上げた。

「おい、よせつて。死んだらどうすんだよ。」

見かねてもう一人が止めに入ると、男は息を切らしながらようやくレイを解放した。もう一人の方は、灯りを手にレイの顔を覗き込む。

「あーあ、勿体ねえ。これじゃ使えねえよ。」

「知るか。」

「つたく、しよーがねえな。」

言いながら男は部屋の隅から袋を引っ張り出し、レイの頭に被せた。意図を察して頭を振るが顎の下で縛られ、固定される。裾を捲り上げられ、下半身の形が露わになった。必死に隠そうと膝を内側に腹の方へと引き寄せるが、

男の膝の裏へと回るとあっさりとは開かれ、男の膝が足の間を割って入った。

「おい。」という男の声に、下穿きを掴んだ手が止まる。その声にレイは情けなくも一瞬期待してしまっただが、続いた言葉は彼女を更に追いやるものだった。

「やるなら口に噛ませてからやれ。舌を噛み切られたらかなわん。」

「先に言えよ、そう言うことは！ちっめんどくせえな……。もういやめんどくせえ。」

再びレイの顔が露わになる。男は再度猿轡を噛ませ直すと、袋を被せないまま今度こそレイの下履きを剥ぎ取った。

第24話

24.

事が終わると男達はレイを残して住居の方へと戻っていった。扉が閉まり、砂利を踏む音が遠ざかっていく。いつまで経っても入れ違いにやってくる音が聞こえないとわかると、やっと終わったのだとわかった。強張っていた体から力が抜け、恐怖に押し潰されていた感情が堰を切って溢れ出す。

許さない、許さない、許さない。殺してやる、殺してやる、殺してやる。

声にならない怨嗟がすすり泣きとなって小屋内に響く。地下の部屋の隅には服を剥ぎ取られ、露わになった体を横たえるレイの姿があった。その体は男達によって隅々まで暴かれ血と精液で汚されている。すぐ側に川が流れているにも関わらず、室内は熱気に満ち、汗と汚物の臭いが充満していた。

長時間押さえつけられていた膝は痺れて感覚を失っており、漸く閉じようとして溢れ出た物の感触に息を呑んだ。血とは違う粘度を持ったそれは時間をかけて落ち、尻や太腿を汚していく。

思わず膝を閉じて体を縮こませたが、抑える術も塞ぐものも無い体ではどうする事も出来ず、レイはじっと収まるのを待つことしかできなかつた。

最初に会った男の言葉に嘘は無く、小屋には彼を含めて十数人の男が待機していた。彼らは代わる代わる現れてはレイを犯し、終わると怪我人の世話に戻った。

最初のうちは体を引き裂く激痛に泣き叫び、突き上げられる度に体を硬直させていた。が、数を重ねる毎に体が慣れ、次第に男に合わせ体を揺らすようになった。それは少しでも苦痛を和らげるため、或いは行為を早く終わらせるための無意識の回避行動であり、突き詰めればただの反応にすぎなかつた。しかし、男達からすれば快樂に屈服した証であつた。

これがいいのか、ええ。こうされるのがいいのか。どうせあいつら

ともやってるんだろう。どうだ、俺の方がいいか。

打ち付ける腰の動きに応じるように声を上げ、身悶えするレイを男達は嘲弄し、思いとは裏腹な反応を示す体に、レイは自分の体にすら裏切られたと感じた。

どうやってグービンネンのガキをたらし込んだのか、教えてくれないよ。

レイが否定すればするほど男達の笑みは濃くなり、言葉は熾烈になつた。

姿を消しても尚耳に残るその声は、頭の中でしつこく反響しては陵辱の記憶を呼び戻す。それに呼応するように痣となつた箇所が熱を帯び、男の感触が蘇つた。

再び体が強張り、縄が食い込む。それだけで動けない自分に、嫌が応でも無力さを思い知らされる。

〔IMG103896〕

(どうして……。)

その言葉だけが何度もレイの中で繰り返される。

どうして、何もできなかったんだろう。どうして、こんな目に遭わなければならぬんだろう。どうして、いつまでたっても助けが来ないんだろう。

たった一言ではあるが、諸々の意味の籠められたどうして、だった。その問いに答える者はいない。返ってくるのは雨風が小屋を叩く音と増水した川の音だけである。

堂々巡りの末にレイの意識は理由を求めて過去へと遡つた。

どうして、国盗りになんて参加してしまったんだろう。どうして、彼らと出会ってしまったんだろう。どうして、私がこの世界に呼ばれたんだろう。

どうして、どうして、どうして……。

自問自答の果てにやがて記憶を掘り尽くすとレイの問いは再び最初の問いへと戻ってきた。その頃にはいくらか痛みも引いて、自問と向き合える程度には落ち着いていた。

どうして、何も出来なかったんだろう。

思えば、反撃する機会はいくらでもあった。放り投げられた腰帯には短刀がぶら下がったままで、少し手を伸ばせば届いていた。中には一際レイの体に夢中になった男もいた。その気にさせて縄を解く事だっただけ出来たかもしれない。

しかし、何も出来なかった。抵抗すら出来なかった。怯えて竦み、漫然と彼らの暴虐を許した。彼らの気が済むのを待って震える事しかできなかった。その理由がレイにはわからなかった。

今までも恐ろしい思いは散々してきた。

エルフの村で、廃城で、ドワーフの工廠で、首都で、サルサデカダで。数えきれない敵と対峙し、時には身が竦む事もあったがそれでも戦意を失うなんて事は無かった。それらに比べれば彼らなど、取るに足らない相手にしか思えなかった。

今までの敵と彼らとで一体何が違ったのか、彼らの何がレイから戦意を奪ったのか。

悩んだ末、原因が彼らではなく自分にある可能性へと行き着くと、すんなりと答えが見つかった。

味方の有無だ。

全ての戦いにおいて、レイは誰かしらと一緒にだった。

そもそもレイは特別強くもなければ格闘経験があるわけでもない、一般人だ。勿論戦闘の経験は皆無で、喧嘩ですら精々子供の時分に殴り合いの喧嘩をした程度だ。豊久や神聖隊に鍛えられて多少打たれ強くはなったが、それでも種子島という武器と集団戦術があつてようやく渡り合える程度の実力だ。

その程度の自分が何故一人で立ち向かえると思うのか。その闘志は一体どこから生まれるというのか。

自信の根拠に疑問を抱いた途端、己を奮い立たせていたものの正体に気づいてレイは愕然とした。

自信なんて、あるわけがない。意志など最初から存在しなかった。

あつたのは、ただの驕りと陶醉。特別な世界で特別な人達に囲まれているという優越感。そんな自分もまた、特別な人間に違いないという稚拙な願望。

一度認めてしまえば、あとは考えるまでも無い。

己の器量を履き違えた人間が驕り高ぶって破滅する。あまりにも月並みなその内容は、現実にも虚構にも溢れている。これまで嫌という程目にしてきた。

その度に、ああはなりたくないと思つたものだが、まさか自分がそちら側になるとは思いもしなかった。

否、その思考こそが既に驕りなのだ気づいて、レイは嘆息した。
(どうしようもない。)

人間至上主義を掲げ、エルフやドワーフを踏みにじつたオルテと何が違うのか。他人の権威を笠に着て威張り散らし、自分を立てる為に相手を見下す。そうする事でしか自分を保てない、空っぽな人間に彼らと一緒にいる資格があるのか。いつそのまま殺された方が、皆にとつてもこの世界にとつてもいいのではないか。空っぽな人生しか歩めなかった、空っぽな人間には順当な結末じゃないか。

そう思うと急に体が軽くなって、清々しい気分にするなれた。己の卑小さを受け入れた時、自身を取り巻く何もかもが無価値に思えて、今感じている苦痛すら何の意味も見出せなかった。

男達への怒りも薄れて、寧ろ憐れみすら覚えた。空の体にいくら吐精したところで何の意味があろう。こんな物に必死になって、腹の上で得意げに優劣を競い合う彼らが滑稽ですらあつた。それを後生大事に取つておいた自分も何もかも馬鹿馬鹿しく、虚しくなって思わず深々と溜息が漏れた。すると脱力した体に強い倦怠感と疲労感が主張しだしてレイの瞼を閉ざしにかかった。

特に抗う理由も無く、素直に応じると三秒と経たずにエルフの森がそこに現れた。走馬灯か明晰夢かはさておき、現実ではないのは明らかだった。

そこには信長や与一、エルフ衆だけではなく、親方を始めとしたドワーフやサンジェルミの一味も、豊久もいたからだ。皆、口々にレイの帰還を喜び、労わってくれる。

笑ってしまうくらい陳腐で都合のいい夢だったが、もうどうでもよかった。今更彼らに合わす顔など無い。それに夢でも幻覚でも、もう

一度彼らと会えた事を純粹に喜びたかった。皆と再会の喜びを分かち合う中、豊久が輪から抜けるのが見えた。その背を慌てて追いかけて、捕まえようと伸ばした手は「いらん。」と弾かれた。

「ぬしやらが黒王ん首ば取りに行くなら、俺も行って首ば掻き取ってやっど。ぬしやらがえんずば倒して郷里ば取り返しに行くなら、俺も行ってえんずば皆殺しにしてやっど。」

ぬしやらがそいでつたなく死んだなら、俺も一緒に黄泉路ば魁けちやっど。

共に行く者に俺は何でんしちやる。俺の命ばくれちやる。共に行かん者はいらん。いらんからここで死ね。

ここはどんづまりのどんづまり、泣いて喚いてめそめそ死ぬなら、腹裂いてさぱつと死ね。」

それはレイに向けられたものではなかった。首都で、政庁舎に難民が押し寄せてきた時に彼が難民に対して放った言葉であった。

すると瞬きする間に周りの光景は首都のそれへと変わっていた。レイはあの時と同じく、政庁舎の窓からその様子を見下ろしていた。

故郷と家族を奪われ、逃げてきた難民に対して暴言としか言いようのない台詞である。慈悲の欠片も無いその言葉に難民が呆気に取られ、静まり返る中、真つ先に追従する男の姿があった。後に難民連合の長を任された男である。決起を表明する彼の言葉に豊久が目を細めて笑う。先程暴言を吐いたとは思えないほど、暖かく慈しみに満ちていた。

それを機に難民達の様子が変わった。立ち上がる者がまた一人現れ、今度は皆に決起を促す。同じ苦難を味わった者だからこそ、その言葉は難民達の心により重く強く響き、俄かに活気を取り戻した。

それを受けて最初の男も決起を促すと熱気は一気に膨れ上がり、遂に豊久を中心に爆発した。

「泣こかい跳ばかい、泣くよかひつ飛べい。」

言うより早く、豊久は飛び出していた。すると民衆は一斉に両脇に逸れ、一本の道が開かれる。その先には一頭の竜が待機していた。豊久はまっしぐらに駆け抜けて飛び乗り、拍車を打つとそのまま飛び

立っていった。

その姿が遠ざかり、やがて見えなくなるまで窓際に立ち尽くしていたレイは小さく笑った。

(どうしようもない。)

夢の中ですら思うように出来なかった。都合の良い幻影に縋ろうとして、それすら失敗してただ見ている事しか出来なかった。

しかし、何よりもどうしようもなかったのはそれを喜んでいる自分自身だった。

(本当にどうしようもない。)

思い出すだけで胸が熱くなった。見ているだけで何か急ぎ立てられるような気分になって、居ても立っても居られなくなる。どこまでも真つ直ぐな彼が、死地へ飛び込む姿はひたすら眩しくて悲しいほどに美しく。自分にも何か出来るんじゃないか。否、何だつて出来る。そんな気が湧いてくる。

レイにとつて島津豊久とは、そういう男だった。

夢から覚めてレイは水車小屋の天井を見上げた。森の闇に鍛えられた目には板張りの床も柱の木目すらもはつきりと見える。

横たえていた体を起こすと痛みが蘇って、レイを妨げた。が、まだ動けた。軽く頭を振って張り付いた髪を払い退けると、こびりついていた物がパリパリと音を立てて落ちた。

階段を上がり、扉に手をかける。当然鍵がかかっていた。欠けた鎧戸の隙間から外の様子を確認するともう時間がない事が伺える。一、二階部分も一通り見て周り、再び地下へと戻ってきたレイは剥ぎ取られ、部屋の隅に追いやられた装備を確認した。

服は悉く破かれていたが、それでも原型を保っている。荷物は丸ごと奪われていたが、小屋には作業に使用する道具やその際出た物などがそのまま置かれている。

さてどうしたものか、と思考を巡らせようとする。と、足の間を貫く痛みが抗議するように一際強くなった。

お前に何が出来るんだ、ただの女に過ぎないお前が。執拗に骨盤を軋ませ、そう訴えるが黙殺した。

くだらない幻想だと分かっている。

端から見れば、空想と現実の区別のつかない人間。大人になり損ねた醜い子供のわがままだ。

それでも、どうしようもなかった。あの光景が胸に焼き付いて離れなかった。焦がれてやまなかつた物を目の前にして、手を伸ばさずにいられなかった。

不相応な欲は身を滅ぼす。しかし、求めなければ何も手に入らないのだ。ならば、求め続けたい。

たとえそれが破滅への道でも、人の行き着く先は結局同じなのだからきつとそこで豊久と会える。その時、胸を張って会えるよう、レイは歩き続ける。もう一度、豊久に会うために。

今度こそ、その隣を走るために。

夜明け近く。人心地ついて微睡みの中にいた男は、雨音に混ざる水車の回る音に、はたと目を覚ました。

作業員のための併設する住居で、入ってすぐの部屋は居間兼台所である。壁際には炊事場を兼ねた暖炉があり、吊るした鍋の湯を沸かしつつ室内を暖かく照らしている。元々あった家具は部屋の隅に追いやられ、代わりに部屋中に藁と布が敷かれて怪我人が寝かされていた。

他にも同じように休んでいる仲間や、怪我人を世話している者があり、その内の一人が男のただならぬ様子にを気づいて振り返った。

「どうした？」

「水車が動いてる。」

水車は消耗品だ。使用时以外は歯が回らないよう工夫がされており、この小屋も例外ではない。自分達の為に多少家探しはしたが、当然水車の機構部分には触れていない。

壁に立てかけていた武器を取って休んでいた一人を起こし、外へ出る。するとやはり、独特の軋めく音と水の落ちる音がはつきりと聞こえ、間違い無いと確信した。

互いに無言で目配せし、片方が扉につき、片方が武器を構える。扉

についた方は耳を押し当て、中の様子を伺うと再び目で領いた。すぐに反撃に出られるよう警戒しつつ、再度目配せし、一気に開く。

「……っ早く降ろせ！」

男は慌てて武器を下ろして突入し、そのまま二階へと駆け上がる。男の尋常では無い様子にもう一人は一瞬呆気にと取られつつ、目で追いつき、息を呑んだ。夜明け前の一際闇の濃くなる時間帯。小屋の中は灯り一つ無く、手持ちの龕灯だけが光源だった。その中で入ってすぐの真正面、上下に荷を移動させるための吹き抜け部分に女の爪先が揺れていた。

遅れて中に入り、その体を持ち上げようと抱きかかえるのと違和感に気づくのは同時だった。

「ぎゃあっ！」

と、二階から上がる短い悲鳴に男が顔を上げた瞬間。頭上から落ちてきた大量の麦袋に首を押し折られ、即死した。落下の衝撃で袋が弾け、大量の粉が舞い上がる。残る一人は二階に上がった所で、床板が割れてそのまま真下に落下。しかけたが胸の高さの所で止まり、危うく機械に巻き込まれずに済んだ。

物音に気付いて起き出した他の男達は切迫した男の声に一気に覚醒し、外へ飛び出す。そして女の服を着た詰め物と下敷きになった男と、床板を突き抜けぶら下がっている男を見て唾然とした。再度男に急かされ、我に返って男を引き揚げる。床に降ろされ、ようやく摺り潰される恐怖から解放された男は震えながら膝をついた。そのまま蹲るかと思われたが、二、三度肩で息をすると顔を上げて小屋を飛び出した。

戸惑う仲間に

「まだそう遠くに行っていない。それに女の足だ。すぐに追いつく。」

と言つて走り出すと男達は取り残される恐怖からか、レイへの憎悪からか定かではないがまごつきながらも彼に従った。

男の言葉通り、レイは水車小屋のすぐ近くにいた。正確には小屋の手前にかかる橋の下に身を潜めていた。橋脚と己の胴体とを縄で固定し、じつとやり過ごしていた。頭上を慌ただしく男達を通り過ぎ、

去っていくのを確認すると這い出し、再び小屋へと戻る。扉を蹴破つて中へ入る。と、看病のため残っていた男が二人、何かと振り返りレイの姿を認めた。逃げた筈の女がいる事に驚き、戸惑って動きが止まる。その脇へ石を投げつけ、鍋をひっくり返すと火に落ちた中身が蒸気となつて男達に襲いかかった。男達が怯み、意識の逸れた隙に距離を詰め、まずは一人。膝を横から碎き、体勢を崩した所へ濡れた土を詰めた袋を振りかぶつてこめかみに叩きつけた。

残る一人は仲間の頭蓋が碎かれる音に我に帰り、薪割り斧で応戦しようとした。しかし昏倒した仲間を盾にされ、誤つてその頭蓋に振り下ろした。頭の半分ほどめり込んだ所で思わず手を放し、呆然と後ずさる男の顔に今度は灰が叩きつけられる。悶絶している所を同じように足を取られて転倒。頭を強打され、沈黙した。

完全に動かなくなったのを確認後、無意識に止めていた息を吐き出す。顔にかかった髪を耳にかけて、改めて室内に目をやると歩く事すらままならぬ男達が部屋の隅、あるいは寢床から出られないまま震えていた。

レイは再び溜息を吐くと、死体から引き抜いた斧で肩を叩きつつ男達に問いかけた。

「私の荷物、知りませんか？」

荷物を回収し終え、服を取りに作業小屋へ戻った所へ捜索に出ている男達が戻ってくるのが聞こえた。

思いの外早い帰還に仕方なく下着だけ回収して火を放ち、小屋から離れる。今度は木立に紛れてやり過ぎし、入れ違いに道を下りていると背後から男達の悲鳴と怒声が聞こえた。振り返ると小屋から火の手が上がっており、男達は消火が先か避難が先かで慌てふためいている。遅れて戻ってきた男達も同様にやり過ぎし、悠々と道を降つていると背後からレイを呼び止める者がいた。

「よくもやってくれたな。よくも……！」

息を切らし、血走った目で向かいくる姿は鬼神の如く。しかし、振り返ったレイの言葉に足が止まった。

「いいんですか？助けなくて。」

小屋に残された兵は寝返りすらままならない者も多く、そうでない者はレイの手で拘束されていた。男は数秒苦渋に顔を歪ませて唸ると、意味のわからない言葉を吐き捨て小屋へと走っていった。

その背中を達成感に満ちた顔で見送っていたが、やにわに表情が失われていく。

（あの時の方が、楽しかった。）

気づいた途端、喪失感に胸を埋め尽くされた。

炎は勢いを増し、とうとう小屋全体を嘗め尽くし出す。いつの間にか雨が弱まり、東の空が明るくなっていった。

再び歩き出したレイは村を通り過ぎ、元の道へと戻るとまた死体を頼りに歩き出した。その後、二度と振り返らなかった。